「何だらう。」
と云ひ合つて居る中に、窓が白んだ。
半偈は身を起した。
「夜が明けた。出立しようではないか。こゝは善い處ではない樣だ。」
「さうです。行李を持ち出せ。一戒を起して來よう。」
と小行者が云ふと、沙彌は荷物にかゝつた。半偈は小行者と下りて來る。
「一戒は居りませんよ。」
なるほど馬と草ばかりある。
「一寸出たのだらう。」
沙彌も行李を持つて下りて來た。
「どうして居ないのだらう。逃げたのかな。」
「そんな事はない。何か食ひに行つたのだらう。」
半偈は思ひ出した。
「捕へられたのだらう。」
「どうして分ります?」

「魔物どもがさう云つた。虛言かと思つたが、本當らしいぞ。」
と云ひ合つて居る處へ、老婆が出た。
「御早い事ですな。」
「先を急ぐからな。」
「では、御粥をこしらへませう。」
と云つて、臺所へ行かうとするのを、小行者は留めた。
「御尋ねするが、一體こゝは何の國?」國の王は何と云はれる?」
老婆はほゝゑんで、
「まあ早く御粥を召し上つて、御立ちなさい。そんな事を御尋ねになるものではありませんよ。」
「では聞かないが、あの口の長い、耳の大きい和尙が、見えない。どうしたのだらう。捕へられた、と云ふ話があるが。」
老婆は吃驚して、
「昨夜、こゝに入らつしやつたのが變だと思つて、何か起りはしないかと心配して居ましたが、たうどう起りました?」
「一體どういふ事なのだ?」

「實は、こゝは羅刹鬼國と云つて、國王は大力鬼王と云はれます。こゝの人は、著るものも、喫べるものも變りませんが、みんな人ではなくつて、鬼なのです。こゝの食物を召し上つてはいけませんから、粗末でも粥を差上げましたのです。あの和尚さんは、『不味い。』と、ぶつ〳〵云はれましたから、きつと街に出て何か食べて、それで捕へられたのではないでせうか。」

「きつとさうだ。だが、昨夜いろ〳〵の贋物どもが來たが、一體誰が寄したのだ？」

老婆は考へた。

「大方それは太子樣でせう。あの方は徒ずきですから、あなた方變つた方が入らつしやつたので、侮弄に寄されたのでせう。」

「さうか。が、さう云ふ御前は人なのか、鬼なのか。」

「人ですよ。鬼なものですか。」

「人でありながら、何でこゝに居る？」

老婆は答へる。

「それはかういふ譯です。こゝから東南千里の處に翠雲山と云ふのがあります。こゝに仙女で、羅刹と云ふ方が居られます。この方が仙人になられたので、その御蔭で、夫の大力王はこゝで、この御國を開きになつて居られます。その德を稱へる爲めに、この御殿も作られたのですが、

羅刹仙は鬼が御嫌ひですから、私を寄されましたので、こゝに住まつて居るのです。あなた方には鬼の食物はいけませんから、昨夜も、山から持つて來た粥を差上げたのです。」

小行者は聞いて、

「さういふ譯なのか。それは辱ない。しかし、弟が歸らないとすると、自分が出かけて連れて來るより仕方がない。」

半偈が聞いて云ふ。

「何と云つても、相手が國王だ。馬鹿にしてはいけない。」

「承知しました。一寸行つて參ります。」

鐵棒を提げて出て來ると、宮殿はすぐ分つた。朱の扉の門があり、碧い瓦、黄色な墻、雲を衝く樣な高い棟、まことに帝王の住居だ。だが、日の光がなくたつて陰々として居て、御香の雲も棚引かなくて鬱々として居る。朝の事だから、朝臣どもが列を作つて出勤して居る。その中を小行者は押し分けて、

「おれの弟を早く遣せ。」

と雷の樣に叫ぶ。その勢に恐れて、そこに居たものはばら〳〵に遁げ出したが、黄門鬼と鎭殿將軍とは、さすがに踏み止つた。

「こゝは宮殿だぞ。何處の坊主だ。無禮な奴だ。譯を云へ。取次はしてやらう。」
小行者は、
「昨夜、弟の猪一戒を捕へたらしいが、一體何處に隱して居る？　早く連れ出せ。ぐず〳〵する
　と、この鐵棒で誰でも彼でも叩き殺すぞ。」
と叫ぶと、黃門鬼は狼狽て內へ駈け込んだ。
「大變です。大變です。」
「何だ。」
「表に變な坊主が鐵棒を提げて來て、『弟を還せ。』と喚いて居ます。」
「變だな。そんな事は聞いた事もない。何かの間違だらう。」
と大王が云ふので、出て來てさう云ふと、小行者は、
「さうか。國王は御存じないかも知れん。しかし、太子は御存じの筈だ。」
と云ふので、黃門鬼はまたその通り申すと、大王は、
「或はさうかも知れん。太子を呼べ。」
と云はれる。その旨を傳へると、却つて官女が二人來て、
「娘々が『大王樣に奧御殿に御出でが願ひたい。』と仰つしやいます。」

と云ふ。大王は、「何事か起つたのか。」と奧殿に來て見ると、玉面娘々は、梨の花が雨に打たれたやうに泣きながら床に伏さつて、
「大王樣、どうぞ私の仇を取つて下さいまし。」
と云ふ。
「何事だ。詳しく云はなければ譯が分らん。」
「あの猪八戒を太子が捕へたのです。昔、私どもを塵にした猪八戒を……。どうぞ八つ裂きして下さいまし。」
「それは間違だ。あの猪八戒は經を持ち歸つた功德で、淨壇使者になつて居て、自分も折々見て居るのだ。それが捕へられる譯はない筈だ。」
「いゝえ、猪八戒ではありませんが、その子の猪一戒です。親の罪は子が償ふのが當然です。」
「どうして分つた。」
「長い口、大きな耳が猪八戒そつくりですし、又自分も『子だ』と申しました。」
「それならば通してもやれまいが、……今、門外で『還せ、還せ。』と喚いて居る奴がある。どうしたものかな。」
娘々は恨んで、

「何です。あなたは以前は大變な御威勢でしたが、今はそんな坊主を怖がるなんて、すつかり弱つて御しまひになりましたね……。」

大王は眞赤になつた。

「よろしい。急ぐな。うまくやつてやる。」

と其處を出て、大殿に來て黄門鬼に、

「あの和尚に、『すつかり探したが、そんなものは居ない。』と云へ。」

黄門鬼が出て、さう云ふと、小行者は、

「そんな事はない。よしおれが探がす。」

と云ひながら、内へ駈け込む。鎭殿將軍は、

「こりや無禮だ。」

と留めるが、小行者は、

「おれの力を見せてやらう。」

と鐵棒で、塔を一搗きすると、がらゞゝと音をたてゝ一角が崩れてしまつた。

役人は狼狽て大王に云ふと、大王は怒つた。

「おれが出て相手になる。」

と云ふが、體面に拘はる。で、鬼兵を繰出して捕へさせようとするが、それには時間がかゝる。

「まあ御靜まり下さい。猶探がさせます。すこし御待ち下さい。」

と云はせた。で、小行者は待つて居ると、金鼓の聲が天に響いて、各營處の鬼兵どもが、鎗、刀、劍、戟と各種の兵器を振り廻して、群がつて小行者を取り圍んだ。

「馬鹿坊主、死ぬよりもましだ。早く降參しろ。」

小行者は笑つた。

「天神天將でも、おれの鐵棒には敵はなかつた。こんな鬼の兵隊ども、何の手並があつて、大口を叩くか。鬼の中の鬼になる積りか。」

と鐵棒を右に廻し、左に振る。黄な龍が尾を奮ひ、白い虎が身を飜す樣、近づく事も出來ない。

黑孩兒太子は、鬼兵が小行者に打ち挫がれるのを見て、「こりや大變。」と、口から一筋の氣を吐き出した。と、それが、陰風となつて吹きかゝると、騷々、習々と云ふ音が物凄く響いて、沙や灰が一度に立つて、暫くの中に天も昏く、地も黑く、向ひ合ふ顏も見えぬばかりになつた。小行者は鐵棒を振り廻すが相手が見えない。「歸つて師匠にこの事を云はう。」と思ふが、方角が少しも分らない。「これでは溜らん。」と急に身を跳ね上げると、百十丈ばかり上つた。と、こゝでは太陽がちやんと見える。そこへ昴星が通りかゝつた。小行者は呼び留めた。

「星君。暫らく御止まり下さい。御尋ねしたい事があります。」
昂星はふり向いた。
「何か御用ですか。忙がしい處ですが……。」
「『日に私なし。』と云ひますが、どうして、羅刹國を一時に暗くしたのです?」
「『日は明らかでも盆の下は照らさない。』あの羅刹國は幽冥の國ですから、日の光の及ばない處です。私の力には及びません。急ぐから失禮します。」
と飛んでしまつた。
小行者は呆れたが、鬼國の暗い譯が分つた。「これは冥途に入つて聞くに限る。」と思つて、飛んで其處に行つた。
冥途では、小行者が飛んで來たので、小鬼が驚いて十王に告げる。十王は出迎へた。その中の秦廣王が、
「あなたは西に御出になつた筈だが、どうして此處に御出になつたのです?」
「一寸御教を願ひたい事があつて來たのです。」
「それはどういふ事ですか。」
小行者は羅刹國の事、猪一戒の事を云つて、

「國王と云つても鬼の事です。それは、此方の御領分と思つたから參つたのです。」
「そりや、さう御考にもなりませうが、あの國王の大力王は、鬼であつても仙人に近いのです。」
「變ですな。鬼なら鬼、仙人なら仙人と差別がありさうなものですが。」
「まだ御存じありますまいが、あの大力王は昔の牛魔王で、孫大聖と火焰山の一件でさん〴〵戰つたのです。哪叱太子がそれを捕へられましたが、妻の羅刹女が仙道に這入つたので、それを援けて仙人にしようとしたのです。が、惡業が重いのでさうもされない。で、上帝は羅刹鬼王として一國を開かせられたのです。だから、此方とは何の關係もありません。從つて今、御助力も出來ない次第です。」
「では、どうしたらいゝでしょう?」
「幽冥教王に御尋ねになつたらどうです?」
「あゝ本當にさうです。忘れて居ました。」
と云ひも了らぬところへ、一人の童子が手紙を持つて來た。見ると「地藏菩薩から孫小聖へ」と書いてある。
孫小行者は驚いた。「菩薩は大した御力だ。よく御存じな事だ。」と開いて見ると、
迷却自在心、黑風吹鬼國、

念彼観音力　黒風自消滅

と書いてある。喜んで童子に禮を云つて、十王に別れて羅刹國に向つた。

一心に觀音經を念じつゝ來ると、黒氣があつても眼に障らない。容易に刹女行宮を尋ね當た。

半偈に、

「分りました。早く觀音經を御念じなさい。」

と云ふ。半偈は小行者の歸るのを待ち煞ねて居た處だ。「あの火雲樓の時に觀世音菩薩が救つて下さつた。今度も御願ひしよう。」と思つて居た處へ、歸つて小行者がさう云ふので、聲高らかに、

「南無救苦救難、觀世音菩薩」

と三四遍唱へる間もなく、一片の紅い雲が空から降りて刹女行宮の上に來ると、羅刹國中は俄かに明るくなつて、陰風も黒氣もすつかり止んだり、消えたりして、大勢の陰兵も見る見る散り散りばら〳〵、行方も分らなくなつた。黒孩兒太子も身の置場に困つて、潛龍殿に歸つて隱れようとした。

猪一戒は柱に縛りつけられて居たが、紅い光が身を廻るや否や、繩がずた〳〵に切れた。脚が自由になつたので、大悦びで表に飛び出さうとした處へ、太子が狼狽て駈け込んだのにぶつつかつた。

猪一戒は、「いゝ具合だ。仇討だ。」と、急に太子を捕へた。太子は逃げようとするが、猪一戒は離さない。

「無禮するな。おれは太子だぞ。」

「太子も糞もあるものか。」

引つ提げて、階段に投げつけようとする。太子は泣き聲を上げた。

「饒してくれ。」

猪一戒は笑つた。

「饒してやるから、行宮の師匠の處まで送つて行け。」

「送つて行く、送つて行く。手を離してくれ。」

「離すものか。」

と云つて、斷れた繩を結び合はして、太子の頸に卷きつけ、右手で、自分を打つた棒を提げ、左手で狗の子を引きずる樣に繩を引つ張つて、

「早く行け、早く行け。」

と追ひ立てる。近侍のものが、傍に居るが、恐れをなして近づくことが出來ない。

小行者は陰氣が散つたので、鐵棒を持つて探がしに出ようとする處へ猪一戒が歸つて來たので、

大喜び、

「兄弟、早く來い。師匠が御待ち兼ねだ。その若いのは誰だ？」

と云ふが返事する間もなく、半偈の前に來て、

「歸りました。」

と云ふ。半偈は喜んで、

「よく歸つた。誰が捕へたのだ？」

「これです。この若者です。」

「これとは誰だ。」

「太子です。」

半偈は太子と聞いて、

「殿下なら、早く御自由にして上げろ。」

「さうは行きません。太子でも私の仇です。」

「間違から起つた事だらう。仇だ何ぞと。」

「この人はまあよろしい。この母の婦人はひどい人です。私の父が以前打ち殺したと云ふので、私を殺さうとしたのです。」

半偈が云ふ。

「恨は解くべきで、結ぶべきではない。早く自由にして上げろ。」

猪一戒は止むなく繩を解くと、太子は再三禮をする。この太子の捕つた事を近侍のものが玉面娘娘に云つた。娘々は吃驚して泣きながら、王に、

「あの和尙が太子を捕へて行きました。どうか助けて……。」

と云つて泣く。王は、

「泣くな、泣くな。兄弟子が『還せ』と云つて來た時に、すぐ還せばいゝものを、御前が仇々と云ふものだから、還さなかつたので飛んだ災難が起つたのだ。みんな此方から起した事だ。」

「でも、どうかして助けてやりたいので。」

王が云ふ。

「自分も妖魔であつた時分には、戰でも何でもしたが、今は一國の主だ。つまらぬ事も出來ない。それにあちらには手並もあり、紅い光の守もある。こちらから仲直りを乞ふより外に仕方もあるまい。」

「が、子どもの生命がどうかと氣がかりです。」

「それでは、此方から出かけて話さう。」

と云つて居る處へ、太子が恙なく歸つて來た。
「どうしたのだ。」
「あの長老が『怨は解け。』と云つて、外のものに構はず許してくれたのです。」
と云ふ。二人は感激して、
「長老は活佛だ。」
と云つて、行宮に來て禮を云ふ。
半偈は狼狽て答禮をすると、國王は、
「一度宮殿に來て戴きたい。」
と云ふが、半偈は、
「先を急ぎますから。」
と謝つて、一同身を起す。大力王は留めやうもないので、車で城の外まで送つて別れて歸つた。
半偈等はそれで城外に出たが、以前のやうに陰々晦々で、方角も分らない。「困つた事だ。」と思ふところへ、紅い雲が又飛んで前に立つた。「これは嬉しい。」とついて行くと、忽ちの間に鬼口を脱け出して、西方への大道へ出る事が出來た。

二二

半偈等は鬼國を離れて二三千里行くが、道は平坦で何事も起らない。喜びつゝ進む中に、とある村に著いた。半偈は小行者に、
「半日歩いて腹が空いた。齋を出すところはないか、行つて見てくれ。」
「では、この樹の下で、待つて入らつしやい。行つて參ります。齋はすぐくれますでせう。大きい家だつたら、『御出で下さい。』と御招き申しませう。」
猪一戒は聞いて、
「おれも行かう。」
「坊主は人のものを貰つて食ふのだ。押しつけがましい事をしてはいかんぞ。」
「よろしうございます。」
と云つて少し行くと一人に逢つた。と、その人は唾をぺつと吐いて脇に外れてしまつた。また行くと、一人に逢つたが、同じやうな事をして外へ行つてしまふ。
「變だな。このごろ湯も使はないので、此方の體が臭いから逃げるのかしら。」

と思ひつゝ行くが、逢ふ人逢ふ人、みんな避けてしまふ。
「どうもをかしい。自分らよりも穢ない人まで嫌つて逃げるとは、どうした事だ？」
と譯が分らない。「まあ這入つて見よう。」と一軒の家に這入る。
「何方か御出でゞすか。通りがゝりの僧人が御齋を戴きたくて參りました。」
中から若者が一人出て來た。
「何處から來た禿頭だ？　珍らしい奴だ。」
「禿頭はどこにもあります。あなたは内にばかり居て御存じないのでせう。」
「外は知らぬが、此處にはないのだ。御前と口喧嘩はしたくない。」
「それはまあ、それとして、私どもは路を歩いて腹が空いて困ります。恐れ入りますが、御齋を下さいまし。」
若者はけゞんな顏をして、
「これは不思議な事を聞くものだ。」
「何が不思議です。」
「齋といふのは飯を出す事だらう。飯は米で出來るものだ。米は耕して出來るものだ。それで、老人も若者も、力を盡して作り出して生命をつなぐものだ。緣もゆかりもないものに遣れるもの

のではない。不思議と云ふのに不審はあるまい。」
「いや、私どもは、大唐國から遙々二萬里も來たものです。あなたのお話のやうで齋を戴かなければ、餓死するばかりです。あなたは御存じない樣だ。大人の方に出て戴きたい。」
「内には大人は居ないよ。」
と云つて取り合はうとしない。小行者は無理にも取らうと思つたが、師匠の戒があるので、それも出來ない。出て行くと、大きな家がある。年寄つた下僕が一人門の前に立つて居る。小行者は側へ行つて、
「通りがゝりの坊主です。腹が空いて堪りません。どうか一碗の飯を御願ひします。」
下僕は和尙と見て、唾を吐いて、怒つた聲で、
「こゝでは和尙は認めない。何處から來たのだ？」
「大唐國から參つたのです。靈山に行つて佛を拜する爲めです。」
「さう遠方から來たのなら、世間の法といふものを知つて居るだらう。國に入つては國の法に從ふべきだ。」
「私どもはたゞ通りがゝりです。土地の事を聞き合はせる際はありません。」
「聞き合はせる、合はせないのは御前の勝手だが、しかし早く通れ。齋なんか喫はうと思ふな。」

「そりや不思議です。佛家の弟子に齋を施すのは當然の事です。どうしてさうなのです？」
下僕は笑つた。
「こゝでは、乞兒に物を遣るのは仁をすると云つて居るが、和尚に一粒の米でも遣らうものなら、風儀を破つたとして、人中に出られん事と極まつて居るのだ。今、御前と話し合つて居るのを人に見られやうものなら、明日からおれは人交際が出來なくなるのだ。早く行つてくれ。」
「變ですな。私どもは無法な事もして居ない。どうしてさうなんです。本當にされません。」
「さう云ふなら、外で聞いて見ろ。さうすれば分るだらう。」
小行者は、人々が唾を吐いて避けたのは理由があることだ、と思つたので、
「どうか、理由を教へて下さい。」
「おれには分らん。西に行くと、絃歌村と云ふのがある。そこの人々はみんな學者だ。そこで聞けばすぐ分る。」
「聞くのはきますが、師匠が腹が空いて困つて居ます。少しでも齋を下さい。餓死しさうです。」
「いや遣れない。西へ向つて餓死しても仕方がない。それよりも早く東に歸るのが一番いゝ。御前の教はかなり虚言も云ふ。いゝ位な事を云つたらいゝだらう。」
「勅命を受けて出て來たのです。どうして此のまゝ歸れるものですか。」

「もう澤山だ。何處でも行け。自分も腹が減つた。話はやめだ。」
と云つて手を振つて、内に這入つた。
小行者は師匠の前で、「すぐくれるでせう。」と云つた手前、歸る事も出來ない。で、こつそりと下僕の後をつけて這入る。下僕は臺所に行つた。丁度午飯が煮えて居る處だ。下僕は鍋の蓋を取つて、大きな碗に一杯盛つて、自分の部屋に來た。今度は菜が入るので、臺所に歸つた。その隙を窺つて、小行者は持つて居る鉢に飯を移すと丁度一杯になつた。そこへ下僕は色々な菜と箸とを持つて來たが、不思議な事には飯が一粒もない。驚いて部屋から出てあちこちと見廻はす。小行者はその間に、菜も鉢に移した。下僕は歸つて見ると、今度は菜も見えない。再び驚いて、
「變だ、變だ、怪物が居る。」
その聲を聞いて大勢が駈けつけた。小行者はその騒ぎに紛れて、鉢を持つたまゝ村を出て、半偈の處に來た。
半偈は腹を空かして待ち兼ねて居た。
「猴奴、『すぐ持つて來る。』と云つて來ないのは、自分だけ何處かで喫つて居るのではないか。」
と猪一戒はつぶやく。半偈は何とも言はず居る處へ、小行者は歸つて來た。鉢を出して、
「どうぞ召し上り下さい。あとはまた先で貰ひます。」

「長くかゝつたな。」
「いや、こゝの人は布施をしてくれません。」
猪一戒は云ふ。
「『直ぐ持つて來る。』と云つて來なかつたのは、自分だけで喫つたのだな。」
「馬鹿云へ。おれは貴樣の樣な食ひしんぼうではないぞ。」
半偈は問ふ。
「それなら、どうしてこの飯がある？」
「どうしてもくれませんから、そつと持つて來たのです。」
半偈は頭を振つた。
「君子は盜泉の水を飲まんと云ふ。盜んだものは盜泉の水よりも甚しい。罪を犯してはいかん。おれには食はれん。」
小行者は默つてしまつた。猪一戒は急き込んだ。
「こんな飯位何ですか。金銀ではない。さう云へば仙人が霞を食つたり、露を吸つたりするのも盜み同樣だ。渴けば溪水も呑んだ。それも盜んだ事になる。」
半偈は云ふ。

「さうは云はれん。天地自然に出來たものと、人の造つたものとは違ふ。おれにはこの飯は喫はれない。」
「師匠が召上らなければ、おれが喫ふ。」
と云ひながら、忽ち喫つてしまつた。で、行李を挑げて、
「早く行きませう。向うの村で齋を貰ひませう。」
と云つて立ち上る。
半偈は止むを得ず、馬に乘つて行く。何處もいゝ光景だ。
「何でこゝに善人が居ないのだらう。」
「善人が居ないのではありません。和尙を嫌ふのです。」
「どんた譯なのだらう？」
「『絃歌村で聞けば分る。』と云ひましたから、そこで聞いて見ませう。」
と云ふ中に、路の桃が紅に咲き、街の柳が靑く垂れ、風が淸く吹いて、溫和の氣がたゞよふところに、高い門や墻が見える。讀書の聲も聞こえる。音樂の響もする。賢人の里、君子の村といふべき有樣だ。
半偈は、

「今度は自分で齋を貰ひに行かう。」

と云つて馬から下りて鉢を持つて、とある家の前に來る。中で詩を歌ふ聲がする。

「唐虞孝弟是眞傳、　周道之興在力田、
一自金人欄入夢、　異端貽害已千年、
焉能掃盡諸天佛、　安得焚完三藏篇、
幸喜文明逢聖主、　重扶堯日到中天」

半偈はよく譯が分つた。「佛敎を嫌ふのだな。」と、こつそりと出て、またある家の前に行くと、

「不睥而食是賊民、　不織而衣是盜人、
眼前君父既不認、　陌路相逢誰肯親、
滿口前言都是假、　一心貪妄都爲眞、
幸然痛掃邪魔盡、　快覩山河大地新」

半偈は、「こりや駄目だ。」と思ひつゝ小路に這入ると、內で琴の聲がする。覺えず進むと、丁度彈き止んだ處だ。

「通りがゝりの坊主ですが、御齋を戴きたい。」

と云ふ。こゝは學堂で、一人の先生が十人あまりの子どもを敎へて居る。今、午後の課業が濟ん

だので、琴を彈いて樂しんだのであつた。聲を聞いて、學生が出て來て見て、吃驚して引つ込んだ。

「誰が來たのだ?」

「人ではありません。」

「人でなければ鬼か。」

「人であつて、人でないのです。」

「變だな。」

「先生の御話では、人の頭に髮のある。それは山に木のあるやうなものだ。ところがあの頭にはそれがありません。人であつて、人ではありません。」

先生は考へた。

「では坊主だらう。」

「坊主とは鬼ですか。」

「鬼ではない。人だが、道が違つて居る。」

「どうしてですか。」

「西の方に敎主がある。それを佛といふ。坊主も人だが、その敎を受けて、人たるしるしの髮を

削つて、佛に事へる。先づ鬼の類だ。天王の御敎では、これを斥けて居る。それがどうして此處に來たか。」

と出て來て見る。半偈は禮をする。先生は手を振つた。

「いけない、いけない。道同じからざれば、相謀らず。いくら禮をしても自分は受けない。」

「どうして御受けにならない？」

先生は笑つた。

「自分は文士だ。君は異端だ。冠を著る頭と、毛のない頭と一所にされるものか。」

半偈は腹が空き切つて居るので、せん方なしに、

「私は大唐の天子の勅命で、西天の雷音寺に參るものです。すつかり餓ゑて居ますから、どうぞ、すこしでも御齋を戴きたいので……。」

と云ふと、先生はまた笑つた。

「鷄は夜明を知らせ、犬は盜賊を拒ぐ。だからそれに食を與へる。君は耕作もせず、種蒔もせず、この土地に何の手柄も立てない。親を養ひ自分を資ける大事な食物を、安々と遣れるものではない。」

半偈は云ふ。

「どうしても下さらないのでせうか。」

先生は云ふ。

「やれない。その譯を聞かせてやらう。昔天王がこゝを御開きにならない前は、佛敎のために、人々は愚かにされて、無闇に坊主等に施しをした。それで父母の遺體を損つたり、傳はつた身代を破つたり、しまひには人道を滅すやうにもなつた。それを天王が御憐みになつて、それを斥けて、聖敎を御廣めになつた。それで、今は見る通り文明の處で、一人も樂んで暮さんものはない。君も宗旨換をしたらよからう。さうでなければ、早く逃げ出す事だ。ぐず〳〵すると飛んだ事になるぞ。」

と云つて這入つてしまつた。半偈は仕方なく歸つて來ると、小行者らが迎へた。

「多分、駄目でございましたらう。」

「さうだ。まあ齋の事はそれとして、先生がさん〳〵、佛法の惡口を云つたぞ。どうしたらいゝだらう。」

小行者は云ふ。

「そんな奴らを改心させるには手があります。」

「どんな手だ？」

「何でもありませんが、正道ではないと、仰しやるでせう。」
「手荒な事はいかん。」
「いや、さうではありません。佛の威光を見せて改心させるだけです。」
猪一戒が口を出す。
「欺されてはいけません。飯を盗んで來たものに、どうして人を改心させる事が出來るものですか。」
「馬鹿。默つて居ろ。こゝでは、少しの方便を使つても構ひますまい。」
と云つて、股の毛を一把拔いて口の中に入れて、「變れ」と云ふと、百千万の韋駄天となつた。
それが、頭に金の兜を戴き、身に金の鎧をつけ、手に降魔の杵を持つて、家毎に散つた。大聲で、
「活佛が御通りになるぞ。すぐ香と、花と、燈と、精進料理を持つて出ろ。ぐず〳〵すると、これで粉微塵に衝き崩すぞ。」
喫驚して、何處の家でもその用意をする。
小行者は韋駄天に化けて先生の家に行つて、しつかり捕へて、街中に引き出した。杵を頭の上に立てゝ、
「何だ、貴樣は、すこしばかり本を讀んで井戸の中で天を見る仲間だ。無闇に佛の惡口を云ふ。

阿鼻地獄に入れて、舌を拔き、齒を折つて、永久に出られぬ樣にしてやるぞ。」
先生はすつかり恐れ入つて、
「相濟みません。天王に欺されたのです。佛の慈悲で、どうぞ御許し下さい。これからは、佛法に歸依しますから。」
と云ふ。
「さう云ふならば許してやらう。早く御出迎への用意をしろ。」
と云ふので、先生は逃げて家に這入る。弟子どもは、
「許されて御歸りになつたのですか、先生の力で逃げて入らつしやつたのですか。」
「そんな事を云ふ隙はない。早く御出迎の支度をしろ。」
と云つて騒ぎ立てる。
小行者はそれを見て、また四本の毛を拔いて、四大金剛とし、また數本取つて、童子とし、手に手に幡や天蓋などを持たせ、香や、花や、燈火を兩側に列べて、音樂を奏させ、半偈を馬に乘らせ、自分と猪一戒等と左右を守つて、靜々と通る。
路の上には、もはや香の烟が立ち、幡が飜へり、樂の音が起り、經の聲も高く響く。男女老少の村人たちが、香や、燈を持ち、色々の精進料理を供へて、活佛を拜まうと群がつて居る。あの

先生も學生と一所に香爐を戴いて拜むのが見える。

牛偈は意外なので、

「そんなにするには及ばない。」

と云ふが、大勢は饅頭や、蒸餅や、吸物や、飯や、馬の前に捧げて、「喫べて下さい。」と叫ぶ。

喫べればまた出し、また出して、忽ち牛偈は滿腹した。で、徒弟らに代つて喫べさせると、猪一戒はことに十分喫べて、もう喫べ切れない程になつた。

小行者は「もう十分だ。」と見たので、手で人々を押し止めて、牛偈に鞭を上げて馬を打たせると、猪一戒らは滿腹したので、勇氣が出て、飛ぶ樣にそれについて村から出た。

小行者は其處で、毛を收めたが、人々が逐つかけようとする時に、一行はすでに〳〵遠くなつて居た。

二三

牛偈等は、小行者の謀で、村民どもに佛法に歸依させて、十分に喫べ、馬を進めて居たが、牛偈はふと嘆息して、

「止むを得ん事だつたが、飛んだ謀をしたものだ。愧しい次第だ。」

と云ふ。小行者は、

「方便といふのは、愚人に信心を起させるのには必要です。妨げにはなりません。」

「さうではあらうが、一度限りで二度してはならない。」

と云ひ合ひながら行くのであつた。人の噂は早いもので、絃歌村での事件は、行手の村々に傳はつた。

「活佛が入らつしやる。早く御出迎をしろ。」

と、まだ著かぬ中から用意して、齋を出すものもあり、宿を貸すものもあり、一人から二人、二人から三人と話が擴がつて、遂に文明天王の耳に這入つた。

文明天王と云ふのは、中國の出身で、角な顏、大きな耳で、福相がある。頭に金錠があり、全

身に金錢がついて居る。行く處は何處でも豊年で、何人も安樂であつた。しかし、ふと戰亂が起つたので、その混雜の間に、ある樵夫の手で殺されてしまつた。しかし、その魂は散らばらず、西方に生れ變つて、やはり身體はもとのやうであつた。只違つたところは、手に一本の筆を持つて生れて來た事で、それで字も識り、文も能く書いた。

天王の筆は不思議な事に、文の道具となるとともに武の器械ともなつた。入用の時には長く伸びて一本の槍と同樣、その上に腕の力が非常にあるので、りゆうりゆうとそれを衝き立てた。その上に、身に著いた金錢で金の鉤を作つて、それを巧みに打ちつけるので敵ふものがない。それで、文明天王と名乘つて、玉架山に居て、文明の敎を起した。山の前後左右、千里ほどの土地のものは、殘らずその敎に服した。

從來、玉架山附近は、もとは佛敎信仰の土地であつて、僧侶が最も多かつたが、天王が來てから、それを壓迫して、庵を毀ち、寺を拂つて、一人の和尙も住ませない樣にした。そのため、數百年この方、僧侶の影も見えない。偶に來るのがあるが、誰も相手にしないので、外に行くより仕方がなかつた。

文明天王は、ふと四人の和尙が金剛と韋駄天とに守られて、儒敎を奉ずる學生や、耕作に骨折る百姓を欺して、昔の樣に無用の費をさせる佛敎に歸依させたと聞いて、すつかり怒つた。

「何處から來た坊主どもだ？　妖しい術を使つて、自分の敎を破るとはひどい奴らだ。」

と石、黑の二人の將軍を呼んだ。

「今來る坊主は、儒敎を破る奴らだ。路で待ち受けて捕へて、ずた〳〵にしてくれ。」

と云ひつける。

「畏まりました。」

二人は大勢の兵隊を連れて、玉架山の前に陣を布いて、來るのを待つて居る。

二日經つと、遙かに四人の和尙が、やつて來るのが見える。石將軍が、

「來たぞ、來たぞ。」

と云ふと、黑將軍は戟をさげ、近づくのを待つて、

「坊主、早く馬から下りて繩を受けろ。」

と叫ぶ。

小行者はそれを見て、沙彌に半偈の馬を駐めさせ、耳から金箍棒を取り出して、

「御前は何だ。何で眞晝間、强盜をするのだ？」

黑將軍は云ふ。

「何だつて？　おれは文明天王の前鋒の黑將軍だぞ。天王の御命令で御前たちを捕へて殺すのだ。

強盗などとは以ての外だ。」
「おれたちは通りがゝりの和尚だ。すこしも法を犯しては居ない。それにどうして縛らうとする？」
「通りかゝりの和尚なら、そつと通ればそれでいゝ。金剛や韋駄天をこしらへて、人民どもを騙して齋を貪つて食ふなどは、文明の教を亂るものだ。何で法を犯さないと云ふのだ？」
「金剛、韋駄天は佛の護法だ。齋は善人の喜捨だ。騙すとは以ての外だ。洞の中で、些かばかり物を知つたからと云つて、文明天王などゝ名乘つて、佛法の邪魔をするとは何事だ。」
石將軍が傍から、
「糞坊主どもの云ふ事を聽くな。捕へろ。」
と云つて手斧を取つて正面から打ちかゝる。黑將軍もまた戟を擧げて打つて來る。
小行者は笑つた。
「文明の教といふからには、ゆつくりと、道理を述べさうなもの、斬つてかゝるとはどうした事だ？　生命のなくなるのは目の前だぞ。」
と二人を相手にして戰ひはじめる。斧が來る。戟が來る。棒が行く。右に左に、前に後に、散々に戰ふこと半時ばかりだが、勝負がつかない。が、金箍棒は重く斧も戟も輕い。石、黑の二將軍

は段々支へ切れなくなつた。
それと見て、兵隊の一人が、「二將軍が負けさうだ。」と文明天王に奏上する。
天王は歎息して、
「坊主にもえらい奴があるのに、方向を誤つて居る。捕へて來て教訓してやらう。」
と云つて、臣下に馬を引かせた。この馬は「烏錐」と云つて楚の項羽の乘つたものであつたが、その戰死の時、馬も烏江に沈んだのであつた。が、魂は散らず、また馬と生れて、文明天王の乘物となつて居るのだ。
天王は一本の筆を手に取つてから、馬に乘つた。大勢の兵隊を連れて、湧き上る樣な勢で山の前に出た。丁度二將軍が、支へ切れずに退却して居た時だつたので、天王が出だと見て、勢を盛り返して攻めつけて來た。小行者はにこ〳〵として、
「逃げて、何で引つ返して來た。棒を食らへ。」
と打ちかける。
「和尚、無禮をすな。文明天王樣の御出だぞ。御前の命も今晴くだ。」
と云ふ處へ、金鼓の音がして、繡の旗が開くと、文明天王の馬が衝き出して來た。
小行者は天王と見て、鐵棒を横にして大聲を揚げた。

「馬に騎つた奴。立派な様子をして居るが、文明天王と名乗る妖物か。」
天王は笑つた。
「糞坊主、貴様は、韋駄天、金剛を出したり、棒で二將軍に向つたりする手並のほどは確かな奴だ。それに何だつて佛教に陷つたのだ。本當に惜しむべき奴だ。今おれにいゝ處で逢つた。おれを妖物などゝ云はずに、邪を捨てゝ正に歸れ。」
「妖物奴、何を云ふ？　文明と名乗るからには文明と云ふ事を知つて居るだらう。禮樂と文章とで天下が治まるのが文明だ。御前の樣な、山の中に居て、宮殿もなく、役人もない有樣で、何が文明だ。こんな奴を平らげて、佛の清淨にするのが本當の文明だ。」
天王はまた笑つた。
「貴樣は鐵棒一本で、豪傑の積りで居る樣だが、それは何にもならんぞ。おれのこの筆と戰つて見ろ。もし三合戰つたら、饒してやらうが、さうは行くまい。捕へたら、切り刻んでやるが、その時になつて後悔すな。」
「何とでも云へ。どんな手並だ？」
と棒を擧げて打ち懸る。天王は筆を長い一條の槍として、輕々と使つて衝きかゝる。小行者は棒で受け留める。が、三合戰ふと、天王は馬を返して急に逃げ出す。「遁すものか。」と小行者が追

ひかけると、天王は身に著いた金錢を取つて、身を捻ぢ返して打ちつける。
小行者は眼が快やかつた。飛んで居る金錢を棒で受け留める。かちんと音がして、地上に飛び散る。とまた打ちつける。また一棒ではね飛ばす。
天王は驚いて、
「中々手並があるな。」
と叫んで、身に著いた金錢を雨の降るやうに投げつける。小行者は棒を振つて拂ひ落とす。棒は光と廻り、錢は星と飛ぶ。
ばち〳〵ばら〳〵と、棒が當ると無數の金錢が、拂はれては地に落ちる。あたりは金だらけになつて、小行者の身には一つも中らない。
「えらい坊主だな。貴樣は一體何者だ？」
小行者は笑つた。
「御前は、金錢で片づけようとするが、おれには駄目だぞ。おれは、花果山に生れて、どんな妖怪でも、閻羅王でも降參した孫悟空の後の孫履眞といふものだ。」
天王は大笑ひした。
「はゝあ、花果山の石猴の後か。あの猴は、おれの世に出ない前に手柄を立てたのは傲俳だつた。

その子が丁度おれにぶつかつたのだな。もし、智慧があるなら、師匠も弟子も、邪法を捨てゝ正教に歸依しろ。頭の髪を伸ばして、おれの良民になつて、生命を延ばせ。悟らなければ、刀では殺さぬが、筆で、『妖僧』と書いて、萬代まで壓へつけてやるがどうだ。」

小行者はまた笑つた。

「壓へつけられるものなら、壓へつけて見ろ。」

「貴樣は見込みがあるから、さう云つたのだ。壓へつけるのは何でもない。やつて見せるぞ。」と筆を空中に投げ上げる。と、くるくる舞ひながら小行者の頭を目がけて落ちてくる。小行者は棒で拂はず、「こんな筆位は。」と頭で受ける。筆は頭の上にしやんと立つたが、力があるので、何とも思はない。

天王は、小行者が壓へつけられないのを見て、大聲を上げて、

「至聖大師、文昌帝王、この異教者に威靈を顯して下さらないか。」

と云ふ聲が止まない中に、筆は小行者の頭の上で俄かに重くなつて、大山の如く壓へつけて來る。小行者は堪らず鐵棒で拂はうとするが、根が生えた樣で、少しも動かず、ます〳〵壓へつけるので、力も筋も弱りはてゝ、ぐつたりと地に倒れた。天王は笑つて、

「小猴、貴樣の威勢は何處に行つた？」

と近侍の者に縛り上げさせた。猪一戒と沙彌とは驚いて、荷物も師匠も捨てゝ置いて、二人で助けにかゝると、石將軍と黑將軍とが支へて戰ふ。天王は戰が互角なのを見て、金錢を取り出して打ちつける。沙彌は頭に中てられて地に仆れる。黑將軍がよつて縛りつける。猪一戒は頭を曲げて避けたが口尖に當つたので、釘鈀を拋つて押さへるところを石將軍に捕へられた。半偈は一人となつたので、兵隊どもは寄つてたかつて、馬から引き下しておなじく縛りつけた。天王は馬を見た。

「えらい馬だな、一體どうしてこんないゝ馬があつた？」

と半偈に問ふ。半偈はせん方なく。

「昔、河圖を負つて出た馬だ。龍王から借りて來たのだ。」

と云ふと、天王は喜んだ。

「いゝ馬を探がして居た處だ。河圖を負つたのなら、文明の馬だ。おれのに丁度いゝ。こんな馬にとんだ奴が乘つて居たものだ。」

それに乘り換へて、四人の和尙を、引き連れて、大得意で山に歸つた。

元來、玉架山と云ふのは、大きな石山だ。それを鑿らして石の御殿をこしらへて、天王は其處に住まつて居るのだ。殿上に歸り著いて、天王は勝戰の祝の宴を開いて、みんなと大杯で飲み合

つた。愉快に堪へずぐん〳〵飲むので、暫くの中にすつかり醉つてしまつた。で、奥殿に這入つて眠らうとすると、石、黒二將軍が、

「四人の坊主をどうしませう。」

と云ふと、

「明日、よく審べてきまりをつけよう。」

と天王は答へる。

「ですが、あの筆は猴の頭にまだ立つて居ます。あれはどうしませう。」

「では、猴を、猶よく縛つて筆は取つて來い。」

と云ふので、二將軍は繩をまた一本增して、小行者を縛つて、筆を取らうとするが、中々取れない。天王は笑つて、

「御前たちは、文筆に通じないから取れないのだ。」

と云つて、輕々と頭から取り除けた。

「よく方々に氣を著けろ。」

と云ひつけて、奥殿に這入つて眠つてしまつた。二將軍はいひつけ通りに命じて、四人を洞の一番奥に入れ、柱によく〳〵縛らせておいて歸つて行つた。

半偈は縛られて覺えず嘆息した。

「大願が遂げられないのに、死ぬとは遺憾な事だ。」

小行者は問いて、

「あなたの道心は案外弱い。この位な事で挫けるとは何した事です。」

「いや、『文人の筆といふものは、恐ろしい。』と云ふのだ。」

「そりや、さうですが。」

「さうですが、どうだ?」

「筆が頭の上に當つたので弱つたのですが、天王は醉つてしまつて、今は有りませんから自由自在です。」

「繩で、しつかり縛られて居るではないか。」

「こんなものはすぐ解けます。お急ぎなさるな。夜の中に解いて、また西に行きませう。」

猪一戒が嘲る。

「あんな事を云ふ。そんな事が信用出來るか。その位なら、どうして筆で壓へられたのだ?」

「おれは小兒の時から、本を讀んで居ないから、筆で壓へつけられたのだ。今は筆がないから、何でも出來る。こんな繩なんかすぐ切れる。」

と云ふ中に夜になつた。猪一戒は、
「早く解いてくれ。」
と云ふ。小行者は、
「まあ默つて居れ。」
と云つて居たが、いつか繩を脫け出して居る。
「早くしてくれ。手脚が痳れた。」
と猪一戒が云ふのを構はず、半偈の前に行つて息を吹きかけると、その繩が刀で斬つた樣に切れた。が、洞の中が暗いので、よく分らない。手にさはつた處で、沙彌の繩を解く。
猪一戒は、
「兄貴はひどい。おれを後にする。」
「何だつて。おれの惡口を云ふと、何時までも解いてやらないぞ。」
半偈は、
「早く解いてやれ。」
と云ふので、解く。
「馬鹿、師匠の御語がなければ、何時までも解いてやるのではなかつた。」

猪一戒は喜んだ。
「いや、辱ない。兄貴の法で解けた。よくも縛つたものだ。自分で解いたら半日もかゝる。」
半偈は云ふ。
「繩は解けたが、これからどうする?」
「今、燈を持つて來て、路を見て逃げませう。」
と小行者は云つて、洞から出て前殿に來るが、誰も居ない。門まで行くと、兵隊が大勢燈をつけて見巡つて居る。小行者は兵隊の一人に化けて、燈を一つもつて行く。
「何處へ行く?」
「奥の洞には番兵が居ない。行つて番をする。」
「奥には門がない。逃げやうはない。」
「でも、用心するには如くはなしだ。」
「それならば、思ふやうにしろ。」
小行者は前殿の後に來ると、ちやんと自分らの武器や行李が置いてある。それを見て置いて、後に行くと、果して門はない。が、岡があつて、些か低い。這へば越されさうだ。見定めて洞に歸つて、猪一戒と沙彌とに、行李と武器を取らせて岡の方へ持つて來させた。

「待つて下さい。馬を牽いて來ますから。」
と云つて、燈を持つて屁に來ると、龍馬と烏錐馬とがつながれて居る。それを解いて、岡の方へ連れて來ると、計らずも、烏錐馬は仲間がなくなつたので高く嘶いた。
文明天王は馬の聲で目を醒ました。
「あの龍馬に何かあるのではないか。早く行つて見て來い。」
と近侍に云ひつける。近侍は燈を持つて出て見て、
「大變です。烏錐馬だけしか居ません。」
天王は吃驚して起き上つた。
「龍馬が逃げた？　四人の和尚も逃げたのではないか。早く行つて見ろ。」
と云ひつけた。

二四

小行者は馬を盜んで、半偈に乘らせ、行李を取つて岡の後に行つて、猪一戒に荷なはせ、沙彌と一緒に飛び出して、半偈を守りつゝ一里ばかり行くと、後に松火の光が目を輝かせ、鼓の音を高く響かせ、烏錐馬に乘つた文明天王がまつしくらに追ひかけて來る。
小行者はみんなを前に立たせ、自分は引つ返して鐵棒を横たへて、
「昨日は負けたが、今日はさう行かないぞ。追つかけて來て飛んだ目に逢ふな。」
と叫ぶ。天王は息を切りつゝ、大聲で、
「この泥棒奴、よくも繩を切つて逃げ出したな。今度は許さんぞ。」
「今日もおれを壓しつける積りか。さうは行かんぞ。」
と棒を擧げて打ちかゝる。天王は筆で支へる。棒は飛ぶこと電の如く、鎗の來るのは雨のやう。長時間戰つたが、勝負はつかない。
「この猴奴、とんだ手並だ。また壓へつけてやらう。」
と急に身を引つ返して、金錢を打ちつける。小行者は棒で打ち落とすと、天王は俄かに鎗を縮め

て筆として空に向けて投げ上げる。小行者はちやんと用心して落ちて來る前に、雲に乘つて空に飛び上つた。天王は落ち來る筆を手に受けて、大いに笑つて、

「うまく逃げたな。ではあとの奴を捕へるぞ。」

と、馬を風の如く飛ばして、三人を追ふ。猪一戒と沙彌とは、天王が一騎で來るのを見て、また縛られるかと狼狽て、半偈を顧る暇もなく雲に乘つた。天王は追ひついて、半偈を捕へて馬から下した。追ひ著いた臣下に縛らせ、龍馬を牽かせて山に歸つた。

天王は殿上に座つて、半偈を跪かせた。

「おれは昨日醉つたので、聞かなかつたが、一體御前は何處から來て、名は何と云ふ。逃げた奴はどんな奴だ?」

半偈は、

「自分は半偈、大唐天子の勅命で雷音寺に行つて經の眞解を求めるもの、あなたと何の關係もない。どうして責められるのか?」

と云ふ。天王は、

「良民でありながら、妖僧となつて居る罪が一つ。魔術を行つて食物を騙つた罪が二つ。捕へて來たのを勝手に逃げる罪が三つだ。こんな罪があるのに、どうして關係がないと云ふ? 全體

あの三人は何だ?」

「一人は孫履眞、一人は猪守拙、一人は沙致和。三人とも門弟だ。」

「それが、御前をうちやつてどうして逃げた?」

「あなたの勢を一寸避けただけ、打つちやる譯はない。何處かで變化して守つて居る。」

「變化するとは魔術ではないか。全體昨夜どうして逃げた?」

「孫履眞には神通力がある。一吹き吹けば繩なんか解けてしまふ。これが佛法の廣大な處で、魔術ではない。」

「では、どうして筆で壓へられたのだ。今日も筆を見ると一生懸命逃げ出したが。」

半偈は云ふ。

「道は魔を拂ふ。時に魔が道を障る。しかし、道は遂に魔を除くものだ。今あなたは勝つて居るが、後になると、どうなるか?」

「縛られながら餘計な事を云ふな。昨日は繩で逃げられたのだ。今日は筆で壓へてやらう。」

と臣下を呼んで繩を解かせた。半偈は樂になつたので座禪を組んだ。天王は筆を頭の上に立てた。

半偈は幼年の頃、儒者を多少讀んで居り、今又經典を澤山見て居るので、頭の筆は重くもなく、

平然として居る。黒、白二將軍は、
「和尚は何とも思つて居りません。また縛りませうか。」
「いや、その上に金錠を載せればいゝ。」
と自分の頭のを取つて、筆の上に乘せた。すつかり塔を重ねた樣だ。と半偈は急に動かれなくな
つた。天王は笑つて、
「これで十分。」
と云つて奥殿に這入つた。
逃げた小行者は、逃げた猪一戒と沙彌とに逢つた。
「どうしよう。また夜こつそり行かうか。」
「眞暗では何も分らない。晝の方がいゝ。何とか變化してみよう。」
「さうだ、さうだ。」
と云ひ合つて、小行者は蜜蜂に化けて宮殿に入り込んだ。と半偈が座つて居る。
「御師匠樣。」
と云ふと、半偈は、
「小行者か。早く救けてくれ。重くてしやうがない。」

「晝間は駄目です。夜來ます。」
と云つて飛び出して、二人に話す。
「あの筆は柔かいものだが、頭の上に來ると泰山よりも重いのはどうしてだらう。」
「早く救けんと、壓し殺されてしまはれるかも知れない。どうしよう。」
と云ふが、いゝ考もない。その中に日が暮れた。三人はこつそりと宮殿に這入つた。そこには誰
も居ない。半偈ばかりだ。
「來ましたよ。」
「早く救けてくれ。」
猪一戒は云ふ。
「私がやりませう。たゞ一本の筆ですもの、何でもありません。」
「とても大變なものだぞ。取られるものか。」
「でも、やつて見ませう。」
と頭を探つて、筆を手にかけて引張るが、根が生えたやうで動きもしない。吃驚して、
「こりや不思議だ。」
「離せ。とても駄目だ。」

と小行者が云ふ。猪一戒は、
「地上にあれば、釘鈀で衝く、鋸でひく、火で燒くといふ方法もあるが、頭の上ではどうもしやうがないな。」
沙彌は近よつて探つて見ると、筆の上に金錠が一つある。
「こりや、何です。」
半偈が云ふ。
「筆ばかりは何でもなかつたが、それが乘つかつて急に重くなつたのだ。」
「どうも、しやうがないな。何とかならぬものかな。」
と、二人はぐつたりする。小行者は、
「いや、おれには考がある。」
と云つて奥殿に這入る。そこには、文明天王が宮女を侍らせて眠つて居る。小行者はそれと見て幻法を使つて、三千の菩薩たちを枕下に立たせた。又韋駄天を使つて、降魔の杵を、天王の頭の上に持つて來させた。
「こりや魔者、その方は文筆で、自分ら佛家の弟子を壓へつけて居る。早く取り去つて西へ遣らぬと、この杵で一氣に衝き殺すぞ。」

と云ふ。天王は夢中で返事も出來ずに居ると、韋駄天が杵で頭を打たうとするので、吃驚して、大聲を揚げて目を醒ました。宮女は、
「まあ、この冷汗は……、御魘されになりました?」
天王は醉も醒めたので、心を靜めて、
「あの坊主どもの魔術だ。先日食物を騙つたのと同じ手段だ。」
「そんな奴は、殺して御しまひになればよかりさうなものですのに。」
「さうは行かん。輕々しく殺しては、文筆の妙を顯はせない。」
「弟子どもにえらいのが居る、と云ふではありませんか。」
「そりや居るが、鎗を使ひ、棒を振るだけの事だ。筆の威力に敵ふものか。」
「それでも、誰か有名な文人を頼んで來たらどうなりませう?」
「そんなものは居ない。もし、天上の星を頼めば知らぬ事、外にはないな。」
「それでは心配はありません。ゆつくり御休みなさいまし。」
天王はまたぐつすり寢た。
小行者は室の外でその話を聞いた。喜んで出て來て、半偈に云ふ。
「大丈夫です。いゝ事があります。」

「何がある。」
「『天上の星なら筆が取り除けられる。』と申しました。星では、文昌菩薩梓童帝君、これが文筆の事を管つて居ます。頼んで参ります。」
と云つて、雲に乗つた。
九天に登つて見ると、文昌星の宮殿が五雲の棚引く間に輝いて見える。小行者は宮門に著くと、案内を乞ふ。天曋地啞が出て來て、
「御前は何だ?」
「早く取り次いでくれ。『齊天小聖の孫履眞が参りました。』と。」
「いや、御前の樣な變なものゝ取次は出來ない。」
「取次がなければ這入り込むぞ。」
止むを得ず取次をする。帝君は、
「孫小聖といふからには孫大聖の後だらう。あれは佛敎、こちらは儒敎だから、關係はない。何で來たのだらう?」
と云ひつゝ「連れて來い。」と命ぜられる。小行者が這入つて座ると、帝君は、
「何事で御出でだ?」

「率直に申し上げますと、私は和尙となつて身も心も淸淨で居ますが、あなたは文章の司となつて、紙でも字でも、容易く人に御貸せになりませんと思ふのに、どうして筆を飛んでもないものに御貸せになつて、それで人を壓し殺さうとなされるのです?」
帝君は驚いて、
「それは間違だ。筆墨の事は自分の職だ。筆を人に貸すなどといふ事は……。」
「でも、よく御査べ下さい。今こんな事があります。」
と、玉架山の文明天王の事、筆で人を壓し殺さうとする事を話すと、帝君はけゞんな顏をして、
「玉架山、そんなものはさつぱり知らん。文明天王と云ふのも分らん。こゝには筆が澤山あるが、みんなちやんと整つて居る。人に貸したのは一つもない。」
「まあ、急かずに御査べ下さい。」
帝君は天曋地啞に査べさせる。暫くして出て來て、
「一本足りないのがあります。」
帝君は驚いた。
「何が足りない。」
「春秋筆が足りません。まだ御管轄にならない時に誰かに竊まれたのです。今云はれたのはそれ

ではありますまいか。」

帝君は誰が落して、誰が竊んだか、また査べさせた。しばらくして、出て來て、

「分りました。古い事ですが、列國の時代に孔仲尼が春秋を書かれました。が、魯の昭公の十四年に、麒麟があらはれました。それを知らずに樵夫が打ち殺しましたので、仲尼は嘆息して筆を投げられました。その麒麟の魂が散らずに、文明天王となつて世に出て、その筆を拾ひ上げて、玉架山で文明の教を興して居るのです。」

聞いて、帝君は小行者に禮をして、

「とんだ事であつた。自分が管轄以前の事だ。と云つても、査べが足りなかつた。」

小行者は、

「それはそれでよろしうございますが、ただ私の師匠の頭の上で、壓しつけて殺さうとして居ります。どうか、それを早く取つて助けて戴きたい。」

帝君は聞いて魁星を呼ばれた。魁星は頭に冠を著ず、いくらかの髮があるだけだ。靴をはかない。兩腿は赤毛だらけだ。藍色の顏で、藍色の體だ。走つて來て跳つて居るところは、全く不體裁だ。手も拱かず、禮もせず、物も言はず、兩眼を見張つて帝君を見て居る。帝君は筆を取ることを命じて、

「筆は取つて來い。他の性命を傷けてはいかん。」

と云ふと、魁星は飛んで行かうとする。小行者は心配した。

「あんな有樣でどうなるでせう。」

「大丈夫。天下第一の文星だ。輕蔑してはいかん。一所に行つて、師匠を救つて、西へ行け。」

と云ふ。

小行者は禮をして、魁星と共に雲に乘つて玉架山に來た。この時は、夜がまだ明けなかつたが、魁星の身の光で、宮殿の中は晝の樣になつた。見ると、半偈は頭に、筆と金錠とを乘せてちやんと座つて居り、傍に猪一戒と沙彌とが居る。

魁星はそれを見て、名筆なのを知つて、喜んで東へ西へ、西へ東へ飛びまはる。と、光はいよいよ輝く。その勢で、右手で筆を輕々と取り上げた。また左手で金錠を取り起して、殿中を跳り廻つて罷めもしない。

半偈は重みがなくなつたので、大喜びで衣を振つて起ち上つて禮をするが、魁星は顧みないで、まだ跳ね廻つて居る。

猪一戒と沙彌とは行李を取り上げ、屁から龍馬を牽き出した。小行者は鐵棒を提げて奥殿の門の前で、

「麒麟兒、早く起きて來い。文筆と金錠とがなくなるぞ。」
と叫ぶ。天王は驚いて目を醒まして、前殿に駈け出して來る。と、魁星が筆と金錠とを持つて、飛び廻つて居る。悔しがつて、小行者を指して、
「飛んでもない奴だ。おれの數百年の苦勞を、すつかり皆無にしてしまつた。」
と罵ると、小行者は笑つた。
「恨みを云ふな。御前は聖人の春秋の筆を盜んだ泥棒だ。死罪にも行はるべき奴だ。が、文昌帝君は御前が瑞獸だから、仕置をするのは可愛さうなので許されたのだ。早く隱れて、聖人の世に出られるのを待て。おれも御前を許してやる。禮は此方に云ふべきだ。ぐず〳〵云ふと、鐵棒を食らはすぞ。」
天王は何とも云へない。奥殿に逃げ込んで、何處ともなく隱れてしまつた。石、黑二將軍も逃げてしまつた。で、小行者は、魁星に別れを告げ、半偈を馬に乘せ、猪一戒、沙彌と西へ向つた。
魁星はまだ跳つて居たが、一行の去るのを見て、筆と金錠とを持つて天上に歸つて、帝君にさし出した。帝君はそれを賜はつたので、魁星は今でもこの二つを持つて居る。

二五

半偈等は魁星の御蔭で、文筆の苦しみを脫れて西方へ向つたが、春の風が馬を吹き、曉の月が人に隨ふ。日數を重ねて著いた處は、山があまり高くなくて笑をたゝへ、水は甚だ深くなくて、穩やかに波を立たゝ居せてる。天氣も溫やかだし、道も平らであるし、何の事も起らないので、みんな喜びつゝ行くと、一陣の風が吹いて來た。
「いゝ匂だな。何だらう。」
と半偈が云ふ。小行者が答へて、
「詩に『風は花裡より過ぎ來つて香ばし。』と云ふのがあります。大方いゝ花草が向うにあるのでせう。」
「さうだらう。」
猪一戒が口を出した。
「あなたは兄貴が云ふと、すぐ御信じになる。」
「何だつて。」

「『花草が匂ふ。』と云ひましたが、さうは極りません。今は春が更け、梅は散つて、咲いて居るものは桃、李、杏、梨などですが、それにこんな匂はありません。外には蘭ですが、それもかうは匂ひません。」

「では、何の匂だ？」

「多分何處かの家で、佛事をして檀香を燒くのでせう。」

「馬鹿を云ふな。こんな野原に家はない。何處で佛事をするものか。」

「檀香でなくば、麝香でせう。詩に『麝過ぎて春山草木香し。』と云つてあります。」

「そんな詮索は罷め罷め、日が暮れかゝります。」

と沙彌が云ふ。と、

「さうだ。さうだ。」

と云ひあつて、半偈は馬を走らす。それについて行くと、匂はいよ〳〵濃くなる。

早く宿を借りようと云ふので、急ぐと、柳の間から立派な二階屋が見える。小行者は、

「いゝ宿が見つかつた。」

と前に來て見る。中には柳の蔭に白い石があり、その上に紅い敷物を敷いて、一人の美人が腰かけて、四方を眺めて居る。その傍に、三人の腰元が一人は赤、一人は綠、一人は黃の衣を著て立

つて居る。

半偈等は宿を借らうと思つたが、あまりの美しさに、躊躇つたがたゞ家は此處ばかりなのであるし、まだ日も追々暮れるので、弟子等に、

「どうよううう？」

と聞くが、小行者も、沙彌も默つて居る。猪一戒は、

「何で聾や啞の眞似をするのだ？　おれが行く。」

と云つて、

「御賴み申します。」

と呼ぶと、腰元が出て來た。猪一戒が、「西天に行つて佛を拜む道で、日が暮れたから、宿を借りたい。」と賴むと、

「女ばかりの家ですから、男の方は御泊め出來ません。」

と云ふ。猪一戒は押し返した。

「さやうでございませうが、日も暮れて行く處もありません。私どもの師匠は戒を受けて居ますし、私どもは蠢物ばかりですから、御差支はあるまいと思ひます。どうか、宿を御貸し下さい。」

と云ふと、腰元は主人に傳へる。

「それならば御宿はしませう。どうか御靜かに願ひます。」
と許したので、出て來てその事を云ふ。半偈は石の處まで行つて禮を述べる。美人は禮を返して、四人を案内する。
案内された家には、彫つた檻干があり、曲つた廊があり、右に轉じ、左に折れて、幾棟も幾層もある。美人は案内して置いて、衣裳を換へて出て來て、改めて四人に挨拶をするが、全く天人のやうだ。
「私方では、女ばかりで男の方は御斷りして居ますが、高德の方で入らつしやるので、御泊め致しますのです。失禮ですが、何といふ御名前でございますか。」
「私の名は大顚と申します。」
と云つて、三人を指して、
「これは弟子の孫小行者、これは猪一戒、これは沙彌と申します。」
と告げて、
「廊下の端でも構ひませんから、一晩だけ御泊め下さい。」
と云ふと、美人は、
「高德の方で入らつしやるから、供養させて戴くのが當然です。」

と腰元に茶を持つて來させる。いろ〳〵の果物、菓子類を並べさせて、匂のよい茶を出した。三人は遠慮するが、猪一戒だけは盛んに食べる。
部屋には香を焚かないが、高い匂が漲つて居る。半偈は美人に、
「この處は何と申します？　また御名前は何と仰せられます？」
と聞く。美人は、
「こゝは『溫柔村』と申します。私の姓は『鹿』でございます。私は生れてから、變つた匂を持つて居ますので、今は、『生香村』と申します。父も母もなくなり、婿がありましたが、亡くなりましたので、今は一人で住んで居ります。」
「御一人では大變でせう。早く御再婚になつてはどうです？」
「いゝえ、私はこの匂がありますので、嫁入りする氣はございません。髮を剃つて尼にはなりませんが、在家の出家で居ます。」
と云ふ中に、腰元が齋を持つて來た。見ると盛んな馳走だ。半偈が上座に、三人は横に座る。美人は下座に著く。酒が出る。半偈は「飲酒は戒めて居る。」と辭る。
「酒と申しても、水の樣なものです。どうぞ召し上つて下さい。」
「三人の中で、一人は少し戴け。切角の御厚意だから。」

と半偈が云ふが、小行者は「酒で失敗したから。」と辭る。沙彌は「性來飲めない。」と云ふ。猪一戒は默つて居る。半偈は、

「では、猪一戒、一杯戴け。」

と云ふと、酒の匂に堪らなくなつて居るので、盃を取つた。女が上手に勸めるので、一杯飲んで、また重ねた。また重ねた。十數杯にも及んで、酩つて、腰元に戯れたりする。半偈は見兼ねた。

「もういゝ。御飯を戴きませう。」

飯が來ると、みんな喫べた。

「休まして戴きませう。」

「まあ、御待ち下さい。御茶を差上げますから。」

と云つて、茶を出す。飲んでしまふと、腰元が奥へ案内する。眞中の部屋が半偈、傍のが各三人の部屋だ。いづれも錦の褥、縫取りの帳、柔かく匂のいゝ蒲團で、極めて美しいものばかりだ。美人は挨拶をして引き取つたが、半偈はあまりの立派さに驚いて、起きて座つて寢もしない。小行者も沙彌も、著物も換へずに、半分眠り、半分座つて居た。たゞ猪一戒一人は醉つて居る上に、こんな美しい處へ來たので、いゝ氣持で、夜具にもぐり込んでぐつすり寢た。

小行者は一寸睡つたが、覺めて考へた。「あの女は妖怪か。それにしては何處にも妖氣はない。

食物も飲物も怪しいものはない。不思議な事だ。人間にはあのやうな品の高い美しいのはあるまい。恐らくは、靈獸が人の形になつて居るのであらう。一つ樣子を探つて見よう。と蛾に化けて窓から飛び出した。美人の部屋を探して、窓の格子に止まつて居ると、美人は腰元と話して居る。

「いくらいゝ目だつて、私たちのかける圈套は見拔かれまいし、また逃げ出すことも出來まい。」

「さやうでございます。九分九厘まで大丈夫と存じます。が、この頃、王樣が獵戸に、香料が入るので私達を捕へさせる、と云ふ噂がございますが、本當だと大變でございます。」

「それも噂ばかりかも知れない。來ても、まさか明日ではありはすまい。その間に結婚してしまはう。」

小行者は女等の心持はよく知つた。しかし、「圈套とはどんな事だらう。分らないな。まあ、どうするか。見て居よう。」と飛んで部屋に歸つて居ると、その中に夜が明けた。

半偈も起きた。小行者と前の部屋に行くと、美人は、もはや朝化粧を濟まして出て來て居る。

「まだ御早いのに……。まあゆつくり御休みなさいまし。」

と云ふ。半偈は昨夜の待遇の禮を述べる。

「早く西へ參りたいので、起きましたのです。朝早くから御騷がせします。」

「どう致しまして……。御齋を作つて置きましたから召上つて下さいまし。」

沙彌も出て來た。が、猪一戒は出ない。美人は、
「猪一戒さんはいかゞでせう？」
「あれは昨夜戴き過ぎましたから、まだ目が醒めないのでせう。」
美人は、腰元に見せにやると歸つて來て、
「戸が緊かりしまつて、叩いても開きません。」
みんな不審に思つて、行つて見ると、その通りしつかり閉ぢて居る。小行者が指でさすと、ぎいと音がして開いた。で、入り込むと、綠の著物を著た腰元が、髪を亂して床の中から飛び出した。
美人に縋り著いて、
「あの和尙はひどい人です。私を蒲團の中に引つ張り込んで離しませんでした。」
と云つて泣き出す。美人は聞いて、顏色を變へた。
「飛んだ事です。高德の方の仲間でも、そんな人がある。」
半偈は喫驚して、何とも云ひ得ない。が、小行者はにこ〳〵して、
「さう御急きなさるな。相手を捕へますから。」
蒲團を剝ぐと、猪一戒は、
「あゝ眠い。も少し睡らせてくれ。」

「馬鹿。」
猪一戒はころりと起き上つた。
「何だつて。」
小行者は腰元を指した。
「どうして、貴樣はあの人をなぐさんだ？」
猪一戒は狼狽てゝ、床に座つて、天に向つて頭を度々下げた。
「阿彌陀樣、私が不行儀をしましたのなら、阿鼻地獄に墮ちて、永久に出ることは出來ません。」
と云ふが、美人はます〳〵怒つて、長い布で猪一戒と腰元とを縛らせて、役所に出さうとする。
半偈は初めは猪一戒が不都合をしたと思つたが、誓の詞を聞いて、半信半疑だ。
「まあ、御待ち下さい。何か事情があるでせうから。」
「待たれません。あの方は昨夜も醉つて、戯れかゝつたりせられました。全くそれが嵩じたのです。」
小行者は、
「まあ、いゝですよ。役所に御出し下さい。こんな事は、打たれたり、牢屋に入れるだけで生命にはかゝはりません。あれはいくら打られても平氣ですが、女の方は溜まりますまい。それに

しても、御宅の名前に拘はる方が大事です。役所に出さずに、御自分で御處置なされてはいかがです。」
「どうしたらいゝでせう。私は御一人ではなく、御三人一所にしたいと思ひます。」
「一人が不都合をして、三人までとは、どういふ事です?」
「並んだ部屋に寝られたのですから、同類でないとは云へますまい。」
「ではどうなさるのです?」
美人は歎息した。
「しかたがありません。あの腰元は、あの方と關係があつたのですから、あの方と結婚させるのです。外の二人各々の御部屋に參つたのは、この方と同じやうにするのです。と、不都合が却つて幸福になります。さうすると、私は半偈様と結婚致すことにします。それで三方四方圓く治まると云ふものです。これより外にしかたはありません。」
半偈は怒つた。
「意外の事を聞くものです。すつかり人を圈套にかける、と云ふものです。私の心は鐵石です。そんな圈套にはかゝりません。」
美人は笑つた。

「止むを得ないから考へたのです。圈套にかけるとは飛んだ事です。」
小行者は笑つた。
「役所に出れば、爭の相手ですが、結婚話となると親類同様です。まあ、齋を戴いてからの話にしませう。」
と云つて、みんな齋についた。
齋を濟ましてから、小行者は、美人に、
「どうも考へて見ると、和尚になつたものが、婿になると云ふのは人にも笑はれます。あなたはいゝ家に御片附きなきい。私たちは西へ參りますから。」
と云ふと、美人は非常に怒つた。
「ひどい人々だ。女だからと云つて馬鹿にして……。もう何處にも出しませんよ。」
と云つて、前後の門を締めさせ、猪一戒と腰元との縛を解き、四人を閉ぢ込めて鍵をさして、
「こゝで饑死なさい。もう構ひませんから。」
と叫んで行つてしまつた。
半偈は猪一戒を恨んで、
「大變な事をしてくれた。佛家の弟子でありながら。」

猪一戒はまた天を指して、誓つて、「決してそんな事はない。」と云ふ。
「では、やはり謀にかゝつたのだ。が、どうして此處を出よう。」
小行者は云ふ。
「いゝ考があります。まあ御座り下さい。きつと今に彼方から、開けに來ますから。」
と戸を出て、空に上つて、毛を一つかみ抜いて、口に入れて嚙み碎いて、「變れ。」と云ふと、いづれも獵人になつた。
獵人らは四五百人、一齊に太鼓を叩き、旗を振つた。
「國王様の御命令で、麝を捕へて麝香を取る。」
と喚き立てる。美人らはこれを聞いた。
「こりや大變だ。早く逃げよう。」
と出て見ると、獵人等は、もはや四方を取り圍んで、逃がさない様に構へて居る。しやうがないので、みんな一所になつて泣き出した。
小行者はそれを見た。空から下りて、美人の前に行つた。
「さう御泣きなさるな。私が救けて上げる。まあ、戸を開けて師匠たちを御出しなさい。圈套のやうな事は一切御話しなさるな。」

美人は腰元と跪いた。
「救けて下さい。この大難はどうもしやうがありません。あなたたちを西へ御行かせします。もう邪念は起しません。」
「それならば、早く開けて、みんなを御出して下さい。」
戸を開けると、皆出て來た。小行者は猪一戒に行李、沙彌に馬と、銘々に挑がせ、牽かせて、自分も門を出る。と美人はあわてゝ、
「私を早く御救け下さい。」
と云ふ。小行者は身の毛をしまつた。
「もう大丈夫です。虚言は云ひません。獵人はみんな歸らせました。」
美人は信じない様子だ。
「聞き合はして御覽なさい。みんな居ませんから。」
と小行者が云ふので、方々問ひ合はせさせる。本當に一人も獵人は居ない。美人も腰元も詫びた。
「活佛様、活佛様。とんだ失禮をしました。どうぞ御許し下さい。」
「二度とすると危い。香氣も出さないやうに。」
と小行者が云ふと、みんな深く禮を云ふ。それを聞きつゝ一行は西に進んだ。

二六

小行者は、獵人の計で獸妖を驚かし、半偈を扶けて西に向つたのであつたが、半偈は、

「よくもあれらの謀が分つたものだな。」

と云ふと、小行者は立ち聽きをした事を話すと、猪一戒は、

「おれも高僧の部だ。」

と云ふので、みんな笑つた。

限りなく歩いて、西へ西へと行くと、ふと變な匂がして來る。半偈は袖で鼻を掩うた。

「何處から來る匂だ?」

「何處からでもいゝではないですか。前にはいゝ匂から事が起つた。今日はまた惡い匂から何か出來るかも知れません。匂はない事、聞かない事……。」

小行者が云ふので、そのまゝ來るが、どうも堪らない匂だ。と云ふ中に山が見える。その山の有樣は、峯は狼の牙そつくり、石は鬼の顏そのまゝで、集まつた處は、虎や豹の口を張つたやう、叢がつた樣子は魔物や變化の集まつた如くである。半偈は小行者に問ふ。

「どうだ。あの山の樣子は、……いゝ處ではないな。氣を著けて行かなければいかん。」

「樣子を一つ聞いて見ませう。」

と云つて前に立つたが、聞くべき人がない。で、呪を結んで土地の神を呼ぶと、白鬚の老人が現はれた。

「何か御用でございますか。」

「土地の神か。神ならば、すぐ迎へに來べきだ。どうしたのだ?」

「いや、さうではありません。唐僧は『神を使ふことを御喜びにならない。』と聞いて居りますので、わざと差控えたのです。」

「さうか。それはそれでよろしいが、この山は何だ。妖怪が澤山居るだらう。」

「この山は惡山と云ひます。妖怪の惡い奴どもが十人も居ます。人を蒸して食ひ、煮て食ひますので、この邊には人は居ません。」

「名は何と云ふ?」

「纂惡、逆惡、反惡、叛惡、劫惡、殺惡、殘惡、忍惡、暴惡、虐惡と云ふ大王どもです。」

「何處に居る?」

「方々の洞に分れて住んで居ます。それも御互に爭ひあつて、一致しません。が、惡い匂を出し

て居ますから、その匂だけでも人は死にます。」
「さうか。そんな奴らはみんな退治てやる。もう歸つてよろしい。」
と云ふと、土地の神は退いた。
小行者は歸つて牛偈に、
「妖怪は十人も居ます。が、でん〳〵ばら〳〵ださうですから、御心配には及びません。」
と前に立つて行く。
十人の妖怪は、散々人を殺して食つたので、あたりに人がなくなつた。遂には、お互に手下どもを殺しあつて食つて居た。丁度、この日、東の山口の殺惡大王は手下を連れて、山の上から見て居ると、遠くから四人の和尚が來るのが分つた。
「今日は腹一杯食へるぞ。」
妖怪どもは刀を提げて群がつて、近づいた四人を取り圍んだ。
「馬に乘つた色の白いのは蒸すと旨さうだ。」
「口の長い耳の大きいのは、肥つて居るから煮てよからう。」
「色の黑いのは、鹽漬、鹽漬。」
「肉の少なさうなのは、炒たら酒の下菜にならう。」

と口々に云ふ。小行者は笑つたが、猪一戒は怒つた。釘鈀を取り出して、自分の事を云つた妖怪をいきなり一衝きにすると、血を流して仆れた。
「どうだ。手前らの新しいのを、煮て食つたらよからう。」
と云ふと、殺惡大王は怒り立つて、猪一戒を目がけて打つて來る。猪一戒は釘鈀で迎へる。二人は一團となつて戰つたが、大王は受けられないので、手下を呼ばうとするのを見て、小行者は鐵棒で後に廻つてそれを遮る。大王はそれに氣を取られてふりかへる處を、猪一戒は身を飛ばして衝き仆す。手下どもは、頭が負けたと見て喫驚して、「わつ」と云つて散つて行く。
散つた妖怪どもは、方々の大王に、「殺惡大王が四人の坊主の一行に殺された。」と告げる。大王どもはいづれも、
「まさかそんな事はあるまい。」
と訝るが、手下どもは、
「御覽下さい。すぐ分ります。」
と云ふ。劫惡大王と、殘惡大王と忍惡大王との洞は、山の東南で一番近い。手下どもを連れて眞先に出て見ると、確かに一行が通つて居る。
「こりや、三人一所にかゝるがよからう。」

と、吶喊を作り、旗を振つて、物をも云はず、劫悪は小行者、殘悪は猪一戒、忍悪は半偈に向つて來る。沙彌は半偈をかばつて自分で出る。こゝに六人が三組、死生知らずの戰となつた。塵が立つて空を蔽ひ、烟が上つて日を障る。幾度打ち合つても勝負はつかない。

三組の戰の中、小行者が一番すぐれて居た。ふと隙を見せて身體を振ると、劫悪はそれに釣られて衝つ込んで來る。それを待ち受けて鐵棒を打ち下すと腦に當つて、桃の花が散る樣に、血が迸つて死んでしまつた。殘悪、忍悪はそれに驚いて、急いで引つ外して逃げ出した。

二人はやつと逃げて、山の中に來て、

「どうだ。えらい奴だな。力では叶はない。計略、計略。」

「どんな計略だ？」

「いゝ事を思ひ附いた。あの夾壁峯に彼奴らを這入り込ませるのだ。あの入口と出口に石を積んで、すつかり塞いでしまふ。と、彼奴らは何處からも出られないから、すこし經てば、谷で饑死してしまふ。こりやどうだ？」

殘悪は喜んだ。

「妙計、妙計、さうしよう。」

と手下に石を運ばせる段取をして一應隱れた。

一行は二人も大王を殺したので、いゝ氣持で山に這入つて行く。半偈は、

「妖怪どもは多さうだから、氣をつけんといかん。」

と云ふが、小行者は、

「大丈夫です。此方の手並に驚いて出ては來ますまい。」

と云つて進む。

山の形は外から見るよりも一層凄い。寒い風が吹いて肌が粟立つ。それにひどい臭は腐つた肴の市に這つた樣、身體中臭くなつた。が、妖怪どもは少しも現はれないので、安心して行く。半里も進むと、西方の峰が壁のやうに立つて、其の間は全く長い廊下の樣だ。

「これが路か。大變な處だな。」

「行けば、どうかなるでせう。」

と進むと間もなく、大きな聲が後でする。無數の妖怪どもが、谷の口を石で塞ぐのである。

「あれはどうだ？　計にかゝつたか？」

「いくら後を塞いでも、私たちは前へ行くのです。差支はありません。」

と、また七八里行つて、谷の出口に來ると、そこも大石小石ですつかり塞いである。

半偈は驚いた。

「どうしたらよからう。こゝで止まつたら饑死してしまふ。」
「いや、大丈夫です。木がある、茶がある。あれで小屋を造つて、茶を煮て食へば、やつていけます。」
と沙彌が云ふ。半偈は怒つた。
「冗談云ふな。大事なところだ。」
猪一戒が云ふ。
「穴を掘つたら、出られんこともあるまい。」
小行者が云ふ。
「それは出來ない相談だ。」
「では、長い梯子で越すより仕方がない。」
「そんな梯子があるものか。」
小行者は考へた。
「惡は惡で攻めるのがよろしい。私はこの舌で、大王どもを說き廻つて、御互に戰はせます。で、殺し殺させて、石の蓋を開きます。」
「それはよかちう。用心してやれ。」

「御心配に及びません。旨くやります。」
沙彌と猪一戒とに半偈を守らせて、身を飛ばせて峯の上に上つた。見ると、殘惡大王が手下と峰の口を集まつて守つて居る。それを見置いて、臭の最も濃い處へと進んで來る。ちやんとそこに洞がある。反惡大王の住居だ。前に立つて案内を乞ふと、妖怪どもが出て來た。
「旨いものを献上しに來ました。」
妖怪どもは見て、
「こんなのが旨いだらうか。」
と云ひ合ふ。
「私は駄目です。本當に旨いものです。」
妖怪どもは反惡大王に通ずる。大王は、四人の和尙が殺惡、劫惡の二大王を殺して、えらく强いと云ふが、行つて殺して食はう、と思つて居る處だつた。そこへ、「美食を献ずる。」と云ふのだから、すぐ小行者を呼び込んだ。
「何處から來た和尙だ？　旨いものとは何だ？」
小行者は恐れ入つた風をして、
「私は唐から來ました。私の師匠は『大顚』と申します。この人は色が白くつて、よく肥えて居

ます。佛祖の生れがはりだと申しまして、『血を十分吸へば萬年は生きられる。肉を一切喫べても千年は確だ。』と噂します。手下の猪一戒と沙彌と云ふのが手並があつて、二人の大王を打ち殺して山の中を通つて居ますが、殘惡、忍惡の二人の大王が相談して計を構へて夾壁案の谷の中に引き込み、出さない樣にして死なせて、二人だけで食はうとされて居ます。そればかりでなく私ども三八も一所に食はうと考へられて居ます。これは非常に得手勝手で、大勢ある大王に分けることはされません。自分らだけが、旨いものを十分食べて、千年も萬年も生きようとされるのです。それで私は不滿で溜まらず、そつと谷から脫けて來て、大王にこの事を申上げるのです。これだけ申し上げますから、私だけは生命を御救け下さい。」

と云ふと、殘惡大王は怒つた。

「自分らだけ、旨いものを食つて生き延びようとは勝手千萬だ。どうしてくれよう。戰つて殺してやらう。」

小行者は思ふ壺で、

「それでは大騷ぎになりますし、骨も折れます。それよりは、手下をつれて手傳に行つて、『此方にも少し寄せ。』位云ふと、先方は少しも疑ひません。その中に隙を窺つて、一刀で御殺しになれば、手數がかゝりますまい。」

と云ふと、大王は喜んだ。

「ではさうしよう。御前は考へがいゝ。二人を殺したら、許して手下にしてやらう。」

「辱うございます。」

殘惡大王はすぐ一刀を提げて、十人ばかりの手下を連れて、殘惡大王のところへ來た。

「同じ山に居るのだ。坊主の旨いのがあるさうだが、何で知らせないのだ？　自分らだけで食はうとはひどいぞ。」

と笑つて云ふと、殘惡大王は、

「まだ捕へもしないのだ。捕へたら知らせようと思つて居るのだ。」

「それで手傳に來たのだ。捕へたら一所に食はう。」

と云ひつゝ近づいた。殘惡大王は氣が著かないので、すつかり油斷して居る處だ。それをだしぬけに、刀で衝きさした。殘惡大王は忽ちよ仆れて、呼吸が絕えた。

殘惡大王が殺されたのを見て、手下どもは喫驚した。思はず地に座つて「御助け、御助け。」と云ふ。殘惡大王は、

「よし、御前たちは關係はない。許してやる。よく山口を番しろ。」

と許して、喜びながら、

「旨いものは忍悪大王と二人で食しう。」、
と云ふと、小行者は、
「そりやいけません。忍悪大王はまだ御存じない。早くそれを片づけて、大王一人で召上つたら
どうです？」
とけしかける。
「さうだ、さうしよう。」
と反悪大王は、夾壁峯の後を守る忍悪大王の處に來た。
「殘悪大王が和尚を食べるのに、一所だと云ふので招かれて來た。が、『後から逃げるかも知れ
ん。』と云ふので、此方の御助けにとわざ〳〵やつて來た。」
と云ふ。忍悪大王は、
「大丈夫、逃しはしない。肉はきつと分ける。」
「そりや有り難い。しかし、方々の大王が知つて來たら、どうだ。」
「そんな事はない筈だ。」
と云ふと、反悪大王は指でさして、
「でもあんなに來るではないか。」

と云ふので、ふりかへるところを、反悪大王は一刀で斬つた。
「降參しないか。しない奴はこの通りだぞ。」
と云ふと、手下どもは、みんな頭を下げた。
「どうだ。おれの手並は。旨いものはおれ一人占めだ。」
「さうですが、しかし、すこしどうかと思ひます。」
「どうして？」
「あの和尚たちが饑死するには、二三日はかゝります。その中に、方々の大王が知られたら、き
つと『分前を寄せ。』と云つて來られます。あなた一人と云ふ譯には參りますまい。」
反悪大王は考へた。
「どうしたらよからう。いゝ考があるか。」
「あなたは、悪といふ名がありながら、そんなに悪ではありませんな。」
「いや、おれが一番悪いのだ。人を殺しても眼じろかず。人を食つても眉も皺めない。おれほど
のものはない。」
小行者は云ふ。
「それならば、この山をどうして、『十悪山』といふのです？　あなたが一番ならば、『獨悪山』

と云ひさうなものですが。」

反悪大王は眞赤になつた。

「おれは悪をしても、一番にならない。羞しい事だ。」

「いや、あなたは悪心と悪力があつても、悪計を御存じない。」

「御前にいゝ考があつて、おれを一悪大王とするならば、おれは御前を悪大功臣として、山の半分を褒美にやる。」

「褒美は入りませんが、悪名を世に遺しませう。まだ方々の大王はこの様子を御存じない。あなたは手下に、『唐僧と云ふ旨い馳走がある。早く食ひに來い。』と云つて御遣りになる。と方々から喜んで集まつて來られる。一人來れば一人殺し、二人來れば二人殺し、五人を殘らず殺して、あなたが一人旨い物を召し上る。その上に、この山を一人で占めると云ふのはどうです？いゝではないですか。」

反悪大王は喜んで飛び上つた。

「うまい、うまい。お前の方が、おれよりもよつぽど悪だ。が、その通りにしよう。」

と五人の手下を方々へ出す。

山は周廻千里もある。各大王はあちこちと別れて住んで居る。遠いのもあり、近いのもある。

一時に招き、一時に來るといふ譯には行かない。叛悪大王は近いので、直ぐ來た。前に來て、一二句話すところを、反悪大王は一刀に斬り仆した。屍體を片づけて居る間に、暴悪大王が來た。三人殺して手馴れて居るので、這入つて來るのを後に廻つて斬りつけて仆した。續いて虐悪大王が來た。これも直ぐ斬り仆した。

五人殺して、反悪大王は喜んだ。

「和尚の計は旨いぞ。七人の中五人までやつつけた。殘る二人は何でもないぞ。」

と云つて居る處へ、簒悪大王と逆悪大王と二人一所に來る。反悪大王は驚いた。

「何でもありません。『和尚等が後の山から、逃げようとして居る。』と云はせれば、『それは大變。』と一人が行くでせう。さうすれば一人づゝ殺せて樂になります。」

「よろしい。さうしよう。」

と云ふ中に、二人がやつて來た。

「君が骨を折つて捕へる奴を、自分も御裾分に預るとは辱ない。」

「いや、『あの和尚の肉を食へば壽命が長い。』と云ふから、自分たちだけでは濟まんと思つて、招いたのだ。」

と云ふ處へ、手下が、

「夾壁峯の和尚は一人死にました。殘りの三人が後の方が手隙なので、それを知つて石を除けて逃げようとして居ます。」
と告げて來た。反惡大王はわざと喫驚して、
「そりや大變だ。前はおれが守つて居るから大丈夫だが、後には困つたな。誰も居ないのだから。どうしようか。」
纂惡大王が聞いた。
「いや、おれは、何の手柄も立てゝ居ない。そこへ行かう。」
「そりや有り難い。」
と云ふのを聞きつゝ駈け出した。それを見て、反惡大王は一刀を引き拔いて、逆惡大王を斬つて二つにした。直ぐ出て來て、纂惡大王に追ひ附いて、
「大王がみんな來た。前の方は人が多くなつた。後の方へおれも行かう。」
「では一所に行かう。」
と云ふのを後から頸へ斬りつけると、すぐ地に仆ちた。
反惡大王は、殘らず殺して大笑をして洞へ歸つて、小行者に、
「お前の御蔭で、みんなやつつけた。おれはこの山の一人の王だ。お前を『逆惡大和尚』と名づ

けよう。」
と云ふと、小行者は禮をした。
「が、すこし御話したい事があります。」
「何だ?」
「大王が、みんなあなたに殺されました。それが默つては居らず、多分閻魔のところへ行つて訴へるでせう。あなたはそれを御恐がりになりますまいが、御安心は出來ますまい。死んだものの恨を殘さないやうにするのが、大事ではありませんか。」
「さうだ、さうだ。いゝ處へ氣が著いた。それはどうすればいゝ?」
「懺悔すればいゝのです。」
「それはどういふ風にする?」
「あなたは天に向つて御跪になればよろしい。私がやりますから。」
「でも、おれは王だ。王が跪くといふ事があるものか。」
「さうではありません。皇帝だつて、天を祭る時には跪きます。」
「では、さうしようか。」
と云つてちやんと跪く。

小行者は鐵棒を取り出して、天を指して、

「纂悪は不忠だから、殺すのは當然。逆悪は不孝だから殺すのは當然。暴悪、虐悪は不仁だから殺すのは當然。殘悪、忍悪は不慈だから、殺すのは當然。叛悪は不義だから殘すのは當然。反悪は叛悪とは同罪だから殺すべきだが、天の許を求めて居る。だが、上天から仰がある。すべて十悪は赦されない。反悪は孫履眞に打ち殺さしめる。」

反悪大王は驚いて逃げ出さうとするのを、小行者は棒を振り上げて、一打ちに打ち碎く。手下の妖怪は仰天して逃げ散らうとするのを小行者は留めた。

「待て、待て、貴様らは殺さない。救けてやるから、そのかはりに道を開けろ。石を搬び出せ。」

と云ふと、手下どもは、せん方なく石を取り除ける。

猪一戒と沙彌とは、表から石の運び出されるのを曉つて、裡面から武器を衝き出す。兩方から崩すので、もとの通り道が開いた。悪い臭はなくなつた。

小行者は今までの巨細を詳しく述べると、半偈は感謝した。で、馬に乘つて行かうとすると、傍から土地の神が出て禮して、

「十悪は、小行者の大力でなくては、とても掃はれません。御蔭さまで助かります。」

と云ふ。小行者は、

「御前もよく氣を著けろ。悪念をまた萠させてはいかんぞ。」

と戒めて、一行は西へ行つた。

二七

半偈は、小行者が十惡を掃つて、惡い臭をのこらず消したので、大喜び四人で西へ西へと進んで居たが、道も半分以上通つたので、また得意にもなつた。で、一日餘り行くと、忽ち一つの都會が見えた。半偈は、

「あれは帝王の都と見える。田舍とは違ふ。氣を附けて這入らう。こゝで通行手形を換へて貰はう。」

と云ふ。

進む中に城下に來た。「何と云ふ國だ？」と聞いて見ると、「これは『上善國』と云ふ。よく開けた國で、しかも君も臣下も賢明であるから、騷ぎは一つも起らず、穀物もよく出來る。」と敎へるものがある。喜びつゝ、外人を迎へる役所に著くと、そこの役人が出て來て、半偈を見て驚いた。

「あなたはどこから御出になつた？」

「私は、東の大唐國から參りました。」

と來た譯を述べる。役人はよく〳〵見て、

「あなたは本當に東から見えられたのか。西の方に永く住んで居られたのではないですか。」

「さうではありません。東からです。手形があります。早く御役所へ出て御換へ願はうと思つて居ます。虛言は申しません。」

「いや、遠方から御出ならば、御通りになつて、齋を召上れ。」

と云つて通す。四人が這入ると、役人は云ふ。

「こゝへ御座り下さい。すぐ齋を持つて來ます。が、私は一寸用事がありますから、出て參ります。」

「どうぞ、御構ひなく。」

役人は出て行つた。

暫くして、三四人が來た。半偈らをよくよく見て出て行つた。とまた一人頭らしいのが來た。禮をした。

「あなた方は何處から見えられた？」

「東から參りました。」

「どうもさう思はれないが。」

一所に出て行つた。
「何かありさうだな。」
「何があるものか。見定めるばかりだ。早く齋を喫はう。」
「いや、どうも變だ。悪い事がありさうだ。」
「こんな都で盜賊などは居まい。何でもあるまい。」
と云ひも終らず、表に人聲が湧き上るやう。文官二人、武官二人、大勢の役人を連れて、一齊に這入つて來て、半偈を捕へて、繩で縛り上げた。半偈は、
「私は東から西へ參るものです。何も致しはしません。一體これはどうした事です？」
と云ふと、武官は叱つた。
「何だ。妖坊主とよく分つて居るのに、何を云ふのだ。」
半偈は答へた。
「天下に和尙は大勢居ます。どうして私を妖坊主とは？」
「さうは云はさん。ちやんとした證據があるぞ。あれを持つて來い。」
下役人が一幅の畫像を持つて來た。見ると、それは和尙の像で、半偈にそつくりだ。
「どうだ。これが妖坊主だ。これでも間違つて居るか。」

半偈は呆れて何とも云へない。
小行者は見て、
「さう同じであれば、仕方がありません。が、あなた方は、師匠を何處へ御連れなさるので？」
四人は答へる。
「何處でもない。大事な事だ。御前へ連れて出る。帝が直々御審べになる。」
小行者は云ふ。
「御前に御出でになれば、私は手形を換へる用がありますから、御伴をします。」
役人どもは、縛つた半偈を御前に引き出した。
上善國王はまだ若い。先王は亡くなられてやつと十八歳だ。孝行であつて、且つ怜悧で居られる。その孝行される皇太后は佛敎好きで佛を信仰される。佛堂を奥殿の後に作つて、三世の佛たちを供養し、毎日香、花、燈を供へて懺悔して、「必ず自分も佛にならう。」と數年來勤められた。
ところが或日、日中に佛が現はれて、
「あなたが、あまり信心だからわざ〳〵出た。」
と云はれた。
これから、佛は屢々見えた。吉凶禍福を云はれると、その通になつた。をり〳〵不思議な事を

見せられた。太后はすつかり感じ入つて、毎日「その力で佛になりたい。」と、そればかり願はれた。

上善國王は「何だか怪しい。」と思はれたので、太后にその事を云つて、泣いてまで諫められたが、太后は聞き入れられなかつた。

ところが、ある日、佛がまた現はれて、太后に役人をみんな退けさせて、門を締めて說敎をした。國王がそれを聞いて、急いで行かれると、忽ち花が雨のやうに降り、それと共に香のいゝ風が起つた。國王がやつと這入られると、太后はすでに其處には居られなかつた。

國王は大狼狽で、佛の畫像を畫かせて、役人に云ひ附けてそれに照らして、あたりを殘らず探させられたが、さつぱり分らない。國王は悲しみに堪へず、毎日哭いてばかり居られて、一月も經たうとする日、近臣が、

「妖坊主が、捕へられて參りました。」

と奏上する。

「何處に居る？」

「御門前に居ます。御直々の御審判を御待ちして居ります。」

「こゝへ連れて來い。」

大勢の役人が集まつた。半偈はそこへ引き出された。國王は見られて、

「確かにこれだ。これに違ひない。」

で、聲を荒らげて、

「貴樣は何といふ名だ？　どうして佛に化けて、太后を御欺ましたのだ？」

半偈は聲を高くして、

「私は大顚と申します。大唐國の生れで、勅命で西方へ行つて、佛を拜み、經の眞解を求めに行きます。」

と述べて、この國に著いてからの事を云ひ、更に、

「私は全く知らない事です。御明察を賜はりたい。」

と云ふ。

「いや、自分は說敎をする處で、よく〳〵見て知つて居るのだ。何の察しが入るものか。」

「顏附は同じでも、異なつたものが居ます。よく〳〵御察しにならぬと間違ひます。」

「もし御前の云ふ通、異なつて居るなら、御前はどうしてこゝまで來た？　大唐國までは五六萬里もあると云ふ。怪物が澤山居る。とても普通では來られたものではない。德があるか、手段があるか、何方かゞなければならん。もし德と手段があるならば、太后を御連れして來い。」

小行者が進んで出た。

「申し上げます。その妖坊主の様子を御聞かせ下されゝば、私が捕へます。」
國王は語と顏附とに驚かれた。
「御前は何だ？」
「孫小行者と申します。半偈の弟子でございます。師匠には德があります。私には手段がありま
す。」
「大きな事を云ふ。氣でも狂つたか。」
「狂つては居ません。必ず捕へます。が、その樣子を詳しく御聞かせ下さい。」
國王は始めからの事を一々云はれる。
「分りました。どんな奴かと思つたら、獸の化けたのですな。何でもありません。が、師匠を御
許し下さい。また齋を戴きたい。」
「齋どころではない。宴會でもする。繩は解かうか？」
「こんな繩で縛つた位は何でもありません。師匠は德があるから辛抱して居るのです。逃げよう
と思へば、すつかり切れてしまひます。」
と云つて、指をして一聲かけると、繩は刀で切つた樣にばら〳〵に散つてしまつた。役人どもは
驚いて逃げようとする。小行者はまた聲をかけると、泥でつくつた人形の樣。立つたまゝで動か

れもしない。
國王は驚いて、
「えらい法力だな。凡僧と思つたのは間違だ。此方へ、此方へ。」
と招かれる。半偈は禮をして殿に上る。國王は、齋を命じ、また近臣に猪一戒と沙彌とも招かし
められる。二人は來て階下に立つと、國王は小行者とも、また變つた顏附に驚かれる。
齋が濟むと、國王は、
「妖坊主はどうして捕へられる。當もない事だが。」
と云はれる。小行者は、
「この邊に名のある山はございませんか。」
國王は宰相に問はれる。
「ございますとも。が、この邊のは人の遊びに行く位なので、深いのは離れて居ます。百里あま
りの處に、九尾山と云ふのがあります。九嵕山の脉で、こゝで九つに分れて居ます。いろ〳〵
の峰、さま〳〵の岩があつて、みんな奇々怪々の形をして居ます。こゝの外には、名のある山
はありません。」
「はゝあ、其處に違ひはありません。早速行つて見ます。」

と云ふ中に空に跳び上つて居る。國王は驚く。半偈は、
「私は出來ませんが、徒弟は空中を往來します。」
國王は聽いて、尊敬の念を起された。
小行者は西南へ向つて行くと、一帶の高山が見えて來る。峯が峯と續いて、遠い處から近い處まで伸びて來て居る。霞がかゝり烟が纏つて、縹緲模糊としてはつきりしないが、まさに九つに分れて居る。山の上に登つて見る。曲りくねり、うねり繞つて、一つも眞直い處はない。『九尾山』とはよく云つたものだ。』と探して見ると、山が廣くて、大きいので、何處として摑むことが出來ない。で、空に上つて望むと、かすかに鐘、太鼓の音がする。下りてよく聞くが、こゝでは分らない。
溪川の一筋流れて居るのが見える。それに沿うて、小行者は歩いて行く。大きな亭がある。その下で女たちが何か話しあつて居る。それに尋ねようと思つたが、喫驚させてはと考へて、身を搖はせて、一匹の蠅となつて前に飛んで行つた。その女たちは、頭をつる〳〵に剃つて尼の樣であるが、著物は美しくつて、女官に似て居る。一人の頭に飛んで止まつて居ると、
「明日は、佛樣が大歡喜緣を結ばれるのですが、どうなるでせう?」
「さうですよ。太后樣が御嫌がりになるから、何となるでせう?」

「太后樣は御聞入れにならんにしても、かうなつてはしやうがありませんよ。」
「まあ、人の事はどうでもいゝですよ。それよりか早く、菜を洗ひませう。」
と、さつ〳〵と洗つて籃に入れて歸つて行く。小行者は頭に止まつたまゝで、洞の中に這入つた。
洞は澤山あるが、この洞が一番奥だ。繞り〳〵して居る中に、やつと洞の門が見える。上に小字で、「九尾山千變佛洞」と書いてある。中に這入つたが、眞暗で何も分らない。それに路は右に左に廻り廻つて居る。が、暫くすると、少し明るくなる。一里ばかり行くと、樓閣が見える。だん〳〵日がさして來て、すつかり明るくなつた。女たちは臺所へ行くので、小行者は頭から下りて、殿上に來て見る。
殿上には、過去、現在、未來の三尊大佛が祭つてある。二十四人の和尚が下りて讀經して居る。殿上の幡、天蓋、香、花、燈籠など、立派な美しいものばかりだ。左の方に別に席があつて、一人の色の白い和尚が座つて居る。まことに半偈とよく似て居る。頭に纓絡を垂れ、身に珠衣を纏つて、全く佛の樣である。右の方にまた一席があるが、誰も座つて居ない。
「はゝあ、あれが妖坊主、こちらが太后の席と云ふ譯だな。太后が嫌がられると云ふのだから、どうなるだらう。」
と大佛に止まつて動かずに見て居る。

經が了つた。午の供物をする時になつた。妖坊主は女どもを呼んだ。
「太后を御招きして來い。」
と命ずると、みんな行く。小行者はそれについて奥殿に來る。太后はそこに座つて涙ぐんで居られる。三十五六歳で、色が白く、髪が多く、眼も眉も齊つて、缺ける處がない。女どもは跪いて、
「大殿で御待ちでございます。」
と云ふ。太后は怒つて、
「行かれない。無理に云ふのなら死ぬばかりだ。國王がこゝに居るのを知られたら、御前たちも安穩では居られないぞ。」
と云つて、奥の部屋に這入られた。小行者はそれについて行つて、飛び下りて、
「太后様。」
と云ふ。太后は驚いて、身體中汗になつて、悸へながら、
「誰だ。また來て妖すのか。」
「さうではありません。國王の御云ひつけで御救に來たのです。」
救と聞いて、太后は喜ばれた。
「救に來たのなら、どうして形を現はさない？」

「形を現はすと、人に見られます。」
「では」と方々を閉めて、
「かうすれば誰も見はしない。」
小行者は形を現はすと、恐ろしい様子なので、太后は怖がられたが、しかたがないので、
「御前は一體誰？　國王がどうして御頼みになつた？」
小行者は來歴を詳しく云つて、尋ねあてた經過も述べる。太后は喜ばれたが、また心配された。
「救に來てくれたのはいゝが、こゝには仲間が多いから、一人ではどうだらう？」
「大丈夫です。仲間の多いのは構ひません。が、こゝはくる〳〵廻つて居て、一寸出られませんから、彼奴を外へ出す様に致しませう。」
「どうして出す？」
小行者は云ふ、
「もし、彼方から呼びに參りましたら、御出で下さい。」
「出てどうする？」
「御出になつて、彼奴が、『歡喜緣を結べ。』と迫りましたら、三尊佛に御尋ね下さい。そこに私の手段がありますから。」

と云ふ時、表にまた女どもが來た。小行者は蠅にかへつて頭に止まつて居る。
「何の用か。」
「申し上げます。『この道場は極大切な事でございます。必ず御出で下さい。』と申されます。どうぞ御出で下さいませ。」
「よろしい。行きませう。」
女たちは效があつたのを喜んで前に立つ。
大殿に出ると、妖坊主は喜んだ。
「御出になりましたか。一所に御供へしませう。佛になれる事ですから。」
「どこへ供へるのです?」
「あの三世の佛樣へです。」
「その前に一寸私は佛樣へ御尋ねします。もし、『さうしろ』と云はれゝば、その通りに致しませう。さうでなければ仰には從はれません。」
妖坊主は驚いた。
「それは如何でせう。佛樣は舌がありません。御答へは出來ますまい。」
「いゝえ、答へられるかも知れません。ともかく御尋ねして見ます。」

と云つて佛前に出て、禮をして、
「佛樣に御尋ね申し上げます。御弟子の私は、一心に御縋り申して居ますが、もし前世の罪を今世で償ひますのなら、此身は惜しいと思ひません。さうでないのに、外から逼られますのなら、どうぞ、御慈悲に御救け下さいまし。」
と云ふが。妖坊主は「何んで答があるものか。」と高をくゝつて居ると、意外にも中の佛が聲を出された。
「上善太后。歡喜緣、それは御前の前世から起つた事で、今世で償ふべきだ。」
「では、前世にどんな事がございましたか。仰しやつて下さいませ。」
「云つて聞かさう。御前は前世に和尙であつた。眞の事は知らず。たゞ口先で說敎して花の雨などを降らして人を迷はして居た。だから、現世に女と生れて、野狐などに纏はされて居るのだ。」
と云はれる。妖坊主は實は一匹の尾の九つある狐で、多年の修練でよく化けられるのだ。で、今は佛の形になつて、太后を騙して居るのだ。それを俄かに云ひ出されたので、すつかり恐れ入つて、ぱつたりと跪いた。と佛はまた、
「こりや、九尾の奴、狼狽んでもいゝ。御前は前世一匹の虎であつた。狐を澤山殺して食つた。今はその狐が虎となり、虎が狐となつた。幸に御前は修練して居るから歡喜緣と云ふ事にもなつ

たのだ。が、自分は御前のために慈悲心を起し、山の神に云ひつけて、虎の爪や牙を抜き取らした。仇を討つのだが、實は討つて討たない樣にして、善惡の報が違はない事を示してやる。今日のこの事は中止して、明朝、雷の聲がすると、御前はそつと後の山の伐り株のところに行け。そこに牙の無い虎が死にかゝつて寢て居る。御前はもとの形を現はして、その虎の口へ頭を入れろ。それで一切の恨がなくなるのだ。歡喜緣はそれから出來る。分つたか。」

妖坊主は辱ながつて、しきりに頭を下げた。

「有り難うございます。仰の通りに致します。」

と云ふ。太后は委細がよく分つた。わざと

「前世の罪が報いるのならば、仕方がありません。」

と云つて、奥殿に歸られた。

小行者は飛んでそれについて行つて、太后の耳の側で、

「私は歸つて國王に申し上げて、明日は御迎に參ります。」

と云つて、洞から飛び出して、雲に乘つて宮中に歸つた。

國王は半偈と話して居られたが、小行者の雲から下りるのを見て、

「御苦勞、御苦勞。してどうだつた?」

小行者は先方の樣子を詳しく述べた。國王は身分も顧みず、身を倒にして禮をして、

「御蔭で生き返つた氣がする。」

と云はれる。小行者は、

「恐れ入ります。が、明日の用意をさせて戴きます。」

「明日の用意とは?」

「太后樣を、九尾山まで行つて御迎する御輿の事です。」

「有り難い。早速しよう。」

と云つて、準備をさせ、四人に手厚い齋を出し、殿中に泊らせられた。

翌日早く、小行者は起きた。猪一戒に、

「こゝで御馳走になるばかりが能ではないぞ。おれと一所に行つて手柄を立てろ。」

「よろしい。行かう。」

と一處に出る。沙彌は半偈を守つて殘つて居る。

二人は雲に乘つて九尾山に著いた。と小行者は猪一戒に釘鈀を草に藏させて、齒のない虎とならせた。

「妖怪が原の形を現したら一口で咬みつけ。離してはいかんぞ。」

と云ひつけて、天に向つて息を吸つて洞の門に向つて吐いた。曲りくねつた洞だから、それが反響して雷の様な音になる。妖坊主はそれを聞いて、驚いたり喜んだりして、獨で山に上つた。

云はれた通りに、妖坊主は後の山の切株のところに行くと、虎がちやんと死にさうになつて寢て居る。試に近よつて、脚で一蹴り跳つて見ると、少しも動かない。よく〳〵見ると、齒は一つもない。「佛の御語は間違はない。」と思つたので、九尾の狐の姿になつて、虎の口に近づく。猪一戒は「おゝ」と一聲出して一口に嚙みついた。が、痛くないので、狐は安心して嚙まれるまゝに任かして居る。

猪一戒は嚙んでも嚙み殺せないので、考へて見ると、齒がないからだ。「口に齒がなくつても、釘鈀にはある。」と狐を喫へながら、釘鈀の處まで行つて、急に姿を現はして釘鈀を取ると、狐は驚いた。虎ではない人間だ。「こりや大變。」と逃げ出さうとする處を猪一戒は釘鈀で衝いて、一氣に殺した。

小行者はかけつけた。狐が衝き殺されたのを見て大喜び、急いで山の前に出ると、輿が來て居る。で、太后を御迎へして御還しする。

洞の中では、早くも手下の妖怪どもはもう逃げ散つて、殘るものはない。二人は火をかけて、宮殿を燒き立てゝ置いて、死んだ狐を提げて雲に乘つて御殿に歸つた。

「これが太后樣を騙した奴です。」

と云つて、狐を拋り出す。國王は禮を云はれる。その中に太后が還られたので、親子抱き合つて喜ばれて、改めて一行に禮をされた。

太后は今までの非行を知られて、待度樓で懺悔された。半偈は、

「懺悔の必要があれば、それもよろしい。が、佛は即ち心、心は即ち佛です。濟度を待つといふ心の隙間に、野狐が這入つて來たのです。待度樓は自度樓と改むべきでせう。」

と云ふ。太后は感激された。

國王は澤山の金銀類を出して贈られたが、半偈は少しも受け取らない。逗留を願はれるが、前途を急ぐからと云つて斷る。仕方がないので、翌日、國王は太后と一所に、四人を送つて、大道まで出られた。

半偈等はこゝで分れて西へ向つた。

二八

小行者は上善國王のために野狐を殺し、太后を迎へて、半偈の寃罪を雪いだので、半偈は、
「自分は飛んだ目に逢つたが、却つて大きな善行をしたことになつた。これも慶眞の御蔭だ。」
と云つて喜ぶ。
「いや、あれが佛に化けたのを、また此方が佛に化けて破つたのです。儒者の云ふ『爾に出づるものは爾に反る。』此方で云ふ『自作自受』に當ります。」
と云つて笑つた。
行つて居る中に、山が見える。半偈は毎度山でひどい目に逢つて居るので、心配して、
「また山に出逢つたぞ。どんな處だらう。」
「私にも分りませんが……。誰かに聞いて見ませう。」
と云ひつゝ小さな岡を通ると、樵夫が柴を刈つて居る。小行者は聲をかけた。樵夫はふり向いて、小行者の樣子の變つて居るのを見て、
「御前さんは誰だ？　何處に行かうと云ふのだ？」

「西へ行く路の樣子を聞きたいのだ。」
と云ふと、樵夫はすぐ、
「自分らは樂に行けるが、お前さん方にはむづかしいぞ。」
と答へる。
「變だな。どうして？」
「いや、行つて見ればすぐ分る。」
「そんな事位、聞かなくつてもいゝ。」
樵夫は柴を挑いで返事もせず行かうとする。小行者は手で指さすと、柴が俄に重くなる。樵夫は跌いた。起き上つて行かうとするが、どうしても歩かれない。小行者に、
「冗談をせずに、快く行かせろ。」
「何、路の樣子を云へば行かせてやる。」
樵夫は仕方がないので、
「前の山の東は陽山、西は陰山、陽山の山に陽大王が居る。極温やかな人だ。陰山の上に陰大王が居る。これは冷たい人だ。が、二人は一處になつて、何處へでも行く。この邊の者は、二人の性質をよく知つて居て、云ふ通にして居るから、路は樂に歩けるのだ。お前さん方の樣子では、

何か事を起しさうだから、『むづかしい。』と云つたのだ。」
「二人はどんな手並がある？」
「陽大王は『天は一家だ。』と云ふ。陰大王は『地は一族だ。』と云ふ。」
「そんな事はどうでもいゝ。どんな力があるか、どんな武器を使ふかと聞くのだ。」
「力は大變なものだ。天にも上り、地にも入り、大河も大海でも湧き立たせる。日でも進ませるし、月でも缺かせる。陽大王は赤い鎗を使ふ。火が飛ぶ樣だ。陰大王は白い鎗を使ふ。水の光るやうだ。とても敵つたものではない。お前さん方、此處を通るなら、よく〳〵氣をつけて爭をしない樣にしなければいけない。それでなくてはとても通れない。」
小行者は聞いて、
「いや、この邊の人は胆がちひさいから、そんな法螺におびえるのだ。よしもう通つてもいゝ。」
と手で指さすと、樵夫は輕々と柴を挑いで立ち去つた。歸つて來て小行者は、
「大丈夫です。大正が二人居るさうですが、大した事はありません。通りませう。」
と云ふ。半偈はそれで安心して進んで行く。
山は大きい。そこに路が二條通つて居る。半偈は東の方を通る。二三里來ると、妙に暑くなつた。半里ばかり來ると、一層暑くて堪へられなくなつた。半偈は、

「路々黄な花が咲いて、白雲が棚引いて居た。秋も深いと思つたのに、どうしてこの山はこんなに暑いのだらう。眞夏だつてかうはない。」
猪一戒も沙彌も、身體中汗になつて、喘ぎ喘ぎ、
「暑い、暑い。とても駄目だ。死にさうだ。」
と云ふ。
小行者が西の方を見ると、天に暗い雲がある。で、半偈の馬を牽き反して、
「あちらを通りませう。」
と云ふ。沙彌はついて來る。猪一戒は坐つたまゝで動かない。が、西の路はいゝ風が吹く。心も骨もすつかり清まるやうだ。猪一戒に、
「早く來い。早く來い。」
と云ふが、「虚言だ。」と思つて、立ちもしない。沙彌が猶呼ぶと、大儀さうに來たが、涼しいので、俄にいゝ氣持になつた。
が、少し行くと、だん〳〵寒くなつた。著物をしつかり著けて、また行くと、陰氣な風が强くなつて、毛穴がみんな立つやうで、總身が怖へ出した。半偈の顏は血の氣を失つて、人間の色はない。みんな驚いて五六里も走り歸つた。

「どうだ。この山は半分は暑く、半分は寒い。一體どうしたと云ふのだ？」
と、半偈が云ふと、小行者は、
「これは陰陽二氣山で、東は陽、西は陰。だから暑かつたり、寒かつたりするのです。」
と云ふ。
「熱くつても通れない。寒くつても行かれない。となると、どうしたらいゝ？」
「まあ、御心配なさいますな。兩方の氣が一つにならんから、かうなんです。山の横から穴をあけて、兩方の氣を一つにしだら、丁度いゝ事になります。さうすれば樂に通れます。」
「理窟はさうだが、こんな大きな山に穴があけられるか。」
「大丈夫です。私と猪一戒と二人でやれば、きつと旨く行きます。」
猪一戒が驚いた。
「そんな事が出來るものか。」
「出來る。」
「出來るものか。一本の鐵棒と一本の釘鈀では、一生かゝつたつて衝き通せるものか。」
「いや、この山は精明の氣を包んで居るから、中は空虛な譯だ。一個處に穴を明ければ、あとは骨を折らんでも通る。」

と小行者が云ふのを聞いて、半偈は默頭く。
小行者と猪一戒とは空に上つて、山の樣子を見て、
「此の山の兩方は黑白別々だ。空虛は眞中になくつて、東西兩方にあるらしい。」
「さうだ。東が熱くつて西が冷たいのは、兩方の氣が通ぜんからだ。二人で兩方を掘つたらよからう。」
「さうだ。まづ東からやつて見よう。」
東の方へ下りてよく見ると、眞中に土の色の變つて赤い處がある。
「こゝが變だぞ。やつて見よう。」
猪一戒が釘鈀で衝いて四五尺も崩すと、石の穴にぶつつかつた。
「こゝだ、こゝだ。」
と小行者が鐵棒を突つ込んで土を除ける。猪一戒が代つて釘鈀で衝く。で、土がなくなると、中から熱氣が、火の流れるやうに迸しつた。猪一戒は急いで避けて、
「燒け死ぬ處だつた。」
と舌を吐いて云ふ。
「では、今度は西へ行かう。」

と云つて來て見ると、眞中に黑々とした土がある。
「こゝだな。」
と猪一戒が釘鈀で衝く。四五尺崩すと、小行者が棒でやる。石穴にぶつつかる。土を掻き出すと、冷い氣が流れ出す。寒くつて、凄くつて、毛がみんな竪ち上るやうだ。
「どうしたらよからう。兩方別々だ。」
「きつと眞中に隔があるのだ。また空から見よう。」
と飛び上つて、山の頂に下りて見る。と眞中の處に石碑がある。傍まで行くと、四つの句が書いてある。

「左、山、右、澤、　於焉閉塞、
　億萬千年、　陰陽各得。」

と讀める。
「この下だな。これを取つて見よう。」
「こんな大きなのが、どうなるものか。」
「いや、一方の土を緩めれば自然倒れる。」
「では。」と云ふので、猪一戒が釘鈀で碑の下の土を力一杯衝き崩す。小行者が鐵棒で碑の頭を力

一杯推す。忽ちがらつと響いて、碑は地上に仆れた。で、碑の下の土を除けると、大穴があらはれた。そこから一聲大きな音がして熱い氣が吹き出した。それが散らん中にまた音がして、寒い氣が吹き出した。それが忽ち一所になつた。と思ふと、雨が降り初めた。
暫くして雨は止んだ。と、暑からず、寒からず、溫和の氣があたりに滿ち渡つた。
「陰陽の氣が交りあつた。たゞ一つの穴で、かうならうとは思はなかつた。」
と二人は大喜びで立ち歸つて半偈に話す。半偈も大喜び、馬に乘つて山に這入つて來た。
陽大王と陰大王とは、毎日洞の中に居たが、俄に陽大王は寒くなり、陰大王は熱くなつた。
「これは變だ。何かありはしないか。」
と出て見ると、鎭山碑が横になつて居る。
「誰だ。これを仆したのは？」
手下があちこちと探して見る。何とも分らない。が、
「東南の山の根を、和尙が四入通つて居ます。」
と云ふのがある。
「それらのやつた事だらう。」
「その中の口の尖つた腮の縮んだ和尙が鐵棒を持つて通つて居ます。私どもには手にあひさうに

思へません。大王御自分で御出下さらなければ……。」
と云ふのを聞きも了らず、傍の孤陰、獨陽といふのが怒つた。
「そんなものが何だ。私が捕へて參ります。」
と一人は刀、一人は鎗を取つて、急いで出て行つた。
山の前に來ると、丁度一行が來るのが見える。待ち受けて、
「何處から來た坊主だ？　鎭山碑を押し仆して、寒熱を一つにしたのは……。捕へてひどい目に逢はしてやるぞ。」
小行者が出た。
「二人は陰陽山から來たのだらう。何で大きな聲をする。唐僧の御通りだ。御出迎もすべきだ。」
「大王の御云ひつけで來たのだ。大きな事を云ふな。碑を仆したのに間違はあるまい。」
小行者は笑つた。
「天地間には和氣が必要だ。冷熱双方分れて居るのは間違だ。二人の頭が過を改めればよし、今のまゝだと碑を仆すだけではない。山まではね飛ばして住む處もない樣にしてやろぞ。」
二人は怒り立つて、刀と鎗で衝きかゝる。小行者は棒で支へる。打つ、拂ふ。衝く、はねる。走りかゝれば、躍り上り、飛び込めば斬り反す。二人は「和尙位何でもない。」と侮つて來たが、意

外な手並に喫驚して、口から烟の出るほど戰つたが、もう支へきれなくなつた。たうどう、刀を下げ鎗を引いて、一所懸命に逃げ出した。小行者は笑つて、
「早く陰陽の大將を迎に出せ。ぐず〳〵すると山を粉な粉なにするぞ。」
と叫ぶ。
二人は逃げ歸つて、戰の樣子を述べて、小行者に叶はなかつたことを云ふと、陰大王は怒つた。
「二人も行つて、一人に負けるとは何の事だ。斬つてしまへ。」
陽大王は押し留めた。
「碑を仆したのは確に彼奴か。」
「さやうでございます。碑を仆したばかりでなく、大王に『御出迎をしろ。しなければ山も崩す。』と申しました。」
「それは手硬い奴だ。力では敵ふまい。謀で勝たなければ。」
陰大王が云ふ。
「どういふ謀です？」
「外ではありません。陰陽八卦の陣を造らせ、死門の穴に誘ひ込ませたら、捕へられませう。」
「では、さうしませう。」

と云つて、八卦の陣を作らせ、西南の死門に大きな陥穽を掘らせ、上を平らにして、伏兵をぐるりに置いた。で、自分は年老つた弱い士卒を連れて出て來た。

「來たのは誰だ？　名を云へ。」

小行者は、

「師は、大唐國から西天雷音寺に勅令で行く半偈、自分らはその弟子の孫小聖、猪一戒、沙彌の三人だ。御前たちは陰陽山の頭と見える。降參するのか、敵對するのか。どちらなのだ？」

と云ふと、大王は、

「この田舍坊主め、勝手に鎭山碑を押し仆し、大將どもに抵抗した。殺しても足らない奴だが、佛家と云ふから、それに免じて通してやらう。」

と云つて、みんなを連れて山に這入つた。

猪一戒はそれと見て行かうとする。沙彌が止めて、

「妙だな。何か謀がありはしないかな。」

半偈も、

「沙彌の云ふ通だ。どうする？……」

小行者は、

「私もさうは思ひます。が、止まつても居られません。三つに分れて行きませう。猪一戒は前に立て、あなたと沙彌とは眞中、私は後押さへとなりませう。」

と云ふ。で、猪一戒は釘鈀を提げて前に行く。卦の事なぞは構はない。が、いゝ具合に生門に這入つた。それから驚門に出るべきを、その道が狹い、廣いのが西にあるので、その方の死門に來た。みんなその後を逐うて來たのだが、急に大きな音がした。見ると、猪一戒が陥穽に陥入つたのだ。と兩方から、伏勢が出て、率き出してすぐ縛り上げた。

沙彌は驚いて、半偈の馬を率いて後もどりをする處へ、兩方から陰陽の二大王が出で衝きかゝる。沙彌は行李を抛げ出して禪杖で支へる、半偈は見る間に手下に率き仆された。沙彌が助けに行かうとするのを、二大王が防ぎ止める。と、小行者が駈けつけた。

「救けに來たぞ。」

と云つて飛び込む。二大王は分れて兩方で戰ふ。この時、半偈も、行李も、馬も、洞に引き込まれた。小行者と沙彌とは、山の間も狹いし、敵は多し、勝目がないと思つたので、急いで逃げ出した。

陰陽の二大王は、半偈と猪一戒とを縛つて、前に据ゑた。陽大王が、

「御前はたゞ西へ行けばいゝではないか。何だつて鎭山碑を仆して陰陽の氣を一つにしたの

だ？」

と叱る。と半偈は、答へる。

「あなた方の爲にした事だ。陽と陰と相通じないのは大變な災だ。私も進むことが出來ない。それで、徒弟どもが碑を仆して双方を一つにして、陰陽を和合せしめたのだ。これは土地にも大利益で、あなた方にも大手柄となる譯だ。」

陽大王は笑つた。

「陰陽二氣が別々だから、自分たちには用があるのだ。これが一つになると、自分らは無用のものとなるのだ。」

半偈は確かりと云ふ。

「無用なのが大用なのだ。あなた方が、用があるといはれるのは正しい事ではない。」

陰大王が怒つた。

「餘計な事を云ふ。みだりに二氣を一つにして置きながら、つべこべと勝手なことをしやべつて、自分らを非難する。早速殺してしまへ。」

と云ふと、手下どもは手を出さうとした。

二九

陰陽の二大王は、半偈と猪一戒とを殺さうとした。猪一戒は大聲を揚げた。

「無禮をすな。何でおれらを殺す？」

陰大王が、

「殺すのが當然だ。何で喚く。」

と云ふ。

「自分らは何人か、知つて居るか。」

「四人に極つて居る。」

「捕つたのは？」

「二人だ。」

「何で、あとの二人を捕へない。」

「うまく逃げたからだ。」

猪一戒は云ふ。

「と云ふと、お前たちの運の盡きだぞ。」
「何が運の盡きだ？　彼奴らは武藝がすこし出來るだけではないか。」
「あの一人は、昔、天宮を騒がし、後に經を取つたので、鬪戰功佛となつた孫大聖の後の孫小聖だぞ。あれは傳を承けて、金箍棒を使ひ、七十二の變化を知つて居る。天宮に這入つて王母の殿上で飲食したので、玉帝が神たちに捕へさせられたが、みんなあれに打ち立てられて散り〳〵になつた。で、玉帝は仕方がなく孫大聖を賴まれたので、佛門に這入つて、今西方に行くのだ。道々數も知れぬほど妖怪を打ち殺して居る。この者が居る以上、お前たち安心は出來ないぞ。早く師匠に詫をすればよし、ぐず〳〵すると、生命が危いぞ。」
二人は思はず顏を見合せて、何とも云はない。猪一戒はそれと見て、
「兄貴の孫小聖ばかりではない。弟の沙彌だつて普通ではない。彼は金身羅漢の侍者だ。禪杖を振り廻はすと、鬼も神も負かしてしまふ。さう云ふおれも名のないものではないぞ。父は天蓬大元帥、以前は天河十萬の兵を支配したのだ。それが經を取る手助をしたので、淨壇使者となつて、おれに九つの齒の釘鈀を讓つた。これで一度突くと、九つ孔があき、二度突けば十八穴があく。誰が敵ふものか。今御前の謀にかゝつて捕つて居るが、師匠の手前じつとして居るばかりだ。こんな繩なんか、すぐ草の樣に千切つてしまふ。今に兄貴と御前の首を取るぞ。」

陰大王が云ふ。
「法螺を吹くな。手下は大勢だ。すつかり守つて居るのだ。どんな手並があつたつて、寄りつかれるものではないぞ。」
「そんなものは何だ？　兄貴は蛔にも化ける。蝶にもなる。飛ばうと思へば、何處でも飛べる。」
陽大王が、
「馬鹿も大概にしろ。そんな事が出來るものか。」
「出來ない事があるものか。何でも出來る。現に碑まで仆したではないか。」
陰大王が、
「虛言ばかり云ふ。殺してしまひませう。」
と云ふが、陽大王は、
「まあ、今でなくていゝでせう。みんな捕へて一度に殺しませう。」
「では、逃げるといけませんから、造化山に送りませう。」
「それがよろしからう。」
手下に命じて、二人と、行李と、白馬と、造化山へ運ばせた。
小行者と沙彌とは、一時山の外に逃げ出したが、小行者は、

「あれらと戰ふよりも、まづ樣子を探つて來よう。」
と、黄の蝶に化けて、山へ飛んで行つた。
山は陰陽二つに分れて、大王は二ヶ處に住むが、眞中に役所があつて、こゝで二王は逢つて居る。今日は二人を捕へたので、喜んで酒宴をして居る。小行者はそれと知つて、その上をあちこち飛び廻る。
陰大王が、ふと頭を上げて見ると、蝶が飛んで居る。
「變ですな。この邊に花もないのに蝶が來るとは。
陽大王も不思議がつた。
「この蝶は變だ。早く捕へろ。」
手下どもは逐ひかける。と、蝶が東へ行くかと覘へば、西へ行く。南かと思ふと北へ飛ぶ。それを、無闇に打つが一つも當らない。しかし、あまり打たれると危ないので、小行者は、今度は蠅となつて飛ぶ。手下どもは、
「蝶はこゝに居たのに、どうしたのだらう。」
と見廻すと、蠅が飛んで居る。
「今度はあれだ。」

と云ふ中、蠅は陰大王の顏にぶつかつた。鐵の彈が中つた樣に痛いので、思はず盃を下に置いて顏を押さへて、
「孫小行者が首を取りに來たのだ。」
と、立ち上つて、
「御別れしませう。歸りませう。」
と云ふ。陽大王は笑つて、
「臆病らしい事を云はれる。こんなものは何でもない。蜈蚣か、蠍子かの毒虫なら知らん事、あんなものが何ですか。まあ、飲みませうよ。」
と云ふので、陰大王はまた座つた。
小行者はそれと聞いて、今度は七寸ばかりの羽根のある蜈蚣に化けて、二人を目がけて飛んで行つた。
「これは小行者だ。早く捕へろ。」
手下どもは、棒や、鞭を振り廻して騒ぎ立てるが、一つも當らない。陰大王は堪らず立ち上つて劍を拔いて無闇に斬る。小行者は隙を窺つてもとの蠅となつて、梁に止まつて動かうとしない。
「今まで居たのに何處へ行つたか。」

と、手下どもは騒ぐが、兩大王は默つて何とも云はない。その中、陰大王は怪へながら、
「どうも、私どもの首が取られさうですぞ。」
「そんな事はありません。勇氣を御出しなさい、勇氣を。」
「怖がる譯ではありません。人間ならどんな奴でも、二人で斬り殺せますが、こんな妖物は仕方がありません。晝間はいゝにしても、夜來て寢首を搔いたらどうでせう。」
「さう云へば心配ですが、用心すれば、何でもありますまい。まあ、今日はこれだけにして、明日また御目にかゝりませう。」
と云つて、兩大王は別れて、自分自分の宮殿に歸つた。小行者は陰大王の疑の深いのを知つたので、それについて飛んで宮殿に行つた。
陰大王は山中の手下を集めて、その中から、五十名を選んで山前を守らせ、事があれば直ぐ通知せしめる。また門毎に人數を多くして、鈴を振つて夜通し隙間もなく番をさせて、やつと床に就いた。
小行者は飛び出して、沙彌に委細を話した。
「さうか。さう疑念を挿み出したら、二人の生命は大丈夫だ。が、どうかして早く救け出したいものだ。」

「さうだ。大王どもはびく〳〵して居る。これを一つ嚇かしてやつたら、恐れ入つて二人を還すだらう。では行つて來るぞ。」
と云つて、小行者は蠅になつて、陰大王の處に近づく。が、門がしつかり締つて居る。隙間は何處にも少しもない。仕方がないので、軒の瓦の下の土を些か除けて、その穴から這入り込むと、陰大王は手下に大きな石の箱を入れさせて、その中に這入つて寢て居る。それを見置いて、今度は陽大王の處に來る。
陽大王は何の用心もなく、帳を下して、その中でよく寢入つて居る。小行者は二本の毛を拔いて、一つは劍、一つは繩として、床の前に懸けて置いて、山の前に來る。そこでは、五十名の手下が拍子木を叩いたり、鈴を振つたりして、巡回して居る。小行者はその頭の一人に化けて、「令」の字の旗を振りつゝ飛び込んだ。
「大王の御命令だ。よく氣を著けろ。よくやつたら、御褒美が出るぞ。」
みんな駈け寄つた。
「誰もなまけては居ません。」
「それならよし。頭は誰だ？」
「私が此處の頭で、寒透骨です。」

「さうか、それでよし。申し上げる。」
と云つて、飛び歸つた。
小行者は少し行くと、寒透骨そつくりに化けた。陰大王の宮殿に來て、
「頭の寒透骨です。大王に申し上げたい事がございます。」
と云ふ。すぐ取次ぐ。陰大王は起きて、寒透骨に「此方に來い。」と云はせる。行くと戸は開けないで中から、
「何の用だ?」
「申し上げます。私が巡回して居りますと、東の山で、火の眼で、雷の顏をした和尙が、一人の色の黑い和尙と相談して居りました。それを聞きますと、一人が、大王が師匠と弟子とを御殺しにならうとするから、仇討をしたいが、佛弟子だから戒行を破るのはよくない。で、陽大王の枕下に劍を懸けて置いた。それで後悔して二人を送り出せばよし。さうしなければ殺すのは樂な事だ、と申して居ました。」
陰大王は驚いた。
「さうか。しかし、おれの事は云はなんだか。」
「ところが大變です。『陰大王は陽大王よりもひどい奴だ。これは許されない。首を取らうと思

つたが、石箱の中に隱れて居るから、劍では駄目だ。金箍棒を持つて行つて、石箱と一度に打ち碎いてやらう。』と申しました。」
と云ふので、陰大王は身體中が悸へ出した。どうして石箱の事まで知つて居るのだらう。
「早く行つて、また聞いて來い。」
「よろしうございます。」
と云つて、一旦出て、また蠅となつて、陰大王の傍に行つた。陰大王は狼狽て居た。手下を陽大王の處へ遣つて、「床に劍が懸つて居るか。」と問ひ合はせた。
暫くして手下が歸つて來た。
「陽大王樣は御目醒になると、鋭い刄の劍が床の前に懸つて居ました。で、びつくりしておしさひなさいました、と云ふ事でございます。」
と云ふ。「それでは。」と云ふので、急いで、燈火を灯させて、陽大王を招いて相談しようとした。陽大王も心配なので、丁度こゝへやつて來て、二人一處になつた。
陽大王から先づ問うた。
「私の床の前に劍のあつたのを、あなたはどうして御存じです?。」
「手下の寒透骨から聞きました」

と云つて、その話を詳しくする。
「不思議な事があるものです。」
「どうしませう。」
「どうもしやうがない。夜が明けると、彼奴らと一合戰しませう。勝てばよし、負ければ造化山に行つて、どうかして貰ひませう。」
「さうです。さうしませう。別にいゝ考もありませんから。」
と相談一決して、二人は酒を飲んで食事をした。
小行者の蠅はすつかりそれを聞いた。飛び歸つて沙彌に話した。
夜が明けて、日が昇りかける。金鼓の音が響いて、陰、陽の二大王が、山中の手下を殘らず連れて打つて出た。
「東から來た坊主ども、光る頭を硬くして、二人の鎗を受けて見よ。」
「泥棒ども、おれの師匠や弟を謀で捕へた。ひどい奴だ。」
叫び合ふ。兩大王は、
「この一鎗を食へ。」
と二本の鎗を出す。小行者は鐵棒を振つて打つて出る。熱い鎗、冷たい鎗が、一本の鐵棒と打ち

合ひ、からみ合ふ。火が飛ぶ樣、氷が散る樣。風が吹き、雨が飛ぶ樣、目にも止まらない有樣だが、勝負はつかない。沙彌はそれと見て禪杖を振つて、
「この妖怪奴、くたばつてしまへ。」
と、いきなり打ち込む。兩大王は一人でも持て餘したところへ、また一人來たので、支へ切れなくなつた。吹き出した風に乘つて、西南の方へ逃げて行く。二人は追つかけて、二氣府に行くと、手下はもう大抵逃げ散つた。たゞ年老つた病人が、何人か殘つて居る。その一人を捕へて、
「師匠や弟を何處に藏した？　白狀しろ。」
と聞くと、
「恐れ入りました。申し上げます。二大王、盜まれるかと心配して、造化山へ送られましたのです。」
「何だ、造化山山とは？　どんな妖怪の處だ？」
「妖怪の處ではありません。」
「ぢや、どんな處だ？　そこに居るのは人か。」
「『造化山』です。主は人です。十三四位の小兒です。『造化小兒』と申すのです。陰陽の二大王がその方の技量を取り出して、いろ〳〵の事をされるので、その方を敬つて『小天公』と申

されます。」
「それにはどんな技量がある？」
「御話すれば大變です。玉帝と同樣の力があります。天下の人は、玉帝よりも却つてその方を恐れて居ます。陰陽の二大王はその門下になつて、熱くしたり、寒くしたり、勝手な事をされます。あなた方の仲間を捕へたのも、この妨をされたからです。」
「その人はどんな武器を使ふ？」
「戰はない方ですから、武器はありません。」
「戰はないでどうして人が隨ふ？」
「いや、澤山の圈を持つて居られます。それにかゝると、誰れでも脫ける事が出來ませんから、人が降參するのです。」
「その山はどつちにある？　どの位間がある？」
「西南で、十里ばかりあります。」
「よろしい。許して遣る。」
と云ふと、手下は逃げた。
小行者は沙彌と、

「その造化山に行かう。二人も西南に逃げた。そこに隱れたに違ひない。」
「すぐ行かう。後れるとよくあるまい。」
と二人は空に跳び上つて急ぐと、すぐ山が見える。峯は大海の波と同じで、綠は天と續き、形は地から湧き出た有樣、霞が明らかにかゝつて居り、瀑は天の河から落ちて來、通り雨は雫を降らすやうだ。小行者は見て、立派さに感心したが、
「こゝが造化山らしいが、造化小兒と云ふ奴の住家は何處だらう？」
と探すが分らない。で呪を唱へて、
「山の神は居ないか。」
と云ふと、狼狽てゝ出て來た。
「御出迎すべきを後れまして……。」
「ひどい奴だ。呼ばなければ出ない。二十棒なぐるぞ。」
「いや、御待ち下さい。早く出るのは承知して居ますが、事情があつて後れましたので……。」
「何の事情だ？　早く云へ。」
山の神は云ふ。
「此の山の名は御存じですか。」

「『造化山』だらう。」
「主を御存じで？」
「『造化小兒』と云ふのだらう。」
「『小天公』とも申すのです。私もそれに參りますので、それで後れましたので……御許しを願ひます。」
「許しても遣らうが、しかし、あれにどんな技能がある？」
「何といふ事もありません。たゞ思つただけで、何でも生かしも殺しも出來ます。人を富ましうと思へば富み、窮らせようとすれば窮ります。どんな英雄でも、豪傑でも、それに背く事は出來ません。」
「そんな事があるものか。死ぬも、生きるも、富むも、窮るも極まつたものだ。どうして自由になるものか。しかし、門は何處にある？」
「門はありません。」
「なくてどうして出入が出來る？」
「小天公は禍と福とを掌つて居られます。『禍福は門なしだ。作れば私事だ。』と申されます。」

小行者は笑つた。
「禍と福とは心にある。門に關係があるものか。そんな事は小兒の談だ。もうよろしい。分つた。」
と云ふと、山の神は行つてしまつた。

三〇

小行者は山の神の話を聞いて、「『禍福に門がない』といふが、師匠と弟とを藏して置くのは、禍の門を開くものだ。」と思ひつゝ門を探すが尋ねあてない。たゞ大石が澤山重なつて、路の邪魔をして居るばかりだ。

小行者は怒つて、鐵棒でさん〳〵石を叩くと、火花が散つて、石は星のやうに飛ぶ。音は雷の如くに響く。驚いて四方を守る土地の神たちが、造化小兒に報知する。

造化小兒は、陰陽の二大王が、牛偈と猪一戒とを送つて來たのを受取つたが、四人とも佛門に這入つた正しい人物だ、と知つて居るので、怒に待遇した。その中に、二大王が負けて逃げて來た。

二大王は造化小兒に援を求めた。

「私どもは、不才でありますが、あなたの御蔭で、寒と熱とを人に加へて居ます。これは當然で、間違つた事ではありません。それだのに、孫小行者は鎭山碑を推し仆して、二氣を一つにしました。それのみか、私等に抵抗して、たうとう打ち負かしてしまひました。どうぞ圏で小行者

を御住めになつて、この恨を晴して戴きたいのでございます。」

と云ふと、造化小兒は、

「事情はもう前から知つて居る。牛偈は一心清淨で、佛教の眞諦を得て居るから、どうとも出來ない。孫小行者も佛法の精神を傳へて、少しも不正をしないから、これもどうとも出來ない。御前たち二人は、極まり通りを行つて、四時を作るばかりだから、あれに敵ふ事は出來ない。從つて、自分も圏にかける譯には行かない。」

と答へると、二人は、

「さう仰せられると、天地間に和尚ばかりが尊くつて、造化も、陰陽も、無用になるではありませんか。」

「さうは行かない。有用ではあるが、不當の處では無用となる、と云ふのだ。」

「さう仰しやいますが、面子と云ふものがございます。どうか、あれを何とかして戴きたいもので……。」

「まあ、やつて來れば圏をかけて見よう。それで困らして、此方を輕く見ないだけにして許してやらう。さうすれば、君たちの面子も立つと云ふものだ。」

と云ふ處へ、土地の神たちが、孫小行者が鐵棒で石を碎いて居ると告げに來る。二大王は、

「ひどい奴だ。此處でもまた亂暴をする。どうかしなくつては……。」
と云ふと、造化小兒は、
「さう急くな。出て御前らのために困らしてやらう。」
と云つて、山の絶頂の石の上に座つた。
「猴、早く來い。」
小行者は猴と呼ばれたので怒つた。
「誰だ？　猴と呼ぶのは？」
と見廻すが人が見えない。と又、
「猴、早く來い。」
と云ふのが聞こえる。頭を上げて見ると、萬丈もある高い峯で呼ぶ人がある。「はゝあ、あれが造化小兒だな。」と思つて、空中に飛び上つた。が、雲の上に居るのみでは面白くない。「あちらと同じ高さにならう。」と山の上に鐵棒を立てゝ、その上に飛び上ると、丁度向ひ合はせだ。見ると、十四五歳の小兒だ。
「御前が造化小兒か。先生に賴んで敎場で本を讀んで居ればいゝものを、陰陽の二人に加擔して、師匠と弟とを匿して居るばかりでなく、出迎もせず、詫もせず。山の上からおれを『猴』と呼

ぶとはどうした事だ。早くその譯を云つて、謝罪つて師匠等を送り出せ。」
小兒はにこ〳〵笑つた。
「こりや『猴』。貴樣の口許には、まだ土の匂が殘つて居る。おれの孫の孫位な奴のくせにぐずぐず云ふな。」
小行者は笑つた。
「法螺も大抵にしろ。一體御前はいつ生れたのだ？」
「おれの年は天と同じく、地と等しいのだ。分るやうに云つて見れば、周の文王の時、孔子に逢つて議論もした。それが二三千年前だ。この位なものだ。」
「出たらめを云ふな。そんな事よりも師匠たちを送り出せ。出さんとひどいぞ。」
「禮儀を盡せば出してもやる。が、人間君臣の禮儀を猴は知るまい。山の前で跪いて、『どうか御出し下さい。』と願へば、それでまあよろしい。もし蠻力を奮ふと云ふならば、こゝに小さな圈がある。それで締めて、街へ牽いて行つて跳らせるぞ。」
「どんな圈か。圓いのか、長いのか。」
「圈といへば圓いに極つて居る。角なのや、長いのがあるものか。」
「何と云ふのだ？」

「圈には、名圈、利圈、富圈、貴圈、酒圈、色圈等、さま〳〵の類がある。一口では云へない。」
「そんなものが何だ？」
「何だではない。おれの圈に一度這入つたら、出られはしないぞ。」
「おれのやうな、天地間に獨立した男兒に出られんことがあるものか。」
「威張るな。賭をしよう。御前が出られたら友達になつて、和尙を還して、西へ行かして遣る。どうだ。遣るか。」
「よし遣る。」
と云ふと、小兒は、名圈と云ふのを空へ投げかける。五六すのものだが、空に上ると大きな鷄籠のやうになつて頭の上からかぶさつて來る。小行者は空中に上つて立つと、圈は上からかゝつて來たが、體には觸らない。跳ね上ると、圈は下に落ちてしまつた。
この時、造化小兒はもはや絕頂に居らず、山の前の大石の上に座つて居た。
小行者は前に立つて笑つた。
「あんな者、何でもないではないか。」
「まだまだある。やつて見ようか。今度のは利圈だ。」
「いくらでもいゝ。」

造化小兒はまた一つ投げる。小行者は平氣で跳び出した。
小兒は續いて酒、色、財、氣の四氣を投げ出す。小行者は慌てず、騷がず、一つ跳び、二つ跳び、三つ跳び、四つ跳び、殘らず跳び出した。
「どうだ。御前の手並もこんなものか。」
造化小兒は返答せず、貪、嗔、痴、愛の四氣を續けて投げ出す。小行者は、
「よし來た。よし來た。」
と一々跳び出す。造化小兒は、
「えらい奴だ。どんなのでも跳び出す。が、これはどうだ。」
と考へつゝ好勝圈と云ふのを取り出して、
「どうだ。これは。」
「構はない。投げて見ろ。」
と云ひも了らないのに、一つ飛んで來た。小行者は今度も平氣で受けたのだが、どうした事か、心持が急に落ちつかなくなつて、前のやうに平氣では居られない。脫けようと上に飛ぶと、圈はそれについて上にあがる。下にかゞむと、下にさがる。身體を大きくすれば、大きくなる。小さくすれば、小さくなる。周圍に隙はあるが、圈には縫目がない。金箍棒で拂はうとするが、使ふ

餘地がない。拳で破らうとするが、軟らかで打たれない。籠に入れられた鳥と同様、中できり〳〵廻はるばかりで出る事が出來ない。」

造化小兒は聲を立て〻笑つて、

「どうだ猴。出られないか。まだ威張れるか。」

小行者は雷の樣な聲を出して、天まで衝き透す勢で、力一ぱい飛び上つた。圈はそれについて上つて行く。丁度放つた箭のやうである。處へ李老君が、二人の童兒を連れてそこを通つて居た。それにばつたりぶつかつた。

李老君は不意の事なので「あつ。」と聲を揚げて空中から落ちか〻つた。童兒が狼狽て兩方から扶け上げて、「まあよかつた。」と云ふ。老君は起き上つて、

「誰だ？　おれにぶつかつて……。」

と云つて見ると、小行者が跳んで居る。

「猴、何をして居る。聲も懸けずにぶつつかるとは何だ。生命に拘るぞ。」

小行者は老君なので、驚いて、

「どうも濟みません。人に圈をかけられて……。」

と詫びる。

「一體どうしたのだ？」

と聞く。小行者は今までの經過を詳しく述べる。

老君は笑つた。

「貴樣は今まで、天も怕れず地も怕れず、威張つてばかり居たのだが、造化小兒にはすつかり參つたな。あんな、天地の間に一番優れた力のある人に手むかふから、そんな目に逢ふのは當然だ。」

「師匠を藏すから、しかたなくさうしたので……。どうか、この圈を外して下さい。御願ひです。」

老君は答へて、

「別な事なら何でもするが、そりやあ、おれには出來ない。」

小行者はびつくりした。

「どうしても駄目ですか。」

「さうだよ。貴樣自分が懸けたのだからな。」

「それは、どうして？」

「貴樣は鐵棒を取つて、『人に負けない人物だ。』と威張つて居る。だから、この圈は貴樣にくつついて、膠の如く、漆の如く、どうしたつて離れないのだ。いくら飛んだつて、はねたつて、

脫け出す事が出來るものか。」
小行者は呆れて言ふ語もない。
「びつくりすな。好勝の念を捨てろ。」
と云はれて、小行者は大いに悟つた。で、老君に別れて下らうとすると老君は、
「何處に行くのだ？」
「下るのです。下つて造化小兒に詫を云つて、圈を外して貰ふのです。」
「いや、それには及ばん。圈はもう取れて居るぞ。跳んで見ろ。」
小行者は跳び上つて見ると、ちやんと身體は圈の外に出て居る。大喜びに喜んで、
「たゞ一念でしたな。些かの氣力、勇力などの、何でもない事が今よく分りました。」
と云ふと、老君は別れて兩童兒を連れて行つてしまつた。
小行者は雲から下りて山の前に來ると、造化小兒はもう樣子をすつかり知つて居た。
「老聃の奴、御しやべりだから、すつかり譯を話してしまつたな。しかし、御前は十分後悔したのだから、もうよろしい。師匠を出して遣らう。」
「では、圈は御還しします。」
と投げると、造化小兒は片手で受取つて、片手で山を指すと、山の前に碧い瓦、黃な墻、朱い門

の天宮が現れた。小行者は、
「こんな立派なところがあるのに、どうして門外に立たされたのです。あなたを小天公と云ふが、公平ではありませんな。」
と云ふと、造化小兒は、
「そんな事はない。もとからちやんとあるのだ。御前の心の眼が開かんから、見えなかつたのだ。みんな心にあることだ。」
と云つて、小行者と沙彌とを連れてそれへ這入ると、大勢の役人が出て迎へる。陰、陽二大王も出た。造化小兒は寶座に上つて二大王に、
「こりや二大王。この小行者等が碑を仆して、二氣を一つにしたのは、早く西へ行かうと思つたからだ。亂暴は亂暴だが、今は後悔して居る。もう何も云ふな。二人は山に歸つて、本の通りの務をせよ。」
と云ふと、二大王は、
「承りました。さやう致します。」
と云つて、挨拶をして歸つて行つた。
造化小兒は、半偈と、猪一戒と、行李と、馬とみんな取り出させた。

「御前たち、佛によく仕へろ。元來こゝへ留めておく積りはなかつだのだが、道心を堅くするためにした事だ。惡く思ふな。」

牛傷は再三禮拜をした。造化小兒は齋を出させて、十分に食べさせ、四人を送つて西へ行かせた。

三一

牛傷等一行は、造化小兒から解放されて西へ向つたが、小行者が、道々圈を飛び出したことを詳しく述べるので、みんな感心したり、喜んだりした。その中、數千里も進むと、氣候が寒く、日も短くなつた。で、大きな村里に達しない野の中で夕方になつた。

野の中には家が少い。小行者は仕方がないので、一軒の門を敲かうとすると、內で悲しさうな泣聲がする。敲きかねて居たが、外に宿もないので、輕く二遍敲いた。が、誰も出て來ない。又敲くと、年老つた男が現はれた。

「誰です。敲いたのは？」

「私ども通りがかりの和尙が、御泊め戴きたいのです。」

男は出て、小行者の樣子を見て怖がつた。と、また猪一戒、沙彌の普通でないのを見て驚いた。

「また惡者が來た。」

と云つて走り込むのを、小行者は引留めた。

「何です？　私どもは惡者ではありません。大唐國から西へ行つて、佛を拜むものです。一晩御

泊め下さい。明日は早く立ちますから。」
と賴む。
「惡者でなくつて、どうしてそんな顏付で……。」
「面は惡くつても、心は善いのです。惡者ではありません。」
と小行者が云ふと、男は、
「では、御泊めはしたいのだ……が、內に取込みがあるから、外へ行つて下さい。」
「どんな御取込みですか。御話しになればどうにかします。」
「駄目、駄目、とても駄目だ。」
「駄目ではありません。死んだ人なら生き歸らせます。」
「出たらめを云ふな。」
「出たらめではありません。きつとよくします。」
「では、ちよつと待つて下さい。奧樣に申し上げる。」
男はこゝの家來である。內へ駈け込んで、女主人に話す。女主人は泣き沈んで居たが、それと聞いて、
「そんな事を云つて、虛言だらう。」

受けつけない。
「さうでもありますまい。泊めてやつたつて、齋を一度損をするだけです。」
「それはさうだね。泊めてやらうか。」
遂に泊める事にする。半偈は部屋に這入つて見ると、女主人は白髮のすこし交つた中年の美人だ。一行を見て、涙を含みながら迎へる。半偈は、
「私は大唐國から西方へ行くものですが、無理を御願ひして相濟みません。」
と詫びる。女主人は、
「遠方から御出になつて大變でしたでせう。まあ、御休み下さい。私方にはとんだ事がありまして、今困つて居る處です。」
と云つて泣き出す。
小行者は不審顏で、
「それはどう云ふ事なのです？　御話し下されば何とかならぬ事もありますまい。」
女主人は泣きながら云ふ。
「私は『趙』と申しますが、夫の『劉種德』と申しましたのが早く亡くなりました。遺つた子は『劉仁』と申しますが、私が苦勞して育て上げまして、今年十八になります。この一人子が飛

んだ目に逢ひました。」
「と云ふのはどう云ふ事で？　俄に亡くなられでもされましたか。」
「さうではありません。」
と云ふがあとが云へない。家來が代つた。
「いや、泥棒に捕へられなすつたのです。こゝから五里ばかりに皮囊山と云ふのがあります。その山に三人の頭、一人は行屍、一人は立屍、一人は眠屍と云ふのが居て人の肉を喫ふのです。その邊を通る者は、誰れでも彼れでもみんな喫はれてしまひます。その手下が六人ありますが、山の周二三百里内を探し廻つて、旨さうな少年があれば、際を窺つては、盜んで頭の馳走にするのです。こゝでも昨夜知らぬ間に這入り込んで、若旦那を捕へて行きました。それも分らなかつたのですが、あちこちで探しますと、今日の午間、五十里ばかりのところから、『二三十人の少年を繩で縛つて、六人が引つ張つて行くのを見た。』と云ふ報知があつたので知つたのです。みんな頭にさし出して食はせるのでせうと思ひますと、悲しくて堪りません。」
「追つかけさせないのですか。」
「追つかけたつて、敵ひませんから……。」
「午間五十里のところなら、まだ百里は行つて居ますまい。山まで五百里と云へば、まだ〳〵途

中です。追ひついて、取り戻して來ます。」
女主人は喜んで、床に座つて禮をする。
「では、乘物はどうしませう。此方の驢馬は遲いのですから、前の村から馬を借りて來ませう。」
と家來が云ふ。
「そんな事をしたら遲くなる。入らない、入らない。自分で走ります。」
「では齋を召し上つて……」
「いや、歸つてから戴く。」
と云つて、小行者は飛び上ると、はや行方が分らなくなつた。女主人と家來とはびつくりして、
「空を飛ぶ活佛様だ。」
と云つてまた喜んだ。
小行者は一跳して百里あまり行つて、空から眼を光らして探し廻つたが、何も見えない。では、途中であらうと引き還した。元來六人の泥棒は大勢を連れて居るから、道は中々捗らない。やつと八十里ばかり來たが、みんな疲れて動かれないから、古い廟の中に入れて休ませることにした。それらを中に藏して、自分らは門に座つて番をして居た。
小行者は引き還して見ると、六人廟の門前にちやんと居る。「これだな」と思つて耳から金箍

棒を取り出して、
「六人の奴等。人の子どもを盗むとはひどい奴だ。この棒を食へ。」
と云つて打ちかゝる。六人はどの村でも對手になるものがないので、すつかり安心して、武器を一つも持つて居ない。大狼狽にあわてた。散り散りばら〳〵に逃げ出して、忽ち影も形もなくなつた。
小行者は「足の早い奴等だな。」と門を推し開けると縛りつけられた二三十人の少年が、みんな泣いて居る。
「劉仁さんは居ないか。」
と云ふと、
「私です。」
と答へるものがある。
「救けに來たのだ。泥棒はみんな逃げた。早く一所に御歸りなさい。」
「縄がきつくて動けません。」
「よし。」と云つて指をさすと、縄はばら〳〵に切れた。外の少年が一齊に聲を揚げた。
「私も御救け下さい。」

「私も御救け……。」
「よし」と云つて指をさすと、縄が切れて殘らず自由になつた。群がつて來て禮をする。
「早く歸れ。」
と門前に連れ出して、眼を閉ぢさせ、呼吸を吹くと、強い風が俄に起つた。それに乘つて、忽ちの間に劉家の庭に來た。
劉家では、二三十人の少年が一度に庭に下りたので喫驚した。女主人は急いで劉仁を抱えて泣き出す。劉仁も泣く。小行者に向つて改めて禮をする。少年たちも頭をしきりに下げる。
「家へ歸れるか。路が分れば早く歸れ。」
と云ふと、また頭を下げて方々へ分れて行つた。
丁度齋が出來て居たので、一行は喫べた。女主人は、
「『一二百里もすぐ行つて歸る。』と仰つしやつたのを冗談かと思ひましたら、本當でございましたね。活佛樣とはあなたの事です。」
猪一戒が云ふ。
「一二百里どころか、一二萬里でも行けるのです。」
「馬鹿を云ふな。はやく喫べてしまへ。」

と小行者は叱る。みんな喫べ了つて、床に就いた。

六人の泥棒どもは、小行者が歸つたと見て、隱れた處から出て集まつた。

「ひどい奴だ。骨折をすつかり無駄にしてしまつた。が、どんな奴だらう。あの村に引き還して

様子を窺つたら分るだらう。」

と後戻りして、暗い處をそつと劉家まで來て聞いて見ると、小行者らの話ですつかり分つた。急いで、皮囊山に歸つて、大王どもの前に出た。大王どもは、

「何を持つて來た?」

と聞く。六人は「少年を二三十人縛つて來たが、道で取り還された。」と云ふ。三人は怒つた。

「とんだ奴だ。名は分つたか。」

「話によりますと、昔、三藏法師について行つた孫行者の孫で、孫小行者と云ふ奴です。劉家に泊つて居ります。その劉家の子も盜んで來たのを、取り還されたのです。」

「では、すぐ捕へて來て、仇を討たう。」

その中の眠屍大王が云ふ。

「それには旨い事がある。」

「どんな事がある。」

「おれは昔から聞いて居る。三藏法師は高僧だから、その肉の一切を食つても一紀の生命を延べるとの事だ。孫小行者の附いて居る唐僧でも高德だらうから、食つたら生命が長くなるだらう。捕へてみんな一所に喫つたら、外のものよりもいゝではないか。」

行屍も、立屍も喜んだ。

「さうだ。さうだ。さうしよう。劉へ行かう。」

六人は止めた。

「大王に申し上げます。その外に、猪一戒と、沙彌と云ふ奴が附いて居ます。それらも强さうですから、たやすくは捕りますまい。それよりも、山の前を通つて西へ行く處を謀で捕へられたら、どんなものでせう。」

「さうだ。三人居れば各々一人づゝ戰はう。貴樣たちはその隙に唐僧を捕へろ。」

と手分を決めた。

牛偽等は一夜泊つて西へ向はうとすると、劉家では留めるし、扶けられた少年たちの家から禮に來て招待するして、三日は過ぎた。やつと起つて皮囊山の前まで來た。小行者は、

「こゝの泥棒ども、きつと仇討に出るだらう。用心しよう。」

と云ひつゝ山に這入つた。

大王どもは一行の來るのをちやんと待つて居た。行屍大王が眞先に跳り出して、
「糞坊主ども、よくもおれたちの邪魔をしたな。」
と切りかゝる。小行者は鐵棒を提げて出た。
「貴樣は三屍の一人か。」
「おれたちの名を知つて居る位なら、何で早く降參しない？」
「外の奴なら許しもしようが、三屍は生かして置けない。」
と打ちつける。と、立屍大王が斧を振つて跳んで出る。猪一戒は釘鈀を取つて迎へ戰ふ。ところへ眠屍大王が、鎗をしごいて衝つかゝる。沙彌が見て禪杖を出して拒ぎ止める。
沙彌は牛偈を守護する事となつて居るので、眠屍大王が誘をかけて、離さう、離さうとするにも構はず、牛偈から遠さからず居た處が、忽ち後に人の氣はひがする。ふりかへると、六人が牛偈を捕へようとして寄つて來るのであつた。驚いて眠屍大王を捨てゝふりかへつて、
「無禮をするな。」
と云ふと、六人は聲を揚げて逃げ出した。
眠屍大王は沙彌の戻るのを「道がすまい。」と追つかけた。猪一戒は沙彌の聲を聞いて、「牛偈の身の上に事がある。」と思つて立屍大王を捨てゝ救けに來た。が、眠屍の追つかけるのを見て後

に廻つた。沙彌はそれと見て、にこ〳〵して、
「人を追ふと追はれるぞ。追はれると殺されるぞ。」
「何だつて？　誰が殺すものか。」
「おれが殺すぞ。」
と猪一戒は後から衝く。衝かれると、眠屍大王はすぐ地上に仆れて、血を流して死んでしまつた。
立屍大王は猪一戒が走せ戻るので、後から追つ駈ける。と、目の前で眠屍大王が仆されたので、驚いて逃げ歸る。
小行者は後に聲がするので、牛偈を案じて行屍大王を捨てゝ駈け戻ると、立屍大王にぶつつかつた。「いゝ具合だ。」と一棒で叩くと、受けそこねて、これも仆れた。行屍大王は小行者を追つ駈けたが、この樣子を見て、「とても敵はん。」と雲に乘つて東へ逃げた。
猪一戒は、
「三人の中二人を打ち取つた。六人も逃げた。さあ行かう。」
と云ふと、小行者は、
「まあ待て。殘りの妖怪は默つては居まい。劉家に行つて仇打をするだらう。」
牛偈も氣が著いた。

「さうだ、さうだ。人を救けて、人を害はせては済まぬ。どうしようか。」
小行者は云ふ。
「大丈夫です。『草を斬れば根を除く。』です。三人殺してしまはなければいけません。」
「一人は何處へ行つたらう？」
「東へ行きましたから劉家でせう。」
「では、三人一所に行かう。」
「三人には及ばない。御師匠様が一人で入らつしやると、どうなるか分らん。二人は御傍に藏れて居ろ。來たら殺せ。」
半偈は馬から下りて、石の上に座る。猪一戒と沙彌とは兩方へ藏れて居る。
小行者は雲に乘つて劉家に來て見ると、ちやんと行屍大王が六人を連れて、女主人も、劉仁も、家來も、その外の小者らも殘らず縛り上げて、
「和尚に賴んで、おれの仲間を殺した。そのかはりに塵にして遣る。」
と云ふので、一家中泣き喚いて居る處であつた。
小行者は雲から下りて大喝して、
「逃げるな。この棒を食へ。」

と叫ぶと、行屍大王は手向ひもせず、風に乘つて逃げ出した。六人は走りも出來ず、床に座つて頭を下げる。
「早く繩を解け。」
と云ふと、六人は止むを得ず、人々の繩を解く。小行者はその繩で六人を縛り上げた。
「行屍はどうした？」
「洞へ歸つたと存じます。」
劉家の親子に、小行者が、
「御安心なさい。みんな退治してしまひますから。」
と云ふと、母も子もしきりに禮をする。
行屍大王は皮囊山に逃げ歸ると、石の上に半偈が座つて居るのが見える。「これはいゝ都合だ、此奴を捕へろ。」と駈け寄ると、猪一戒と沙彌とが左右から出た。一度に打つと、行屍大王は聲をも立てず死んでしまつた。
小行者は六人を引き出した。猪一戒は、
「六人から起つた事だ。打ち殺さう。」
と云ふが、半偈は、

「まあ待て。佛法は慈悲だ。こりや六人、お前は殺さない。心を改めろ。許してやる。」
と云ふと、みんな地に伏さつて、
「仰の通りに致します。心を改めます。」
と誓ふ。半偈は喜んで、
「それでよろしい。もう行け。」
と許すと、みんな禮をして去つた。
小行者は猪一戒、沙彌に行李を挑がせ、馬を牽かせ、半偈を扶けて西へ行つた。

三二

半偈の一行は道中無事で、千里ばかり行つた。と、途は上つて高い山の頂に來た。向ふの方には、澤山の人家があり、城があり、樓閣があり、寶塔があつて、大變な繁昌だ。半偈は、
「盛んな處だな。靈山が近い爲ではあるまいか。」
と問ふ。小行者は見廻しながら、
「そんな事はありません。あそこには明るく爽やかで、こんな暗い陰氣な事はありません。」
沙彌が云ふ。
「しかし、樓閣があり、塔がある。名のある都だらう。」
猪一戒は早く這入りたい。
「腹が減つた。何であつても、齋にありつきたい。」
と云ふ。云ひあひつゝ山を下つて七八里來たが、街には這入れないのみか、何も見えない。
「變だな。よく見えた街が見えんとは。」
と半偈が訝ると、

「高い處だから、はつきり見えたのでせう。こゝは低いから見えないのでせう。もう少し行つたら、街に這入られませう。」
と沙彌が推測する。
七八里また行つたが、やはり街は見えない。小行者は、
「私が一つ空から見ませう。」
と云つて上つて見ると、前はたゞ茫々とした平野で、城も人家もありはしない。「どうもをかしい。」と考へて居ると、忽ち地上から白い氣が立ち上る。それに連れて、俄に城や、家や、ちやんとした街並が現はれて、立派な大都會となつた。驚いて、
「こりやいけない。きつと妖怪の仕業だ。あの三人が圖套にかゝらなければいゝが。」
と急いで下りてもとの處へ來ると、誰も居ない。
「大變だ。彼奴に騙されたのだ。」
と思つたが、探し樣も、行き場處もない。で、また空に上つて見ると、城も樓閣もちやんとあつて、繁華な樣子は、外の都とちつとも變らない。で、また下りかけると、だん〳〵消えて、平地となつてしまつた。
尋ねようとしても誰も居ないので、小行者は唵字眞言を唱へて、

「土地の神、山の神は居ないか。」
と云ふ。幾遍も呼ぶが、誰も出ない。怒つて金箍棒を取り出して、
「何で、おれの云ふ事を聞かない？」
と叫ぶと、西南から、白い鬚の背の低い老人が杖を曳いて、飛ぶ樣に來た。
「土地の神です。あなたの御出ましとは知らないものですから、御迎もしませんでした。どうか御許しを……。」
「何だつて、おれの云ふ事を聽かない？」
「そんな事はありません。」
「ないと云ふのか。どうして呼んでも出て來ない？」
土地の神は云ふ。
「こゝは御覽の通り涯もなく廣いのです。私はこの西南に住まつて居ます。御聲も仲々聞こえません。で、こんなに後れましたのです。どうか御容赦を……。」
「それはいゝが、山の神はどうした？」
「此處は周圍が數十里もあつて、一面に平らです。山がありませんから、山の神は居ません。」
「山のないところがあるものか。」

神が答へる。
「では、申し上げますが、此處はもとからかうではなかつたのです。人の心から作り出した罪惡の海であつたのです。一日中波が立つて、人はそれに墮ち込むと、出る時がない恐ろしいところでした。佛がそれを御憐みになつて、恒河の沙で埋めて、こんなに平らにされました。ですから、高い山といふものがないのです。」
小行者は云ふ。
「海が埋められて平地となれば、人が住み、田地が出來、耕作が始まる譯だ。どうして、こんな原になつて居るのだ？」
「平地になつた時には、人も住み、田地も出來て、繁昌して居ましたが、佛が沙を運ばれた時、その中に澤山の雉の種が這入つて居ました。時が經つと、その種が罪惡の海の氣を受けて蜃となりました。その蜃が年功を積んで、氣を吐く樣になつて、人民も、田地も、みんな呑んでしまひました。それで、こゝはこんな地面となつて居るのです。」
「蜃がどうして呑む？」
「蜃が氣を吐きます。さうすると、城や、街が、みんな現はれて、世間通りの都になるのです。人がそれと知らずに這入ると、一遍に吸ひ込まれて、胃で消化されるのです。」

小行者は驚いた。
「さうすると、師匠も二人の弟も、行李も、馬も、みんな呑まれた事になるが……」
「あなたが守つて入らつしやるから、みんな御呑まれにはならんでせう。」
「さうではあるまい。『變だ。』と思つて、急いで空から下りて來たが誰も居ない。呑まれたに違ひない。」
「それなら、御呑まれになつたかも知れません。が、死なれはしますまい。」
「どうして？」
「蜃の胃は大きいのですから、呑まれたものは一月位活きて居ます。早く御救けになれば大丈夫です。」
「さうか。が、氣といふ奴は、何處が口だか、頭だか、腹だか分らないから、手がつけられない。御前は神だから分るだらう。」
「いや分りません。私は土地の事だけしか分りません。」
「しやうがないな。では歸つてよろしい。」
と云ふと、土地の神は許されたので、急いで歸つた。
小行者は鐵棒を提げて、東へ行き、西を尋ね、南にも、北にも巡り巡つた。遠方に黑い氣が立

つて居ると思つて行つて見ると、すつと消えて片影もない。一人で遣り様もないので、たうとう哭き出した。

半偈は小行者を出してから見ると、忽ち、城も、街もはつきりと眼前にある。實に大都會の光景だ。猪一戒は笑つた。

「眼ちがひでしたな。あんな賑やかな街がちやんと見えるではありませんか。兄貴に、何を御見させに御遣りになつたのです？　歸つて來て自慢さうに何か申すでせう……。構ひません。私どもは街に這入りませう。大きい寺がありませうから、そこで休んで、齋をみんなで一緒に喫べませう。私どもだつて相當なもの、兄貴一人を賴りとするには當らないです。」

「が、履眞が歸つて來て、分らないと困るだらう。まあ待つて一所に行かう。」

「もう午過ぎです。齋を受けてから、三四十里走るのは樂な事です。ぼんやりと歸るのを待つて、時を費すのはつまりません。」

半偈は早う西へ行きたいので、それに釣られた。

「さうだ。が、歸つて來て迷ふだらう。」

「その御心配には及びません。街に這入つて、寺に著くと、沙彌に馬を牽かせて門に立たせますれば、すぐ分ります。」

「さうだな。では行かう。」

と三人で城の門を目がけて進むと、長い橋がある。それを渡ると城内になつた。そこで見ると、あたりは黑々として遠近も分らない。半偈は、

「變だ。城内はどうしてかう暗い？　履眞の來るのを待たうではないか。」

猪一戒が答へて、

「城が大きい。塀が高い。どうしても明るくはありますまい。が、兄貴を待たなくてもいゝでせう。私が馬を牽きませう。沙彌に行李を挑がせて、御傍にしつかり著けませう。少し行けば、すぐ明るくなりませうから。」

と云ふ。半偈は仕方なしに五六歩進むと、一筋の腥い風が音を立てゝ吹いて來た。三十三天の剛風と云ふ具合に、强い力で内へ内へと吸ひ込んで行く。一行はそれに吹かれて、足も止められず、吸はれ吸はれて、數十里も行く心持がすると、一間の壁に衝き當つて、やつと止まつた。

半偈らは轉がり、轉がり、吸ひ寄せられたのだが、ぶつつかつた壁が柔らかなので、疵は受けなかつた。しかし、みんなあまりの事に呆然して何も分らない。半偈はやつと氣を取り戻して、

「自分らは一體活きて居るのか、死んだのか。」

猪一戒は身を顫はして何の答もしない。沙彌は氣を張つて、

「こんなに語が出るのですから、死んだのではありますまい。」
「一體こゝは何處だらう？」
「眞暗な中を吹き寄せられたのです。何處と云つて……。」
「猪一戒はどうした。どうして默つて居る？」
猪一戒は地に轉がつて居た。それと聞いて、
「こゝは、羅刹鬼國ではないでせうか。」
「いや、地獄だらう。」
と沙彌は云つて、猪一戒が眼を閉ぢて居るのを見て、脚で蹴つた。
「眼を開けろ。少し明るいぞ。」
猪一戒は急に眼を開けると、半偈が見える。喜んで、
「誰か窓を開けたか。」
「そんな事はない。心眼が開けたのだ。見えればよく見ろ。何處だか分るだらう。」
猪一戒は立ち上つてあちこち見廻す。と、こゝは部屋ではなくつて、一つの廟だ。急いで前に廻つて見ると、額が懸けてある。よく分らないが、土地の神の廟かと近よつてよく〳〵見ると、
「五臟之神」と書いてある。も一度眼を擦つて見ても、まさにさうだ。狼狽て、

「『腹の中に五臟の神がある。』と云ふ。自分らは呑まれて、腹に這入つて居るのだ。」
思はず泣き出して、
「御師匠様、飛んだ事です。私どもは、呑まれて腹の中に居ます。」
「どうして分る？」
「『五臟之神』と云ふ額が懸つて居ます。」
半偈は考へた。
「成るほど、さうだ。自分らは妖怪に呑まれて腹の中に居るのだ。山から見た時に街があつた。それが見えなくなつた。履眞が行くとまた見え出した。有つたり無かつたりするのは、妖怪が人を迷はしたのだ。城に這入る時渡つた橋は妖怪の舌だつたのだ。這入つて暗かつたのは妖怪の喉だ。吸ひ寄せられて來た此處は確かに腹の中だ。」
猪一戒は續けて哭く。
「死ぬるも生きるも夢だ、幻だ。何の泣くことがあるものか。」
「でも、その中に糞になつてしまひます。」
「大丈夫だ。自分らはなか〳〵死なないぞ。兄貴が、外からきつと救けてくれる。」
と沙彌が云ふ。

「それはむづかしい。」
「何でむづかしい？」
「今までは山の中か、水の中か、何處にあつても兄貴は尋ねあてた。が、今は腹の中に居るのだ。これがどうして分るものか。」
「なるほどさうだ。が、どうかして知らせたいものだ。が、それがむづかしい。」
半偈は聞きつゝ考へた。
「いや、むづかしくない。以前眞眞が傲來國花果山に居た時、自分は定心眞言を念じたが、それが響いて、あれの頭が痛んだ。で、それを頼りに尋ねて來て、自分の弟子となつたのだ。だから、あれを念ずればきつと分る。頭を痛ませるのは氣の毒だが、死生の境だ。仕方がない。やつて見よう。」
と云つて、ちやんと座つて念じ出した。
小行者は半偈を尋ねる方法もないので、泣きつゝ原に立つて焦つて居たが、頭がすこし痛み初めた。
「をかしいな。頭の痛い事は今までなかつたが。」
と考へて居ると止んだ。と思ふとまた初まつた。

「妙だな。」
と思ふと止み、暫くするとまた起つた。「はつ。」と思ひ當つた。
「師匠が定心眞言を念じて居られるのではないか。さうすると何處かに居て、自分を呼ばれて居るのだらう。大方妖怪の腹に這入つて居られるのだ。が、この痛みがあるところを見ると、まだ生きて居られるに相違ない。」
と喜んだが、しかし何處と云つて、取りかゝる處もない。「どうしようか。」と考へて居る前に、又城が現はれた。
「分つた。あの城の門は、妖怪の齒だらう。」
と空に上つて金箍棒を取り出して、「變れ。」と云ふと、幾丈もの長さに伸びた。で、自分は金剛のやうな大きな身體になつて、城を目がけて打つつけた。
東の方を叩くとがら〳〵と音がして城の牆が毀れる。西の方を打つと、寺や塔が崩れる。南の方、北の方、叩いて廻ると、樓も仆れる、家も壞れる。忽ちの間に、街は殆んどなくなつた。元來、この城は思つた通り、蜃の吐いた氣から出來たものだ。蜃はこれを作つて、人を呑み込む。これは蜃のいつもする事で、特に半偈等を吸ひ入れる積はなかつたのであつた。今小行者に打ち破られたが、氣から出來て居るのだから、身體には殆んど疵は受けない。たゞ大きな齒が數枚折

られたばかりであつた。が、それが痛いので、俄に雷の様な聲を揚げ、身を一振りして、眞黒な毒氣をむら／＼と吐き出した。

毒氣が立つと、眞黒な雲が起つた様、腥い臭がそれに連れて滿ちわたる。小行者は立つて居られないので、また空に上つて見ると、忽ち平地は黑い海となつてしまつた。

小行者は癪に障つて、

「妖怪奴、形を現はせばどうにかなる。が、毒氣ばかりを吐いたのではやつつけやうもない。どうしてやらう？」

と思つたが、思ひ附いた。

「蜃はもと／＼、海のものだ。海は龍王の支配だ。あれに賴んだら、どうにかなるだらう。さうしよう。」

と、また雲を飛ばして、西の海に來た。巡海夜叉がそれと見て龍王に通知する。龍王は急いで出て來た。

「あなたは此頃『唐僧の伴をして西天に行かれた。』と聞きましたが、どうしてこちらへ御出になつた？」

「仰の通、西へ向つて居ましたが、途中で妖怪が居て、師匠等を呑み込みましたので。」

と云つて、詳しく蜃の事を述べる。

「蜃は海のもので、あなたの御手下と思ひますが、どうしてあんなものを放して、人を御呑ませになる？……」

龍王は分辯をした。

「仰しやる通、蜃は海のものですが、實は雉の化けたので、魚や龍の仲間ではありません。しかし、もとより水に棲むもので、平地に居るべきではありませんが……」

「それはさうです。が、あそこのは違ひます。」

と云つて、「恒河の沙に雉の種が交つて、それが蜃となつたのだ。」と話して、

「こんな事はどうでもよろしい。今師匠たちが呑まれて居ますから、あなたの御力で捕へて早く扶けて戴きたい。御願ひです。」

と云ふと、龍王は承知した。

「そんな事とは知りませんでした。しかし、捕へるのは何でもありません。金肺珠と云ふのがあります。それを使へば、毒氣は消えますから、あなた御自身で御退治なさい。」

「それは結構、御願ひします。」

龍王はすぐに金肺珠を持つて、小行者と一所に雲に乘つて平地まで來ると、毒氣は滿ちわたつ

て、あたりは眞暗だ。
「蜃が氣を吐いて城閣を作り出すのは、鳥などを呑んで腹を充す爲に過ぎない。それにこんな毒氣を出して、大勢の人間を呑み盡くすとは許されん奴だ。」
と金肺珠を手にして、雲の端に出て、黒氣の上で轉がすと、不思議な事には黒氣は雪の解ける樣、端から消え出した。暫くする中に、すつかりなくなつて、忽ち龍ともつかず、龜とも云へない怪物の形が現はれた。龍王は、
「早く御退治なさい。」
と促す。小行者は一振り振つて、碗位の太さになつた鐵棒を怪物に荒々しく打つつける。
「貴樣の城は何處に行つた？　樓閣は何處に行つた？　街は何處に行つた？　よくも〳〵氣を吐いて人を吸ひ込んだな。」
とます〳〵打つ。妖怪は物は言へない。が、痛いので聲を立てずに、一所懸命に驅け出した。小行者は逃すものかと追つ駈けて打ちつけると、城の門のやうな大きな口を開けて、呑まうとかゝる。小行者はそれと見て、急に空に跳び上ると、妖怪も飛び上つて、山も搖ぎ、地も動くばかりの大聲を立てゝばつたりと仆れて、動かなくなつた。
猪一戒と沙彌とは腹の中で、妖怪が走り廻るに連れて、倒れたり、跌いたり、轉つたりしたが、

外面で、高い聲や、音が響く。沙彌は氣が著いて、
「兄貴が外で戰つて居るのではないか。おれたちは內から攻めてやらう。」
「さうだ。やらう。」
と猪一戒が云つて、五臟の廟を釘鈀で衝き崩した。沙彌は脊骨と思ふところを禪杖で衝き切つて穴をあけた。この一擊がこたへて、妖怪は地に倒れたのであつた。
半偈は轉され、轉されつゝ、眼を閉ぢて呆然として居たが、兩人の聲を聞いて、氣が著いて眼を開けると、日光がさし込んで居る。喜んで、
「もう門が開いた。出ようう。」
と云ふ。猪一戒が穴から頭を出すと、小行者が棒を構へて打たうと待つて居る。
「兄貴、間違へるな。おれだ。おれだ。妖怪はやつゝけた。」
と云ふと、小行者も喜んだ。
「御師匠樣はどうだ。」
「大丈夫。だが、穴が小さくて出られない。」
「よし、かうしよう。」
と小行者は棒を庖丁にして、脊骨の處から割いて二つにする。沙彌が中から禪杖で大きく開く。

忽ち半偈らは日光の中に立つた。

半偈が聞くので、小行者は龍王の話をした。と、半偈は龍王に厚く禮をする。龍王はそれを受けて西海に歸つた。で、四人は出立しようとするが、西南の方から百人以上の人々がやつて來た。それらが四人を圍んで禮をした。

「妖怪を御退治下さつて有り難うございます。」

「遠方なのに、どうして分つた?」

「土地の神さまが、御告げになりましたから分りました。御蔭で安樂になりました。どうぞ、一晩御泊り下さい。」

と云ふので、半偈等はそこに行つて、一晩だけ泊り、翌日はやく脱けて西へ向つた。

三三

半偈等は蜃の腹から出て、また西へ一月餘も行つた。と、遙かに山が見えて來た。半偈は、

「また山が見える。あれはいゝ處か、惡い處か。」

小行者が答へて、

「こゝは鷲嶺山から遠くはありません。高い山は無かつた筈ですが、どうしてこゝにあるのでせう?」

猪一戒は怖れて、

「また、何かあるのでせう。」

と脚をとめて歩かない。小行者は笑つて、

「大丈夫だ。行け、行け。」

と云ひつゝ行くと、山は近くなつた。見ると、大體松林だ。その眞中に道が一筋あるが、非常に急で、上に向いて上らなければならぬ程だ。半偈も怖くなつて馬を止める。小行者は、

「御心配なさいますな。人に聞いて見ませう。」

と山の下を廻る。が、人家はない。と、忽ち左手の松林の中で、磬の聲がする。喜んで、曲つた路を行くと、小さな庵があつて門口に、「猛省庵」と書いてある。半偈は三人を待たせて内に這入る。佛堂があつて、其處に年老の和尚が香を燒いて居る。半偈の來たのを見て急いで出て來て、

「何處から御出です？」

と問ふ。半偈は「唐から來て靈山に行く。」と話して、

「今見ますと、前の山は大變險しい樣ですが、登れませうか。上はどんな具合ですか、御教を願ひたいのです。」

と云ふと、和尚は、

「東からこゝまで御一人ですか。」

「いや、三人弟子が隨いて居ます。が、外面に待たせてあります。」

「この山を御通りにならうといふ。御話はしますが、長話になりますから、御弟子の方々も御這入り下さい。」

半偈は三人を呼び込む。和尚はそれを見た。

「變つた方ばかりですね。」

小行者は怒つた。

「貌が同じでは、道が廣くない。そんな事はどうでもよろしい。一體この山は今まで有つたものですか、どうです？」

和尚は驚いた。

「あなたは西天へ一度入らつしやつたのですか。」

小行者は問ふ。

「どうして分ります。」

「『以前あつたか、どうか。』と云はれるので。」

「通つた事はあります。雲で往來するのですから、下の事はよく分らない。この山は無かつた樣です。」

老和尚は點頭いて、

「さうです。ありませんでした。」

「妙ですな。山は人の力では出來ません。どうして無かつたり、有つたり？」

老和尚が力を籠めて云ふ。

「西方の佛地は今まで平で、何の邪魔物も設けてないので誰れでも行けたのですが、佛教が中國に盛んになると共に、怪しい奴が多くなつて、少しばかりの經を讀んで齋を貪り、一本の香を

炷いて飯を食ふ。祭をしたり、神迎へをしたりして、自分の利得とする。高僧の顔をして壇に上つて說教をして金錢を獻じさせる。何も分らない癖に、佛となり、祖師とならうと思つて、山の中に這入つて修行をして、父母の遺體を損つて、死ぬるまで悟りもしない。また、頭や指に火をともし、拍子木を鳴らし、鉢を叩いて街を既け歩いて布施を集めるものもある。すべて、惡事の限をして、佛の法を目茶苦茶にしてしまつて居る。で、佛如來は、中國に敎を布いた事を深く後悔されて、今は一字一言も妄りに傳へられず、『また恥を知らない坊主どもが來るか。』と心配されて、靈鷲山の後の嶺を半分分けてこゝに移して中分嶺として、東南の惡氣を遮つて居られるのですから、無かつたのが今ある譯です。」

半偈は點頭いた。

「それは分りました。が、どうして道が一本あるのです?」

「いや、それは佛の御慈悲で、『本當の佛心のあるものは遮る譯には行かないから』との仰で、一本道が開かれて居るのです。その上、山の頂に中分寺と云ふのが作られて居ます。そこには、大辨才菩薩が居られて、通していゝものは通し、通して惡いものは追ひ返される事になつて居ます。」

半偈は起ち上つて、

「どうも御敎有り難うございます。では、山に登つて大辨才菩薩の御許しを受けて西へ參りませう。」

と云つて出ようとすると、和尙は、

「あなたの御登りになるのはよろしい。が、あとの方はこゝに入らつしやる方がいゝでせう。」

小行者は云ふ。

「そりや、どうして?」

和尙は答へる。

「あなた方は門の上の字を見られたでせう。菩薩の書かれた三字の意味が御分りですか。」

「見ましたよ。『自分で自分の善惡をよく考へろ。』と云ふ事でせう。」

「あなたは自分でさうされましたか。」

「そんな事、毎度やつて居ますよ。」

和尙は頭を振つた。

「大きな事を云はれる。私はごまかされませうが、大辨才菩薩は、すぐ見拔かれますよ。」

小行者は笑つた。

「そんな事はない。あなたは見聞が狹いのだ。」

「さう云ふなら御登りなさい。下りて來ては駄目ですぞ。」
「今まで十萬里も歩いて、後戻りした事がない。御心配御無用です。」
半偈は取り成して、
「弟子どもが、失禮な事を云つて相濟みません。」
と云つて別れて山に登りかけた。
山の路は見た通、急であつた。一段、一段上り上つて、萬段にもなると、果して大きな寺がある。門に「中分寺」と云ふ大字の額が懸つて居る。半偈は、門外に弟子どもを待たせて、容を正して門に這入る。中には一人の小沙彌が樹の下に立つて、鶴が羽根を整へるのを見て居る。近づいて、禮をすると、小沙彌が見た。
「あなたは何方から來られた？」
半偈は來歴を述べて、
「私は善根も薄く、道念も淺いので、佛を拜むことは出來ますまいが、もし緣がありますならば、大辨才菩薩の御慈悲を御願ひして、御許を得て、西へ行きたいと存じます。」
と云ふと、小沙彌は聞いて、
「少し御待ち下さい。菩薩に申し上げますから。」

と云つて這入つたが、暫くして出て來た。
「菩薩は、あなたが、『解を御求めになるならば、通れない事になつて居る。』と仰せられます。」
半偈は驚いて、
「それはまたどうして……。」
小沙彌が云ふ。
「菩薩はかう仰せられます。『昔、陳玄奘が經を求めに來た。それに三藏眞經を持たせてやつたが、それから今になるまで、まだ一人も濟度して居ない。却つてこのために、自分の敎を破壞して居る。世尊もつく〴〵後悔して居られる。解を求めるのは經を求めると同じだから、こゝを通らせる事は出來ない。』と。」
「仰は御道理です。が、私が解を求めますのは、經を求めるのとは天地の差があります。」
「それはどうして？」
半偈が云ふ。
「佛は眞經を作つて人を濟度しようとなされます。ところが、東土の愚僧どもが、その眞解を得ないものですから、魔道に陷つて如來の御趣旨に違つた事になつて居るのです。私が骨を折つて、靈鷲山に參つて、眞解を戴きたい、と存じますのは、經を求めてから起つた誤を正し、且

つ經を造られた御心を廣めようとするのです。ですから、天地の差があると申すのです。」
「さういふ事ならば、もう一度申し上げませう。が、今は菩薩が趺座して居られる時です。暫く門外で御待ち下さい。」
と云つて内へ這入つた。半偈はそれに逆はず門から出た。三人は待ち受けて、
「菩薩の御檢はどうでした？」
「まだ御目にかゝらない、從つて御檢はない。」
と云つて前の事を云ふ。
「小沙彌が申し上げたら、菩薩が出て、御檢になるでせう。こゝで待つても晩くはなりますまい。」
と弟子どもは云つて待つたが、半時經つても誰も出て來ない。猪一戒が焦れた。
「おれたちは馬鹿だ。」
小行者が云ふ。
「どうして馬鹿だ？」
「馬鹿に違ひない。こゝの嶺にはちやんと道がある。何の邪魔物もない。番人も居ない。それだのに、どうしてぐず〳〵して通らないのか。あの和尚の云ふ事を聞いて、御檢などとは笑せるよ。」

沙彌が聞いて、
「そんなに云ふな。あの和尚が、まさか虚言は云はないだらう。」
と云ふが、猪一戒は、
「早く通らう。通らう。」
と云つて聽かない。小行者も、猪一戒の云ふ事も道理らしいので、
「どうしませう？」
と問ふと、半偈は、
「自分は待つ。一戒の云ふ事を聞くな。」
と云つて居る處へ、磬の音がする。侍者が出て一行を呼び入れる。半偈は衣を整へて堂に上つて、掌を合せて禮をして、小沙彌に云つた通を恭々しく述べると、大辯才菩薩は、
「御前の眞心は分つて居る。檢も濟んで居る。通つてよろしい。しかし、お前の弟子は檢る必要がある。名は何と云ふ？」
半偈が一々名を云つて、跪かせる。と菩薩は、
「どれが孫履眞か。」
と問はれる。

「私がそれです。」
小行者が一歩進んで出て答へる。
「お前の出身は何處だ？　誰の後だ？　何の功績がある？」
と問はれる。小行者は花果山の生れ、孫戰鬪佛の後、途々鐵棒で妖怪を退治して、師父を守つたことを述べると、菩薩は、
「それでは御前は人ではないな。孫行者の後で、前には罪があつたが、今は心を改めて功績を立てゝ居る。よろしい。關が開けば通れ。」
と云はれて、今度は、
「どれが猪一戒か。」
と問かれるが、猪一戒は聞えぬ顏をして見る。
「どうして返事をしない？」
猪一戒は出て、
「御用ですか。私が猪一戒。」
「どういふ出身だ？　何人の後だ？　どんな功績がある？」
「兄貴と同じです。」

「人が違へば違ふのが當然だ。同じ事があるものか。」
「それなら云ひませう。」
と云つて、高老莊が故鄉で、猪天蓬が親で、釘鈀を取つて、妖怪を殺して、師父を助けたことを一々列べる。菩薩は、
「それでは、御前は淨壇の遺腹だな。待つて居れ。」
と云つて、
「沙致和とはどれだ？」
「私です。」
と沙彌が出る。
「お前は出身は何處だ？　誰の後だ？　どんな功績を立てた？」
と問はれる。沙彌は、流沙河の出身で金身羅漢の弟子、禪杖で魔を降し、馬を牽いて師匠の伴をしてこゝまで來たことを述べる。
「はゝあ、沙羅漢の弟子か。みんな來歷がある。どれもよろしい。關を開けるから通れ。が、善根の淺い罪障のあるものは通り切れない。自分の所爲と思ふな。」
と蓮臺から下りて、

「みんなついて來い。」
と云つて前に立たれる。半偈等はその後に續く。と猪一戒は低い聲で、
「菩薩は妙だな。關もないのに開けるとは。」
「默つて居ろ。」
と小行者はたしなめる。
みんな寺の門を出ると、にはかに西の方に關が見えて來た。
「何時の間に出來たのだらう。久しく立つて居て何も見えなかつたのに。」
「菩薩は虛言は云はれまい。氣が著かなかつたのだらう。」
と云つて居るところに、菩薩は半偈に、
「關外に捷徑があるが、大道ではない。御前は關の外を通るか、また關の內を行くか。」
と云はれる。半偈は、
「私は大道を參りたうございます。どうか、關を御開け下さい。」
「よろしい。開けはするが、通るのが一寸むづかしい。」
「どんなでございますか。」
「頭を上げてあの額を見ろ。」

半偈が仰ぐと「罣礙關」と書いてある。半偈は、
「私は何の念もありませんから罣礙はありません。」
「よろしい。」
と云つて、菩薩は小行者ら三人を呼ばれた。
「御前たちは關の外を行くか、關の內を通るか。」
「私どもは弟子でございますから、師匠の通りに參ります。」
「それはよろしい。が、途中で障がある。その時、師匠は御前たちを構はれないぞ。もうよろしい。關を開けるぞ。」
と侍者に封印の紙を取らせると、門が廣く開いた。
「通つてよい。」
半偈は叮嚀に禮をした。で。一同喜んで門を通つて西へ向ふと、菩薩はすぐ門をしつかりと閉めさせられた。
半偈等は、門の外はたゞ平らな淸い爽かな處だと思つて居たが、出て見ると、雪や霰が降りかかる。路も高く低くつて曲りくねる。兩方の木だの、蔓だのが生ひ重なる。それが纏ひついて通さない。が、半偈は苦難を經て居るので、それを苦にせず、馬を策つてどん〳〵進む。小行者は

その馬について走つて行く。沙彌も荷物は重いが、頭を低れてずんずん進む。猪一戒も不平は云ひながら後れてはならんと後を趁つた。が、氷つた路は、油の上を走る樣、足が止まらないので、ばつたり倒れた。「痛い」と云ひつゝ起き上つたが、着物も荊棘にかゝつて引つ張つてもとれない。上の方をやつと取ると、裾の方がかゝる。右の方を取ると、左の方がかゝる。怒つて、力を入れて引つ張ると、離れはしたが、破れてしまひ、荊棘にかゝつて顏までも擦傷を受けた。それのみならず、餘つた力でひつくりかへると、頭が石の角にぶつかつて、血が滴り出した。それでも氣を張つて起き上つて見ると、半偈等三人は、知らん顏で前をどん〳〵走つて居る。

「どうぞ、ゆつくり行つて下さい。待つて下さい。」

と叫ぶが、誰も答へはしない。

後れてはならんと、猪一戒は急いで山のさきを曲つて前を見るとたんに、一陣の風が起つて砂を捲き上げて吹き着けた。止むを得ず立ち留つたが、眼は開けられない。暫くして少し開けて走り出すと、思はず木の根にぶつかつてばつたり仆れた。眼が暗んで物が分らなくなつた。しかし止まつても居られないので、起き上つて一足づゝ跌きながら進んで行くと、雪と霰とが顏を打つて來る。見る〳〵中に降りしきつて、大きな耳にも、長い口にもすつかり積もつた。初めは拂ふことも出來たが、しまひには積もつては氷り、氷つては積つて、氷で作つた身體の樣、やつと動

けるだけになつた。

半偈は馬を飛ばしつゝ、猪一戒の後れた事も知らず、一心に進んだが、半時ばかり經つと、前に大きな嶺が見え、そこに大きな寺が現れた。

「寺が見える。何處だらう？」

「行つたら分るでせう。」

と云ひあひつゝ、門に著いて馬から下りて見上げると、額に「中分寺」と書いてある。驚いて、

「また中分寺と云ふのがあるのか。」とよく〳〵見ると、やはり以前の中分寺だ。たゞ見えないのは西の方に見えた墨鬼關だけだ。

「どうしたと云ふのだらう。」

と呆れて居る處へ、山の下で逢つた和尙が門の中から現はれた。にこ〳〵して、

「あなたゝちは、どうして通らないのか。」

と云ふ中に、小沙彌も出て來た。

「あなた方は御檢も濟んだのに、何故西へ行かずに、御歸りになつた？」

と云ふ。半偈はやつと悟つて、

「私、大顚は心に油斷があるので、こんなに同じ處を、行つたり來たりしたのでせう。菩薩の御

前に出て懺悔しますから、御案内を願ひます。」

と云ふ。小沙彌は、

「それには及びません。菩薩はちやんと、かういふものを渡せ、と仰せられました。」

と紙に書いたものを取り出す。半偈が受取つて見ると、

「寺後寺前同一寺、　關無關有總非關、
眞修不掛何曾礙、　慧性常明可恕頑、
獨有野心貪狡甚、　故生荊棘道途難、
須教煎洗從前意、　一體靈山拜佛顏。」

と讀める。半偈はよく意味が分つて再三禮を述べたが、猪一戒が見えない。きつと後で困つて居るのだと思つて、小沙彌に、

「猪一戒は心がまだ淨まりませんが、私の弟子で手足同樣であります。どうぞ、前の罪を御許しになつて隨いて來る樣に、菩薩に御願ひして下さい。」

「よろしい。もう許されて居る。」

と云つて門に這入つた。半偈がふりかへつて見る間もなく、雪、霰、砂にまみれ、破れた頭から血を出しながら、猪一戒が跌き跌きやつて來た。

「飛んだ道だつた。ひどい目に逢つた。」

とくど〳〵云ふ。半偈は聲を荒らげて、

「馬鹿奴。ぐず〳〵云ふな。みんなおのれの心からだ。心が淨ければ、自分たち同樣、樂に歩けるのだ。見ろ、菩薩の御示しを。」

と、詩を渡して見せる。猪一戒は讀んで恐れ入つて、また見るとちやんともとの門前に來て居るので呆れて語もない。たゞ門に向つて頭を下げて、

「自分の惡かつた事がよく分りました。これからは慎みます。」

と云ふ。

「さう後悔すればよろしい。早く行かう。」

と通ると、今度は安々と行ける。で、山を下つて更に西へ進んだ。

三四

山を下つてから、半偈等は西へ進むと、この邊は高い山も大きな河もない。たゞ山の光が艶やかで、水の色が澄んで、些しも險惡の樣子がない。歡びつゝ樂しみつゝ行く中に村が見える。半偈は、

「どうも腹が減つた。何處かで齋を貰つて來ないか。」

と云ふ。村の口に來ると、家々がきちんとしてをり、道がちやんとついて居る。極めて整つた村であるが、不思議な事には、鷄も、牛も、羊も見えない。また、田も、畑もなく、稻も、麥も、蔬菜の類も見えない。

「變つた處だな。」

一軒から門の扉を開けて、老人が出て來た。鬚も眉も眞白だ。竹杖をついて居る。鼻を空に向けて、

「今日は蓮花の匂ひが高い。又和尙たちが來るのかも知れん。」

と云ふ。小行者は見て、近づいて、

「失禮ですが、私どもは齋を戴きたいのです。」

と云ふと、老人は、行者の異樣な顏を見、また後につゞいた猪一戒、沙彌の姿を見て驚いて、思はず身顫をしつゝ、

「不思議、不思議。こんな人を見た事がない。蓮の下の龜か、蛇かゞ化けたのか。一所になつては堪らん。」

と逃げかゝる。小行者は、

「さう仰しやるな。私どもは通りがゝりの和尙です。腹が空きましたから、齋を戴きたいので。戴けばすぐ行きます。」

老人は笑つた。

「齋ならば御這入りなさい。通りがゝりの人なら構はない。」

と云つて內へ請ずる。半偈は、

「御齋を賜はるとは辱ない事です。」

と云ふ、老人はその立派な容態を見て、にこ〳〵して、

「あなたと違つて、三人の御方は變つて居ますな。」

「いや、貌は變つて居りますが心は一つで……。」

老人は默頭いて、
「御道理、御道理。」
と云ひつゝ、客部屋に導くと、飯、菜、菓子、饅頭がちやんと整つて、ことに湯氣が白く立つて居る。全く前から用意したやうだ。
「どうぞ召上れ。」
と老人が云ふ。半偈と小行者とは驚いて、
「どうしてかう早く出來たのだらう？　來るのを知つても居ないのに……。料理するたつて、列べるたつて大變だ。どうしたと云ふのだらう。」
と云ひあつて喫べる。猪一戒は材料も料理もいゝので嬉しくて堪らない。風が雲を拂ふ樣、落花が水に流れる如く、一碗、一碗、一皿、一皿といつまでも喫べて、苦しいほど腹を膨らした。半偈はそれの濟むのを待つて、起つて、
「御蔭で十分戴きました。辱うございます。」
と禮をするが、老人は、
「いや、各々に備はつた衣食ですから、御禮には及びません。」
半偈はその語の譯が分らない。

「私が齋を御願ひしましたのに、間もなくこんなに御叮嚀な、御待遇に預りましたのは、意外の幸です。が、ちよつとした料理でも、かなり手數と時間がかゝりますのに、瞬く間に卓一杯の御馳走が並んで、しかも、非常に旨味のはどう云ふ譯でせう？」
老人が云ふ。
「あなたは遠方から見えたので、この村の事を御存じないのです。こゝは『蓮花村』と云つて、小さな村ですが、万人以上も住んで居ます。これらはみんな父母から生れたのではなく、善行の積もつたものが、蓮花から自然に出て來たものです。ですから、飲食も普通の人とは違ひます。井戸も竈もありません。田畑もありません。」
「でも、種も蒔かず、井戸も、竈もなくては、出來るものはありません。御馳走はどうして出來ます？」
「佛の御蔭です。念が起ればすぐそれで出來るのです。あなたに齋を御上げしようと思へば、それだけの心持で自然に備はるのです。ですから、こゝには奪ひあひ、取りあひなどと云ふ事は一度だつてありません。」
半偈は感心し、且つ歡んで、
「私は西の佛地では、『衣を思へば衣を得、食を思へば食を得る。』と聞きましたが、本當だと云

ふ事が、今はじめて分りました。辱い次第です。」

小行者は、

「まことにこゝは極樂だな。あはれなのは東土の國だ。人々はみんな苦の海に沈んで浮き上がられも出來ない。氣の毒な事だ。」

と云ふと、老人は、

「東の國と仰しやいましたが、何か御關係がありますか。」

と問ふので、半偈は唐の生れで、天子の勅命で西方雷音寺に行くことを話すと、老人は、

「それでは東の國は、西の地方に敵ひませんな。私は前世にどんな修行をしましたか、こゝに生れて、御語のやうに、衣を思へば衣、食を思へば食、と云ふ樂な生活をして、全く佛の御蔭と有り難く思つて居ります。しかし妙なもので、これがいかんと云ふのが現はれました。それは近ごろ西の村に和尚が一人參りました。冥報と云ふ名ですが、眉が濃く、眼が大きく、色も黑く、皮膚も粗い。それが云ふには『佛教は東の國に一番正しく行はれて居る。そこでは高僧が一人出て、それが山に這入れば、龍は降るし、虎は恐れるし、市に居れば、鬼も神もみんな從ふ。經を講ずれば、龍女が玉を捧げ、天女が花を散らす。王侯も天子も殘らず歸依して、旗や天蓋が守り、香花燈燭が圍む。數千人も集まつて、何か法事をすれば百万位の喜捨がある。こんなのが佛教を榮えさせ、衆生を導くのだ。この西の方では、空々寂々で、家族の樂しみもなし、夫婦の嬉しさもなし、君臣の歡もない。死ぬ時はないが、木石と同じだ。東の國では、寺は王宮よりも立派で、和尚は人民の半分位。何處の寺でも經の聲がし、どんな庵でも鐘の響がする。喜捨をすれば貧者も富者になり、物吝をすれば富者も貧者になる。佛教で云ふ應報は些しも違はずすぐ現はれる。これが本當だ。』と云つて、東教と云ふ教を開いて弟子を集めて經を讀み、東の國に生れる事を望まして居ます。これが擴がつて、此の村でも、おひ〳〵信仰者が出來さうです。自分もどう云ふものかと疑つて居ます。もし、これが本當とすれば、あなた方の事になりますが、あなたは東の國に生れられたのですから、そこに居られてよかりさうです。それなのに、どうして西の方へ入らつしやろのですか。またどうして『東の國は惡い。こゝがいゝ。』と仰つしやるのですか。」

半偈は聞いて歎息した。

「いや驚きましたな。佛法は清淨が極致です。それは私の申すまでもありません。もし、東の國が、西の國に勝つて居れば、私はこゝまでは參りません。その和尚の云ふ事は本當ではありません。そんな理窟で人を惑はすとは飛んだ事です。こゝは靈山に近くつて、佛の慈悲の雲を毎日仰いで居られるし、又蓮花から生れて、本來の智慧を持つて居られるのですから、眞逆その

和尙の出たらめを、誰も聞き入れにはなりますまい。」

「いや、さうでもありません。頭のいゝものは、その和尙の說を非難しても居ますが、說き破る事が出來ません。それに、その和尙は術があつて、人を呪ひますが、それにかゝるとすつかり眠つてしまひます。その處を覗つて人を殺さうとします。また一丈ばかりの光があつて、それがしつかり護つて居ますから、刀でも劍でも、傷けることが出來ません。こゝの村のものは力もありませんから、しかたなく從つて居る人もあります。あなたは西へ入らつしやるのに、きつと西の村を御通りになる。が、なろたけそつと御通りなさい。分ると、『東土を脈つて西方へ行くのだから、味方ではない。』と云つて、きつと留めて行かせはしますまい。」

牛偈はきつとなつて、

「私は佛の御弟子ですから、怖いからと云つて、是非の辯明をしない譯には行きません。先に行きまして、何とか致します。」

と云つて、禮をして立つて行く。老人は門の外まで送つて出て、

「冥報和尙は魔力があります。十分御氣を御著けなさい。」

と云ふと、牛偈は默頭いて、また禮をして馬に乘つて出かけた。

すこし行つてから牛偈は小行者に、

「あの老人は、冥報和尙と云ふのは妖僧で、魔法を使ふと云つたから、用心して行かう。」

「大丈夫です。私が居ます。御心配に及びません。」

と進んで居る中に一つの村に這入つた。「こゝが西の村だな。」と思つて見ると、蓮花村と大體同じだが、往き交ふ人々に活氣があつて、蓮花村の靜かなのとは違つて居る。そこの一番繁華なところに行くと、猪一戒は蓮花村の馳走を思ひ出した。

「どうだ兄貴、こゝで齋を貰つて行かうではないか。」

「まだ午を過ぎて間もないのだ。腹も減らない。向うの村に行つてからにしようよ。」

「でも、こんな重い荷物を挑いで居るのだ。喫はなければ歩かれはしない。」

牛偈は云ふ。

「齋を貰ふのは止めにしろ。變な和尙の居る處だ。早くそつと通らう。」

「こんな盛んな處で、齋を貰はず、小さな村で一碗半碗だけ受けるのは情ないです。どんな和尙が居つたつて、一寸喫ふのに半時もかゝりません。どうして分るものですか。」

小行者はが嘲つた。

「此奴の腹の蟲がまた動き出したかな。」

牛偈が口を挿んだ。

「行きたいなら三人行け。自分は腹がいゝから喫べられない。」
「行きません。私も腹が減りませんから。」
沙彌も同ずる。
「私も同じです。參りません。」
猪一戒は怒つた。
「みんな行かんで、おれ一人遣らうとする。行くと明日また『彼奴は食ひしんぼうだ。しやうのない奴だ。』と惡口を云ふだらう。よし〳〵、貴樣の眼の前で死んで見せるぞ。」
と荷物を挑いでどん〳〵駈け出す。半偈は心配した。
「どうだ。あれはよく食ふから、本當に腹が減つたのだらう。齋を貰はうか。」
「いゝですよ。腹が減つたつて、死にもしますまい。何處まで行くか。ついて行きませう。」
と遠くから跡を趁うて行く。
猪一戒は怒つて駈け出したが、分れ道に出て來た。ところへ大勢の人が、一群一群湧くやうに出て來る。街はすつかり塞がつて、通る隙間もない。行李を挑いで居るので、あちらに障り、こちらにぶつかり、どうしても通れない。しかたがないので立ち留まつて、そばの店で尋ねた。
「どうしてかう人が多いのです?」

「御覽なさい。あの壁の貼札を。今日は十五日で冥報和尙が齋を下される。それを受けようと云ふので、この騷ぎなのです。」
「通りがゝりのものでもいゝのでせうか。」
「誰だつて構ひません。大變な御馳走ですよ。」
猪一戒は口から涎が流れ出した。
「遠いのですか。」
店の人は指さした。
「あそこです。譯はありません。」
「食はないのは損だ。」と思つて、猪一戒は、すぐ樣人を押し除け、押し除け來て見ると、大きな寺だ。
這入ると、大殿があつて、その臺上に變な形の一人の和尙が高座に上つて說敎して居る。それを繞つて聞いて居るものは、數へられないほどの人數だ。猪一戒はそれとは知らない。「齋を出すのだ。」とばかり思つて、人を分けつゝ、
「お前たちは近くの人だ。おれは遠方に行くのだ。齋を早く食はして貰はう。先を急ぐんだ。」
と云ふ。押された人々が見ると、大きな耳、長い口の奇怪な樣子なので、驚いて路を開けた。猪